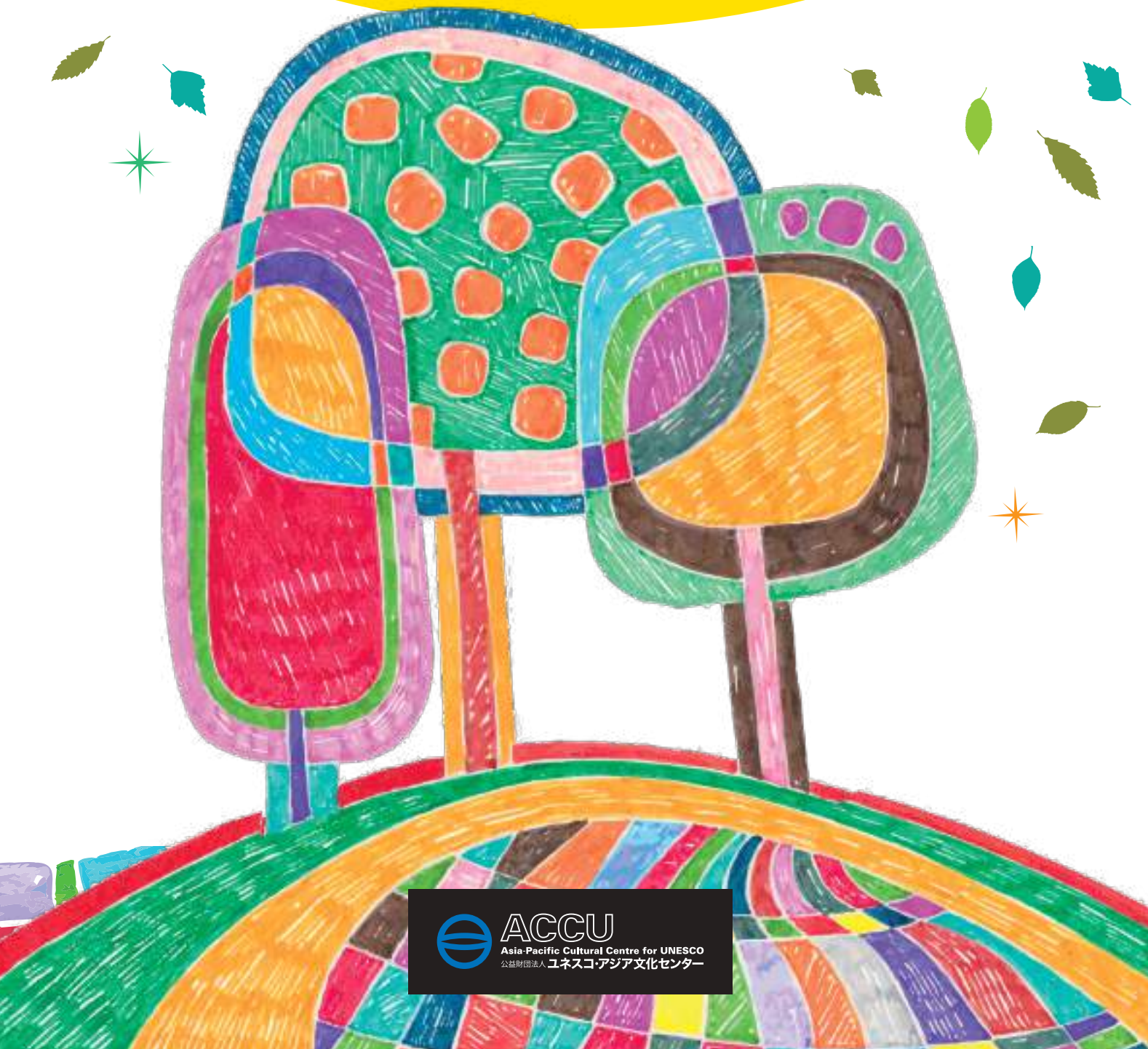
キラリ発進！

サステイナブルスクール

～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～

Vol.3



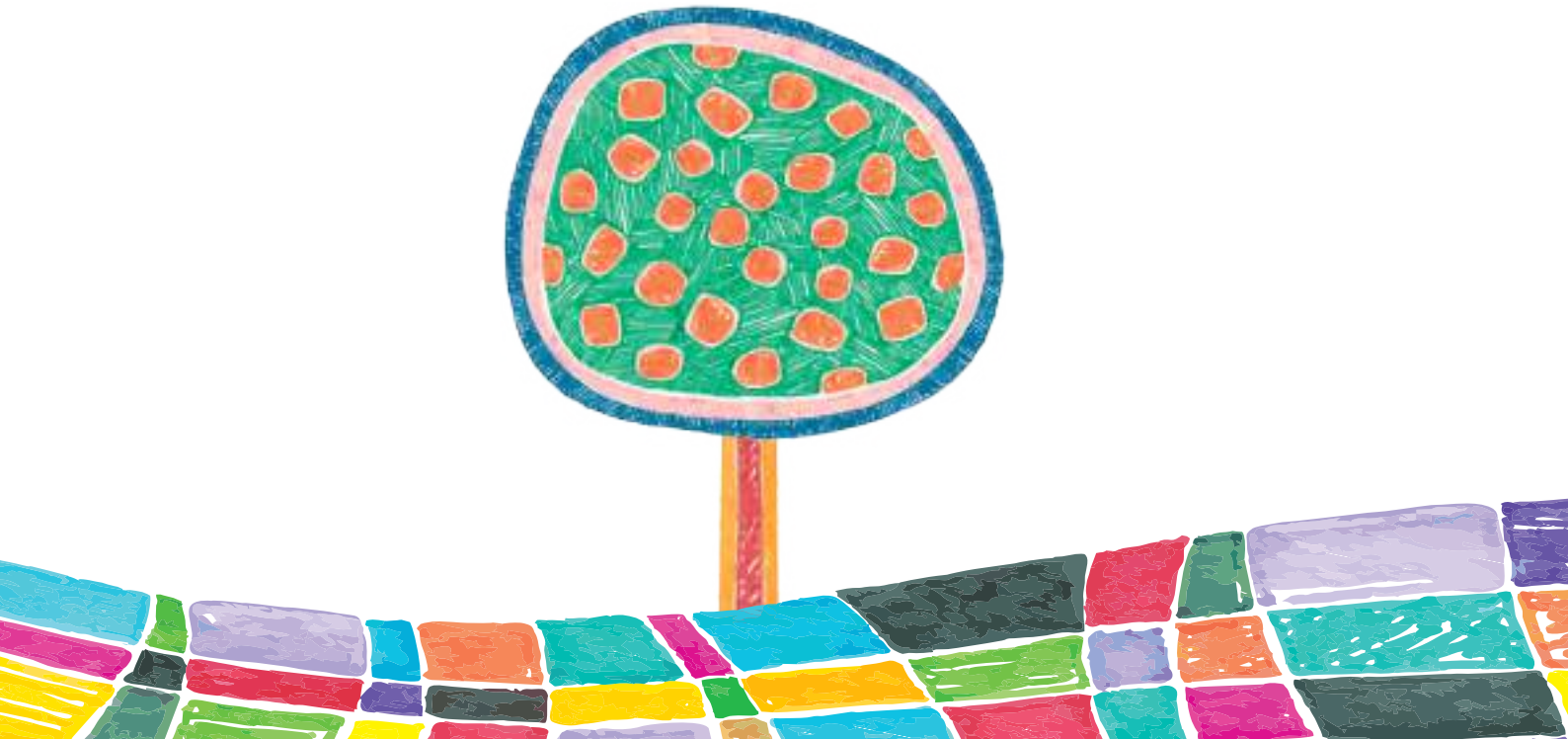
ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター

キラリ発進！

サステイナブルスクール

～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～

Vol.3



はじめに

2016 年 9 月、平成 28 年度日本／ユネスコパートナーシップ事業（文部科学省委託事業）の一環として始まった本事業ですが、今年度、ユネスコ活動費補助金グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業「ESD の深化による地域の SDGs 推進事業」に名称を改め、3 年目を迎えることとなりました。

2016 年に全国公募を経て、持続可能な開発のための教育（ESD）に継続的に取組み、そしてさらなる飛躍のポテンシャルがあると評価された学校 24 校が「サステイナブルスクール」として採択されて以来、これらの学校は教育を通じて持続可能な未来、社会を構築することを目指して活動に励んでいます。本書は、そんなサステイナブルスクールの軌跡をまとめたものです。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、各校にて ESD を深化させ、尚且つ外部へもその工夫を発信することができるよう、ESD の専門家の皆様とともに「ホールスクールアプローチ・デザインシート」を開発しました。デザインシートはユネスコ本部が提案する「ホールスクールアプローチ指針」の 4 領域をもとに、より日本の学校現場の現状に即した形に改良したものです。2 年目の終わりには、24 の個性豊かなデザインシートがつくられ、そして更新され、日々の教育活動に活かされています。本冊子では、「ホールスクールアプローチ・デザインシート」をもとに各校の活動がどのように深化したのか、また 24 校が 3 年間を経てどのように変容したのかがまとめられています。

ACCU は、ユネスコスクール事務局としてユネスコスクールの加盟申請や加盟後の活動支援をおこなってきました。また、ユネスコ本部の事業として国内外のユネスコスクールの国際協働学習プロジェクトの運営実施の経験、さらに海外との教職員交流プログラムの企画運営の実績などを活かして、今後もユネスコスクールに限らず様々な学校や地域の ESD の推進に貢献していく所存です。

最後になりましたが、本書をまとめるにあたり、ESD の専門家の皆様、そして実践の主役であるサステイナブルスクールの皆様には原稿を執筆頂くなど大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。ACCU は、今後も皆さまとともに持続可能な未来へ向けての変化の担い手でありたいと願っています。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
ユネスコスクール事務局

目 次

はじめに ---- 3
目　次 ---- 4
サステイナブルスクールとは ---- 6
ホールスクールアプローチ・デザインシート活用方法 ---- 8

サステイナブルスクールの活動　採択校一覧および分布図 ---- 10

気仙沼市立面瀬小学校 ---- 12
気仙沼市立唐桑小学校 ---- 14
登米市立米谷小学校 ---- 16
江東区立八名川小学校 ---- 18
杉並区立西田小学校 ---- 20
目黒区立五本木小学校 ---- 22
横浜市立永田台小学校 ---- 24
新居浜市立惣開小学校 ---- 26
阿南市立桑野小学校 ---- 28
大牟田市立吉野小学校 ---- 30
石巻市立牡鹿中学校 ---- 32
大田区立大森第六中学校 ---- 34
名古屋国際中学校・高等学校 ---- 36
福山市立福山中・高等学校 ---- 38
静岡県立下田高等学校南伊豆分校 ---- 40
広島県立安古市高等学校 ---- 42
愛媛県立新居浜南高等学校 ---- 44
独立行政法人国立高等専門学校機構　福島工業高等専門学校 ---- 46
千葉県立桜が丘特別支援学校 ---- 48
愛知県立みあい特別支援学校 ---- 50
ＮＰＯ法人　東京賢治の学校　東京賢治シュタイナー学校 ---- 52
特定非営利活動法人　横浜シュタイナー学園 ---- 54
特定非営利活動法人　京田辺シュタイナー学校 ---- 56
認定ＮＰＯ法人　箕面こどもの森学園 ---- 58

気候変動の取組を経て ---- 60
自主研究会について ---- 62
【寄稿】持続可能な社会に向けて育まれるべき萌芽の誕生 ---- 66
【寄稿】ホールスクールアプローチの深化に貢献したサステイナブルスクール事業 ---- 67
【寄稿】事業推進委員の見つめた 24 校 3 年間の変容 ---- 68
【寄稿】サステイナブルスクール 24 校と歩んだ 3 年間 ---- 69
【寄稿】サステイナブルスクールの3年間を Reflection（見直し / 見通し）する ---- 70
【寄稿】多様な違いと出会い、対話した深い学び ---- 71
ユネスコ･アジア文化センター（ACCU）について ---- 72

【略語一覧】

ACCU---------- 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
ASPnet---------- ユネスコスクール
ASPUnivNet---------- ユネスコスクール支援大学間ネットワーク
DESD---------- 国連持続可能な開発のための教育の 10 年
ESD---------- 持続可能な開発のための教育
GAP---------- グローバル・アクション・プログラム
SDGs---------- 持続可能な開発目標
MDGs---------- ミレニアム開発目標
UNESCO---------- 国際連合教育科学文化機関

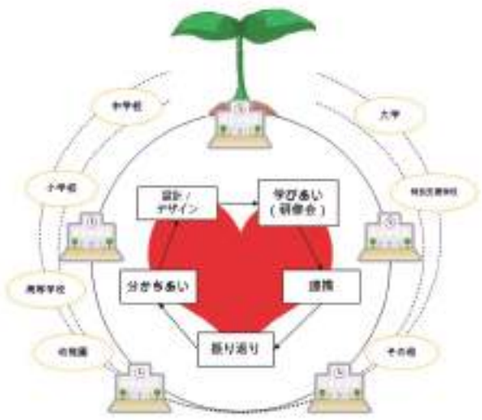
サステイナブルスクールとは

サステイナブルスクール開始の背景

国連持続可能な開発のための教育の 10 年（以下、国連 ESD の１０年）の最終年となる 2014 年 11 月に、日本政府とユネスコの共催により、愛知県名古屋市および岡山県岡山市において、「ESD に関するユネスコ世界会議」が開かれました。その会議において、国連 ESD の 10 年の後継目標として「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が発表され、同年第 69 回国連総会にて採択されました。以降、ユネスコ主導の下、2015 年から 2019 年までの 5 年間、ESD はこの GAP に基づいて推進されています。

また、国内に目を向けると、日本ユネスコ国内委員会に設置された ESD 特別分科会が「国連 ESD の 10 年」の成果と課題を整理し、平成 27 年 8 月に「持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて」と題する報告書を取りまとめました。本報告では、今後の ESD 推進方策として、ESD 普及のための取組と並行して ESD を深化させる（実践力を高める）ための取組の強化がうたわれています。学校全体で、また他校や地域との連携も視野に入れて活動を実践し、持続可能な未来の実現に向け、教育を通じて一人ひとりが変容していくことが期待されています。

このような経緯を受け、日本におけるユネスコスクール事務局である公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、文部科学省より日本 / ユネスコパートナーシップ事業の委託を受け、平成 28 年度より 2 年間 ESD 重点校形成事業としてサステイナブルスクールへの支援をおこないました。3 年目の今年度は、平成 30 年度ユネスコ活動費補助金グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業「ESD の深化による地域の SDGs 推進事業」として集大成を迎えました。



サステイナブルスクール形成の目的

本事業は、教育を通じて持続可能な社会を構築するために、実践的な取組をおこなう意欲のある学校を公募・選定し、その取組を発展および深化させるために必要な支援をする事業です。学びあい（研修会）→連携→振り返り→分かちあい→設計／デザインのサイクルを繰り返すことにより、サステイナブルスクールに留まらず、ESD の活動を広げつなげていきます。サステイナブルスクールの役割は以下の通りです。

- 本事業の支援を受けて、サステイナブルスクールが事業に関わるすべての人に学びをもたらす活動を展開し、自らの思考・行動の変容によって成長すること
- 他のサステイナブルスクールの成果を自校の取組に生かし、サステイナブルスクール同士も連携しながら多面的な魅力を持つ学校へ発展すること
- サステイナブルスクールが本事業の支援を受けて ESD 実践校として自立し、周辺の他の学校や地域・家庭を先導して ESD の深化に寄与すること
- サステイナブルスクールの寄与により ESD が教育現場そして地域社会に根付き、持続可能な社会を構築していくこと
- 加えて、その活動を世界へ向けて発信し、国際的に展開していくこと

平成 30 年度サステイナブルスクール活動スケジュール

平成３０年度ユネスコ活動費補助金グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業
「ESDの深化による地域のSDGs推進事業」スケジュール

時期	内容
2018 年 7 月	**第一回サステイナブルスクール研修会** ホールスクールアプローチ・デザインシートをもとに、各校の取組を共有し学び合う機会を持ちました。また、各校の３年間の変容について振り返り、変容のきっかけを辿りました。
2018 年 10 月	**ニュースレター「サステイナブルスクール交流便り」** **「サステイナブルスクールの先生に会いに行こう」を発行**
2018 年 12 月	**第二回サステイナブルスクール研修会** ８つの評価項目（※）に沿った自己評価をもとに、３年間の振り返りをおこないました。また、次年度以降の自校のアクションプランを考えるとともに、事業終了後も継続的にネットワークが機能していくためのアイデアを出し合いました。
2018 年 12 月	**ESD 推進ネットワーク全国フォーラム 2018 でのポスター展示・発表** サステイナブルスクール３校（気仙沼市立面瀬小学校、名古屋国際中学校・高等学校、NPO 法人箕面こどもの森学園）が各校の成果物の展示を通して取組を発表しました。
2018 年 12 月	**第１０回ユネスコスクール全国大会** サステイナブルスクール２校（杉並区立西田小学校、福山市立福山中・高等学校）が分科会「ホールスクールアプローチで学校をデザインしよう」で活動報告しました。
2019 年 1 月	**第一回サステイナブルミーティング（参加者自主研究会）** 第二回サステイナブルスクール研修会で出たアイデアをきっかけに、有志が集い３年間の活動で子どもたちがどのように変化したのか、またこのネットワークを継続していくためにはどうしたらよいのか、具体的な話し合いがおこなわれました。

※サステイナブルスクール 8つの評価項目（参考）

	審査項目	内容
1	**ビジョン** (Vision)	●持続可能な未来の実現に向けた目的が明確に示されている。 ●活動目的・目標と、活動内容に一貫性がある。
2	**継続性** (Continuity)	●今後 3 年以上継続的に活動していく意志が明確にある。 ●持続可能な社会を担う次世代を育てる明確な意志がある。
3	**バランス** (Integration)	●社会・経済・環境がバランスよく教育活動に反映されている。 ●持続可能性に関する内容が明確に教育活動に反映されている。 ●教育課程への位置付けが適切になされている。
4	**前に踏み出す** (Empowerment)	●学習と実践活動がつながっている。 ●学習者・実践者が対話を通して主体的に参画できるカリキュラムを作っている。 ●批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力などを育む教育を行っている。
5	**刷新性** (innovation)	●既存の枠にとらわれず、ダイナミックに ESD 活動を創り上げている。または、創り上げようとしている。
6	**協働** (Collaboration)	●教師間がチームとして協働し、ESD 活動を推進している。または、その環境が整っている。 ●多様なステークホルダー（地域、家庭、NGO/NPO、企業）と協働し、教育活動を実践している。または、しようと努力している。 ●国内や国外であらゆる学校・校種と相互に学びあう活動を展開している。または、しようと努力している。
7	**変容** (Transformation)	●6. を踏まえ、それを学校に還元し学校も常によき変化を求め、柔軟である。 ●学校が社会を変容させる拠点であることを認識し、学校と社会の相互の学びを積極的に推進している。
8	**広がり**（汎用性） (Scalable/Replicable)	●重点校として、あらゆる学校が活用し実践することができる可能性のある活動を実践する意欲を持っている。 ●実践に見出される工夫や方法、理論等を他の学校にも拡大し、協働していく高い意欲がある。

Copyright ; ACCU

事業推進委員の紹介

● 市瀬 智紀
宮城教育大学　教授
専門は ESD、国際理解教育、多文化教育、日本語教育。地域の小中高等学校の国際化・多文化化への対応を支援するとともに、ユネスコが国際的に推進する価値教育にキャッチアップするための研究をおこなう。

● 石丸 哲史
福岡教育大学　教授
専門は人文地理学、地理教育、ESD。教育課程に SDGs（持続可能な開発目標）を展開していく方法を研究するとともに、九州地方を中心としたユネスコスクールの支援と ESD の推進をおこなう。

● 永田 佳之
聖心女子大学　教授
専門は ESD、比較教育学、国際理解教育論やオルタナティブ教育論。ユネスコ等の国際協力事業に 20 年以上従事する。「ユネスコ／日本 ESD 賞」国際選考委員会委員を務めるなど、世界の ESD の理論と実践に詳しい。

● 成田 喜一郎
自由学園最高学部　特任教授
専門はホリスティック教育、歴史学、カリキュラム開発。中学校社会科教諭・副校長として長く現場に身を置き、実践者としての視点も併せ持つ。

● 吉田 敦彦
大阪府立大学
副学長／教育福祉学類教授
専門はホリスティック教育 / オルタナティブ教育、人間形成論、教育哲学・教育人間学。日本のシュタイナー学校に初期から関わり総合的研究を進めるなど、多様な学びを追求している。

ホールスクールアプローチ・デザインシート活用方法

デザインシートの概要

本事業は、ESD を推進していくために必要な概念とされているホールスクールアプローチの実践を中心に据えています。ホールスクールアプローチは、教育内容やカリキュラムの再方向付けだけでなく、コミュニティ内の機関やステイクホルダーからの協力を得ながら、持続可能な開発に応じたキャンパスや学校運営も必要とします。したがって、ホールスクールアプローチを実践していくためには、持続可能性の文脈に沿って学校を変革していくことが重要です。

どの学校でもホールスクールアプローチを導入しやすいようにと、UNESCO の提案するホールスクールアプローチ指針[1]を参考に、事業推進委員と ACCU は「ホールスクールアプローチ・デザインシート」（以下、デザインシート）を作成しました。作成のプロセスについては平成 29 年度発行本冊子 Vol.2[2] を参照ください。

デザインシートを活用する利点は以下の通りです。

- **サステイナブルスクール各校のビジョンを可視化することができる。**
- **ビジョンに沿った活動を可視化し、配置することにより自校にとっての「羅針盤」となり得る。**
- **各校の個性がわかりやすくなり、他校の取組との違いが見えやすくなる。同時に、他校のよい取組も導入しやすくなる。**
- **外部への発信する際のキーアイテムとなる。**

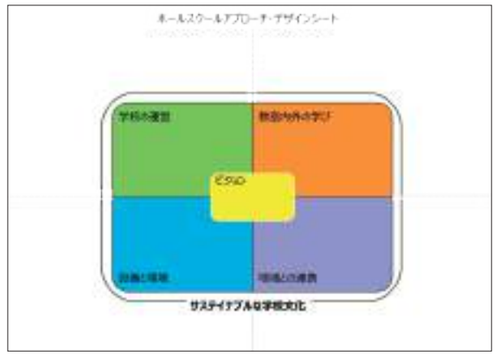
このように、デザインシートは決して各校の取組を統一化するものではありません。各校の取組を、ホールスクールアプローチを軸に「共通」の枠組みで整理することによって、活動の可視化を図ることが大きな目的となっています。

ホールスクールアプローチ デザインシートの活用方法

デザインシートは、本事業で開発したツールですが、ESD の実践を可視化し、学校全体で取組んでいきたいと考える全ての学校に役立つものです。具体的な記入方法を以下に示しますので、ぜひ活用してみてください。

【記入する際の留意点】

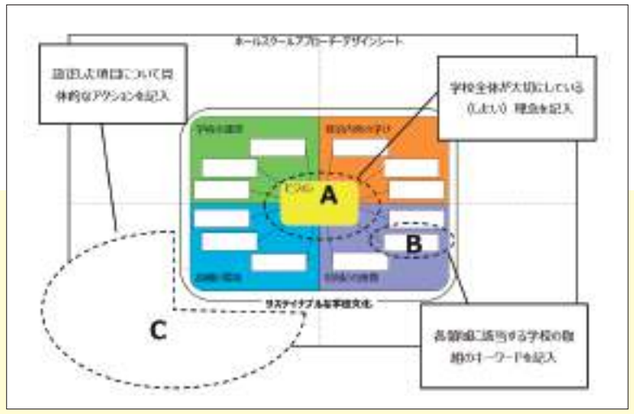
デザインシートを作成する際、学校管理職のみで決定するのではなく、学校に関わるなるべく多くのステイクホルダーとともに作成してください。ホールスクールアプローチを学校に浸透させていくためには、学校全体で合意するプロセスそのものが重要です。実施者が納得することが、実施の際の障壁を低くし、取組をさらに加速させます。まずは、ご自身の学校で大切にしてきたことを話し合い、学校全体でビジョンを共有するところから始めてみてください。



Copyright: 事業推進委員、ACCU

1 ユネスコ本部が2016年～2018年に実施した「気候変動をテーマにしたホールスクールアプローチ実践プロジェクト」のファシリテーター用ガイド（UNESCO(2016). Getting Climate-Ready A guide for schools on climate change.）に記載されている。サステイナブルスクールからも10校が参加し、気候変動をテーマにした活動を展開した。

2 「キラリ発進！サステイナブルスクール～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～Vol.2」（pp.10~11）（2018年3月）



【項目例】

学校の運営	教室内外の学び	設備と環境	地域との連携
・職員会議 ・PTA ・校内集会 ・年間学習指導計画 ・生徒会（児童会） ・委員会 ・ボランティア組織 ・学校協議会 …など	・国語 ・総合的な学習の時間 ・道徳 ・運動会 ・修学旅行 ・遠足 ・部活動 ・校外学習 ・出前授業 ・プロジェクトベースの取組 …など	・校舎（図書室、職員室など） ・校庭 ・エネルギー設備（電気、水道、窓など） ・給食 ・学校菜園 ・ゴミ …など	・自治会 ・行政機関 ・公営施設（公民館・図書館など） ・近隣の学校 ・NGO･NPO ・企業 ・高齢者施設 …など

A.　ビジョンについて

子どもも先生も地域の方々も学校に関わる全ての人たちにとって大切にしているキーワードのことです。文章にしてしまうと、特に大切にしたかったはずのコアの部分が希薄化してしまうため、B の項目や C のアクション（実践）との接合が難しくなってしまいます。したがって、なるべく短い言葉もしくは単語を当てはめることをおすすめします。学校にある特色や学校教育目標、学校経営ビジョンを参考にしながら学校が大切にしている言葉を探し出してみてください。

Q: 学校が大切にしているキーワードは持続可能な未来に向かうキーワードですか？

B．各領域の項目について

４つの各領域には、該当する取組の項目を挙げてください。項目数はいくつでもかまいません。各項目はできるだけ具体的に設定されることをおすすめします。また、共通してあてはまるものに関しては、どちらかよりウェイトが大きいと思われる領域にご記入ください。

学校の運営とは：学校に関わる人たち（子ども、教員、保護者など）が学校づくりについて考える場、参画するプロセスそのものを指します。例えば、職員会議や年間計画などはここに当てはまります。

教室内外の学びとは：日ごろの教師と子どもたちの学びの場とそのプロセスを指します。授業中の学習だけでなく、幅広く授業内外の学びの場と捉えてください。例えば、個々の教科・領域はもちろん、各種行事なども入ります。

設備と環境とは：学校やその周辺の設備および設備を稼動させるための環境について示しています。例えば、校舎、図書室、電気などが入ります。

地域との連携とは：学校に関わる校外の人との連携について示しています。例えば、地域の方、企業、民間団体などと連携されていればこちらに入ります。

C．アクション（実践）記入欄について

設定した各項目に対する具体的なアクションを記入します。ビジョンを通して各項目を見た場合、どのような実践になるか考えてみてください。それぞれのアクションは、持続可能な未来の実現のための一歩となります。新たな試みはもちろん、既存の活動であっても、関わる人たちが活動を通して変容していくことが大切です。

Q: 実践に関わる全ての人たちが主体的に活動できる取組になっていますか？

Q: 一人一人が楽しみながら取り組むことのできる実践になっていますか？

以上、基本的な記入方法や記入に際しての考え方を示しましたが、デザインシート活用の一番の目的は、学校に関わる全ての人が自分たちの「こうありたい」と思う共通の姿を描き、そのために同じ行動指針を持って様々な活動に取り組んでいける学校文化を創ることです。その目的に資するのであれば、デザインシートを用いる学校が自分たちの使いやすいようにアレンジしても全く問題ありません。実際、個性豊かな 24 校のサステイナブルスクールの中には、自分たち流に発展させたデザインシートを作成しているところも少なくありません（P12 ～の事例紹介参照）。ぜひ、自分たちの想いを大事にして、各校オリジナルのデザインシートを作るプロセスそのものを楽しんでみてください。

サステイナブルスクールの活動

2016年９月に24校のサステイナブルスクールが採択されました。次頁より、成長を続ける各学校の2018年度の取組と３年間の成果について紹介します。

サステイナブルスクール採択校一覧

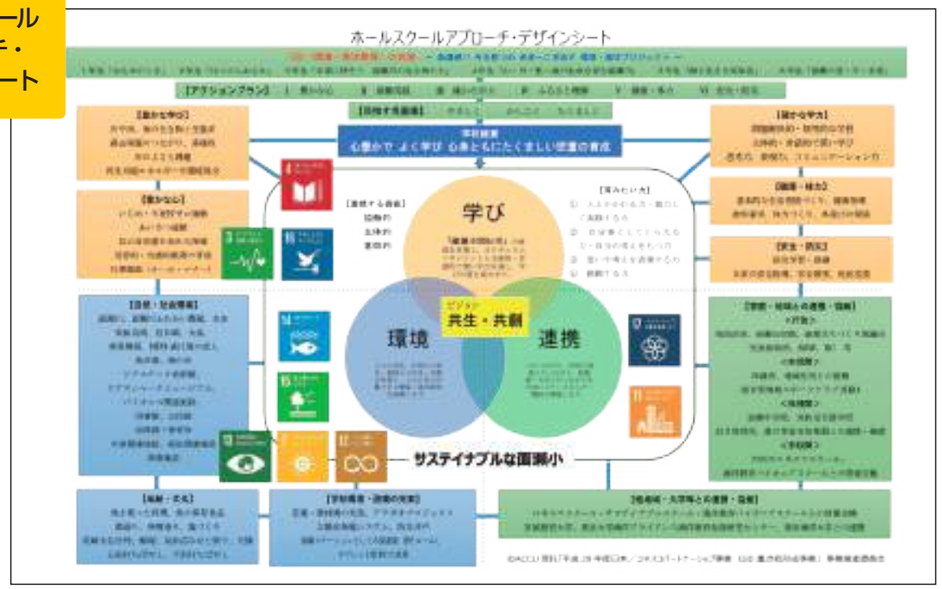
	学校名	校種	都道府県
1	気仙沼市立面瀬小学校	小学校	宮城県
2	気仙沼市立唐桑小学校	小学校	宮城県
3	登米市立米谷小学校	小学校	宮城県
4	江東区立八名川小学校	小学校	東京都
5	杉並区立西田小学校	小学校	東京都
6	目黒区立五本木小学校	小学校	東京都
7	横浜市立永田台小学校	小学校	神奈川県
8	新居浜市立惣開小学校	小学校	愛媛県
9	阿南市立桑野小学校	小学校	徳島県
10	大牟田市立吉野小学校	小学校	福岡県
11	石巻市立牡鹿中学校	中学校	宮城県
12	大田区立大森第六中学校	中学校	東京都
13	名古屋国際中学校・高等学校	中・高一貫校	愛知県
14	福山市立福山中・高等学校	中・高一貫校	広島県
15	静岡県立下田高等学校南伊豆分校	高等学校	静岡県
16	広島県立安古市高等学校	高等学校	広島県
17	愛媛県立新居浜南高等学校	高等学校	愛媛県
18	独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校	高等専門学校	福島県
19	千葉県立桜が丘特別支援学校	特別支援学校	千葉県
20	愛知県立みあい特別支援学校	特別支援学校	愛知県
21	ＮＰＯ法人　東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校	その他	東京都
22	特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園	その他	神奈川県
23	特定非営利活動法人 京田辺シュタイナー学校	その他	京都府
24	ＮＰＯ法人　箕面こどもの森学園	その他	大阪府

KEYWORD
環境学習　その他

気仙沼市立面瀬小学校

面瀬発‼　今を見つめ　未来へ漕ぎ出す　環境・海洋教育プロジェクト

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

つながり　かかわりを生かした　学びの創造

「おもせのしき～おもせっこまつりをひらこう」(1 学年 ･30 名 生活科、図画工作科等 9~11 月)
児童と幼児が季節感あふれる手作りのおもちゃで遊びながら交流した。学習・給食交流、面瀬フェスティバル見学等幼保小の交流を計画的に位置付け、活動を通して交流の楽しさと自己の成長を実感することができた。

「はっけんおもせ」(2 学年 ･46 名 生活科､図画工作科等 6 月､11 月)
まち探検では、場所だけでなく人の思いに着目させた。自分と地域のつながりに気付き、支えてくれる人への感謝と地域への愛着を強くしている。

「未来に残そう面瀬川の生き物たち」(3 学年 ･38 名 総合的な学習の時間、理科等 5 月 ~12 月)
面瀬川の生き物を「面瀬川水族館」で飼育し、観察を続けた。観察を通して生まれた疑問や課題について実験や専門家への質問を通し明らかにし、図鑑を作り、発信した。生き物同士のつながり、面瀬川の自然の豊かさを再確認し、大切にしていきたいという思いをもった。

「山川里海　生命を育む面瀬川」(4 学年 ･54 名 総合的な学習の時間、理科等 5 月 ~12 月)
3 年生からの学習のつながりを大切に、主として面瀬川流域をフィールドに学習した。米づくり、水質検査、流域探検等を通し、自分たちの生活が川や海等の水辺環境に影響していることに気付いた。豊かな自然環境を守るために取組めることは何かを考え、発信した。

「海と生きる気仙沼」(5 学年 ･62 名 総合的な学習の時間、社会科等 5 月 ~2 月)
海の環境、産業、食等の視点から課題をつくり、個人やグループで探究。気仙沼と海のかかわり、海の環境や資源を守るためにできることを考え、話合いを通して深めた。他の実践校との交流は、児童の意欲を喚起し、思考を広げたり深めたりすることにつながっている。

「面瀬いちおしプロジェクト～面瀬の昔・今・未来」(6 学年 ･58 名 総合的な学習の時間、国語、社会科等 9 月 ~2 月)
面瀬地区まちづくり協議会等と連携し、将来を見据えた地域の在り方を考える活動をおこなった。地域のよさや問題点をテーマに探究課題を設定、地域に出て探究し、地域を見つめ直した。学習成果を地域に発信し、未来のまちの創り手としての意識を高めた。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

「面瀬川」という生物多様性や山・川・里・海のつながり等について学ぶ最適な環境が整っていることが本校の魅力。震災があってもその輝きは失せない。環境に働きかけ、未来のまちを支える子どもを地域と共に育てる。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校
ESD を学校教育の核に据え、「自分の考えをもち行動する子ども」の育成を目指し、指導の方向と重点について職員の共通理解を図り、系統的なカリキュラムを作成した。教科や特別活動等日々の活動を充実させ、落ち着きと潤い、活力のある学校を目指した。PTA やまちづくり協議会等との連携が保護者や地域の ESD に対する理解を促進し、関心を高め、協働の地域づくりに繋がっている。

教員
体験を通して考え、環境に働きかける子どもの育成を目指し、授業を実践した。他校との交流や研修を通して得られた情報を参考にしながら､「授業づくりの視点」「地域素材の生かし方」等を見直し、カリキュラムや指導方法を改善することができた。地域の「ひと･もの･こと」の価値を再認識するとともに、教員自身が､学校づくり､授業づくりの楽しさを味わっている。

児童生徒
自分たちの生活は、自然環境と人間、社会と深くかかわっていることを知り、地域を支える人々の存在や身近な自然のよさ、自分たちにできることを継続して行うことの大切さに気付くことができた。探究的な学習過程を通し、課題意識や人とかかわる力、協力して実践する力の向上が見られた。

次年度以降の活動

今後も、活動を通し地域のよさと課題を知り、環境の保護や地域づくりに参画･貢献できる児童を育成する。そのために、地域人材、地元企業、大学、各専門機関との連携の継続と強化に努める。また、児童の意欲を喚起し、考えを深めたり広げたりするために、他校とのネットワークを生かし、持続的な交流やプロジェクトをおこなう。

SDGs を念頭に、連携機関より助言をいただきながら、気候変動、生物多様性、持続可能な生産と消費等地球環境問題に関わるカリキュラムをさらに充実させる。また、児童の実態や地域の復興状況に合わせ、カリキュラムの改善を図る。児童や地域の価値観や行動の変容を意識し、中長期的な視点で取組む。

学校情報

学校名	気仙沼市立面瀬小学校	TEL	（0226）22-7800
児童・生徒数	288 名	E-MAIL	omose-sho@kesennuma.ed.jp
住所	宮城県気仙沼市松崎下赤田 58 番地	HP	http://www.kesennuma.ed.jp/omose-syou/

KEYWORD
環境学習　その他

気仙沼市立唐桑小学校

未来につなげよう！豊かな海を！― カキ養殖体験活動を中心とした取組を通して ―

ホールスクールアプローチ・デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

1 活動名　「リアスサミット in 唐桑～思いをつなぐ、唐桑から。～」（海に関わる体験学習を通して学んだことを発信する場）

2 日時・場所・教科　平成 31 年 1 月 24 日 (13:15 ～ 15:45)・唐桑小学校体育館・生活科と総合的な学習の時間

3 参加者　全校児童 (101 名)、保護者 (31 名)、本校職員 (19 名)、海洋教育を支えてくださった地域の方等 (10 名)、気仙沼市・南三陸町学校関係者 (16 名)、東京大学海洋アライアンス関係者・宮城教育大学関係者等 (5 名)
※参加予定だった唐桑中学校 1 年生 (32 名) はインフルエンザ流行のため参加を見合わせた。

4 ねらい

（1）地域の豊かな自然体験学習や多様な交流を通して得たことを様々な視点から見つめ直し語り合うことによって、ふるさと唐桑のよさについての理解を深める。

（2）学習で得たこと･自分で考えたことを発表することによって、お世話になった関係者の方々への感謝の気持ちを表す。

（3）本校における海洋教育の取組の成果を地域に発信することによって唐桑地域で学ぶよさを共有し、学校と地域との連携を深める。

（4）唐桑中学校の生徒の参加を通し、海洋教育における小中児童生徒の交流を図る。

5 内容

（1）**開会行事**　6年児童が話し合って決定した今年度のテーマ「思いをつなぐ、唐桑から。」の決定理由も含めて「リアスサミットin唐桑」開催の趣旨説明をおこなった。(6年生が進行)

（2）**ステージ発表**　1年生、2年生全員が海に親しむ活動やサケの稚魚飼育等について、自分で描いた絵を使って発表した。

（3）**ポスターセッション**　3年生以上の全児童が 19 のブースに分かれ、設定した課題を解決していく中で分かったことや感じたこと、まだ分からないこと等を参加者に伝え意見交換をおこなった。（唐桑中 1 年生の取組についてはポスターを掲示）

（4）**みんなで語ろう**　「思いをつなぐ、唐桑から。」をテーマに前半は児童が 6 つのグループに分かれ、6 年生の司会で唐桑のよさや地域の人々の思い等を話し合った。後半は世代を超えた参加者全員で「唐桑で生きる」ことについての思い等を語り合い思いを共有した。

（5）**閉会行事**　各学年の代表による感想発表と参観者からの感想を聞き、本会を振り返った。さらに、有識者から総括をいただき今年度のサミットの成果と課題を明確にすることにより、児童は次年度の活動への意欲を高めることとなった。(6 年生が進行)

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

豊かな自然を生かした体験学習と、児童の成長を考える地域の人々との多様な交流に支えられた海洋教育を実践している。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

校長のリーダーシップの下、特色ある教育活動として海洋教育を学校運営の重点に位置付け実践できた。特に、ESD・海洋教育についての共通理解を図る機会を多く持つことによって、教職員一人一人が目的意識を持って参画する体制の構築を図り、児童の自己有用感、よりよく生きようとする意欲を高める組織とすることができた。さらに、教職員が地域の支援者と保護者との信頼関係構築のための働き掛けをおこなうことによって、学校・家庭・地域の協働体制を整えることができた。

教員

海洋教育における取組の強化のために個々の活動の意義と教職員一人一人の役割を確認し合うことで、教職員それぞれが自信と誇りを持ち、創意工夫ある教育活動を実践することができた。特に各学年の体験学習計画立案の際には、担任の意向を実現できるよう支援することによって、担任が児童の興味・関心により即した新たな学びを児童に提供することができ、児童がより意欲的に取組む姿に担任は達成感を味わうことができた。また、教職員の資質向上のための校内研修の機会を設け、本校の目指す ESD の取組等について共有することで、教職員は本校の海洋教育と SDGs との関連について意識するようになった。

児童生徒

地域から学ぶよさを実感させるため地域の方とのつながりを大切にした活動を多く取り入れたことによって、児童は、漁業に携わる方を身近に感じ、漁業に誇りを持って仕事をする生き様に触れることができた。そのことは、児童が自分なりの生き方について考えるきっかけとなった。また、「リアスサミット in 唐桑」を全校の取組として位置付けたことにより、体験したからこそ感じたこと、気づいたこと、分かったことを自分の言葉で多くの人に分かりやすく伝えようと努力し、表現力や発信力の向上につながった。さらに、地域の自然や地域の人々から学ぶ活動を通して、児童はふるさと唐桑に生まれたことに誇りを持つことができ、地域とのつながりや自然環境を尊重する態度を身に付けることができた。

次年度以降の活動

海洋教育を通して自己の成長を実感し、それを自信につなげることによって様々な活動に積極的に取組むことができる児童を育成する。特に、SDGs に関する理解を深め教室内外の学びを充実させることによって、海洋教育を通した地域社会への働き掛けや未来につながる自発的な行動を引き出す。また、サステイナブルスクールとして、唐桑地区の幼・小・中の海洋教育の取組を先導し、ESD の深化に寄与する。さらに、児童の活動を発信することにより地域や家庭にも ESD の理念を普及していく。

学校情報

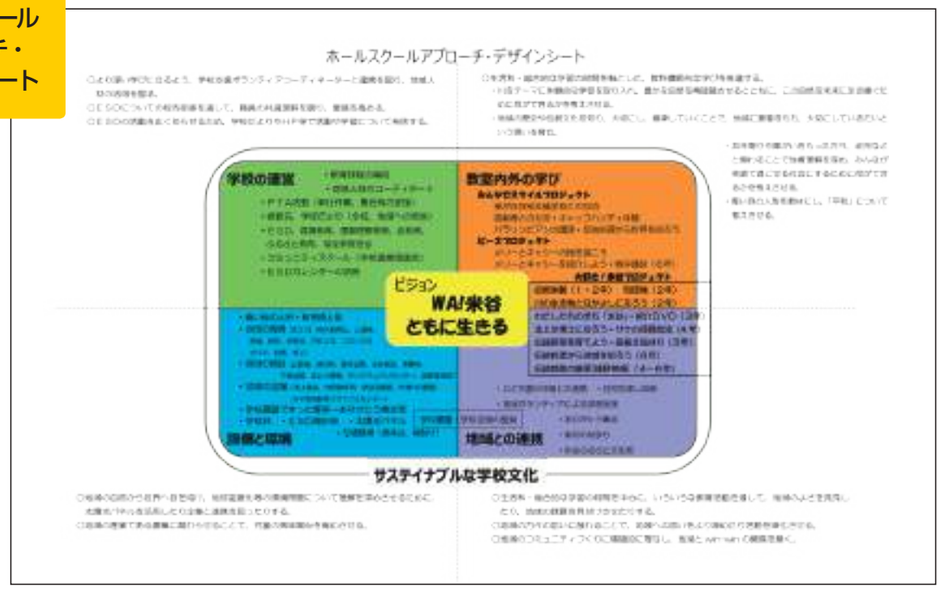
学校名	気仙沼市立唐桑小学校	TEL	（0226）32-3142
児童・生徒数	101 名	E-MAIL	karakuwa-sho@kesennuma.ed.jp
住所	宮城県気仙沼市唐桑町明戸 208-6	HP	http://www.kesennuma.ed.jp/karakuwa-syou/

登米市立米谷小学校

WA！米谷　－ともに生きる－

KEYWORD
世界遺産や地域の文化財等に
関する学習　その他

ホールスクール
アプローチ・
デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

「大好き！米谷」プロジェクト

- **公園で遊ぼう（1 年 13 名・生活科・9 月）**
  地域の公園での虫探しや川遊びを通して、米谷の自然の豊かさに触れた。
- **川の生き物となかよしになろう（2 年 24 名・生活科・6 月）**
  学区内に流れる相川（北上川支流）の生き物調査を地域の方の協力を得ながらおこなう中で、自然に触れ合う楽しさや、身近な川のすばらしさや大切さを感じ取ることができた。
- **米谷のまちを探検しよう（2 年 24 名・生活科・6 月・11 月）**
  米谷の町探検を通して、町の施設を知ると同時に、「米谷のいいところは?」と質問をすることで、町の方々の「米谷」に対する思いを知り、改めて米谷のよさに気付くことができた。
- **紹介しよう！わたしたちのまち「米谷」（3 年 11 名・総合・5 月～ 11 月）**
  地域の施設を見学したり話を聞いたりしながら米谷の歴史等を調べ、紹介ＤＶＤにまとめることで、米谷のよさを発信しようという意欲を高めることができた。
- **北上川博士になろう（4 年 19 名・総合・5 月～ 2 月）**
  北上川の自然や災害の歴史を調べることで、この環境を守り、川と共に生活していくにはどうしたら良いのかを考えた。また、サケの採卵・孵化・飼育・放流の体験を通し、改めて自然の雄大さや環境保全、命の尊さを学ぶことができた。
- **登米市の伝統野菜を育てよう（5 年 22 名･総合･5 月～ 12 月）**
  種を継承し育てる活動を通して、登米市の野菜のすばらしさや種を守ってきた方々の思いを知ることができた。また、食材として給食に提供し、他の学校にも伝統野菜のよさや大切さを発信する中で、伝統野菜継承への思いを強く持つことができた。
- **登米市の伝統料理から世界の「食」を考えよう（6 年 12 名･総合・5 月～ 2 月）**
  伝統料理から地域の文化や歴史に目を向け、他地域の伝統料理と文化の結び付きを調べた。また、世界の「食」へと視野を広げ、いろいろな国の食事情を知り、自分たちの生活を見つめ直すきっかけとなった。
- **伝統芸能を引き継ごう（3 ～ 6 年 64 名・総合・5 月・2 月）**
  保存会の方々の協力を基に地域の伝統芸能である「細野神楽」を引き継ぐことで、地域の一員としての自覚を高め、伝統を守っていく大切さに気付くことができた。
- **ありがとう集会（全校児童 100 名・学校行事・11 月）**
  お世話になった地域の方々を招待し、各学年で育てた野菜を使っての芋煮を会食したことで、改めて地域の方々に感謝の思いを高めることができた。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

カモシカが現れる裏山やサケが遡上する川等豊かな自然に囲まれた環境にあり、その自然を存分に味わえる体験活動を重視した学習活動がキラリポイント。また地域との絆の強さや「青い目の人形」の存在も特長である。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

- 学校経営方針に ESD を位置付け、学校全体で取組む土台ができてきた。
- 以前まであった学習や活動を ESD の視点で見直し、6 年間を見通したカリキュラムにすることで、本校の特色ある教育活動に結び付いてきた。
- 今まで以上に地域とのつながりを意識し、学校運営協議会や地域コーディネーターとの連携を図るようになった。

教員

- 研修会等をおこなうことで少しずつ ESD の理解が深まり、ESD の視点で地域の「あるものさがし」や学習活動に取組むことが多くなった。
- 「ともに生きる」という共通のビジョンを持ち、いろいろなアプローチの仕方を考えながら授業や活動をおこなっている。

児童生徒

- 自分→地域→世界と、視野が広がりつつある。
- 地域のよさを改めて感じ、進んで発信しようとする姿が見られるようになってきている。また、発信先から評価をいただくことが喜びとなり、「次は・・・」「もっと！」といった発言や態度が見られるようになった。
- ESD に関連した体験的な学習を多く取り入れることにより、理解の深まりと同時に充実感や達成感の高まりが見られ、自己有用感にもつながっている。

次年度以降の活動

- 今まで取組んでいた活動を継続・深化させていく。特に、世界への視野を広げさせていく。
- 新しい活動にも積極的に取組み、発信していく。（防災教育については、次年度の総合的な学習の時間の計画に位置付ける。）
- 交流先の学校と話合いをおこない、次年度も交流を継続していく方向で内容の確認をしていく。

学校情報

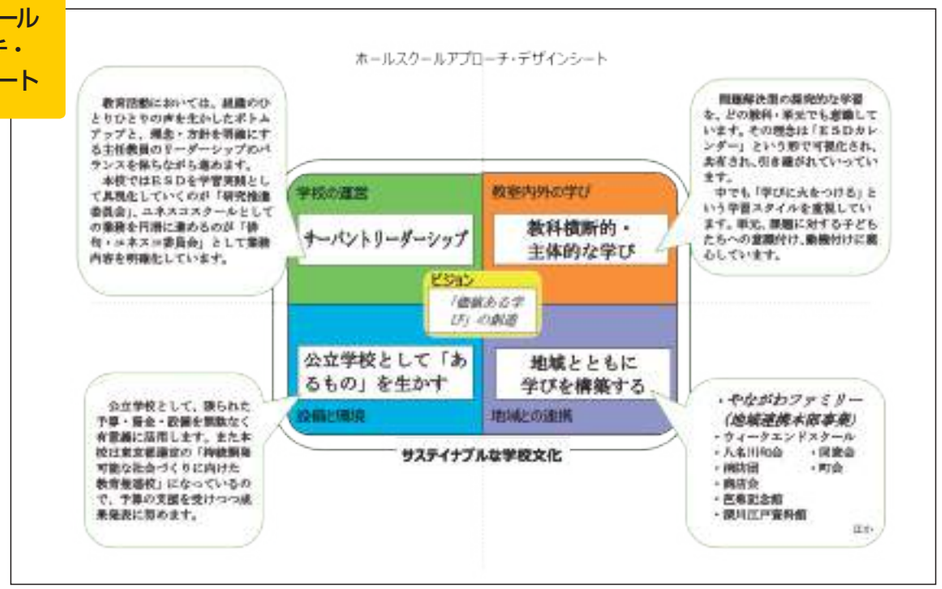
学校名	登米市立米谷小学校	TEL	（0220）42-2006
児童・生徒数	100 名	E-MAIL	maiya-syo@city.tome.miyagi.jp
住所	宮城県登米市東和町米谷字越路 75	HP	https://www.tome-svr.jp/~maiya-syo/html/

江東区立八名川小学校

「ＥＳＤ」「地域密着」「愛」＝未来を豊かにしていく学び

KEYWORD
防災学習　生物多様性　気候変動　エネルギー学習
環境学習国際理解学習　世界遺産や地域の
文化財等に関する学習　その他

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

1. ESD を中心とした学校運営

子どもの学びを深める ESD カレンダー（カリキュラム・マネジメント）

ユネスコスクール４つの基本分野、国連システムの理解･人権、民主主義の理解と促進・異文化理解・環境教育に基づき、教科横断的な視点で、カリキュラム･マネジメントを推進していく。

子どもの学びを深める学習課程の確立

「学びに火をつける」「調べる」「まとめる」「伝え合う」の問題解決の学習過程に対話型授業を効果的に組み合わせ、主体的で対話的な学びを相互に進めていくことで問題解決力を育む。

見方・考え方を働かせ価値観を培う学習

児童の学習成果物の掲示、道徳や朝会での講話、SDGs に関連した新聞記事等の校内掲示、児童が追究するための図書整備等、環境面を整備していくことにより日頃から ESD の価値観を育んでいく。

2. 各学年の授業実践

1 年「はるなつあきふゆ　ぼくの・わたしの木や花」（1 年間）

近隣の公園で木や花を観察し、それぞれの発見を伝え合った。「ぼくの木」「わたしの花」という観察対象を決める工夫によって、学習材に対する愛着がもてるようになった。

2 年「どきどき　わくわく　まちたんけん」（1 年間）

まず、学級で学区域を巡った。その後、訪問したい店や施設を明確にし、グループ毎のインタビュー学習では目的意識をもって臨むことができた。

3 年「作ろう！地域安全マップ」（6 月～ 10 月）

「『入りやすい場所』や『見えにくい場所』には危険がある」という視点をもち、犯罪が起こりやすい場所についてフィールドワークをおこなった。調べたことをもとに社会科の学習での地図の見方を活用して地域安全マップを作り、発表することができた。

4 年「ごみとわたしたち」（6 月～ 10 月）

徳島県上勝町のごみ減量の実践等を知り、自分たちにもできるごみ減量作戦を考えた。校内では、紙のリサイクルボックスを各学級に配布する等、実際の行動に結びついた。

5 年「防災、いまはじめよう」（9 月～ 11 月）

本所防災館での様々な体験で、防災の必要性に気付いた子どもたちは、「自助」「共助」「公助」の視点から調べを進めた。10 月の学校公開に合わせて「防災教室」を開き、調べたことを分かりやすく発表することができた。

6 年「はばたけ未来へ！」（12 月～ 2 月）

将来の自分のあり方を想像し、調べたいことや考えたいことを具体的に探究した。卒業生、保護者等多岐にわたる人材の協力を得て、自分の将来について考えを深めた。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

卒業文集に「たくさんの人と関われて、自分の世界が広がった」と書いた卒業生がいた。海外からの教育視察団との交流や八名川まつりでの発表を通して、様々な年齢・国籍の人々と交流できるのは本校の特質である。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

「自分の考えを発信する授業」「友達の考えを尊重する授業」「多様なアイデアが溢れ出す授業」を各学年で実践することで、子ども同士の温かい人間関係が育った。また、保護者・地域の授業参加が進む授業を展開することで、学校に対する信頼が高まり、子ども達を安心して通わせられる学校との評価を得ることとなった。

教員

ESD の指導で身に付けた「子どもの学びに火をつける問題づくり」「自分の考えを深めたり友達と合意形成を図ったりする対話型授業」といった指導法を各教科の授業でも活用するようになった。それに伴い、雰囲気づくりや教師の声掛け、話し合いの決まりの共有等についても、各学年、各学級において創意工夫を重ねている。

児童生徒

児童アンケートをとったところ、質問項目「持続可能な社会について考えることができますか」において肯定率の伸びが見られた。校内での様々な活動の中で SDGs に触れる機会を増加させたことで、持続可能な社会とは何なのかを児童それぞれが解釈し、実生活との比較ができるようになったためと考えられる。

次年度以降の活動

- 本年度で、サステイナブルスクールとしての３年間と東京都教育委員会「持続開発可能な社会づくりに向けた教育推進校」としての２年間の研究が一段落をむかえる。今後は、これまで９年間に渡って取組んできた ESD、とくに ESD カレンダーについて、その有効性を引き続き検討していこうと考えている。この３年間、様々な研修で新たな知見を学ばせていただき、校内でその内容を広めてきた。サステイナブルスクールとして得た他校の先生方とのつながりを持続発展させていければと考えている。

学校情報

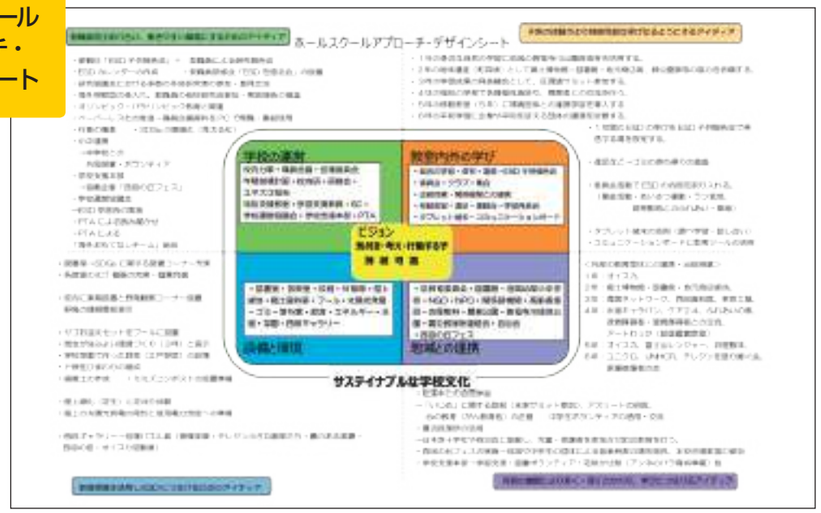
学校名	江東区立八名川小学校	TEL	（03）3631-3127
児童・生徒数	367 名	E-MAIL	t-tejima@koto-edu.jp
住所	東京都江東区新大橋 3-1-15	HP	http://www.koto.ed.jp/yanagawa-sho/

杉並区立西田小学校

KEYWORD
生物多様性　環境学習　国際理解
世界遺産や地域文化財等の学習

人・自然・社会とのかかわりを大切にし、気付き、考え、行動する子を育てる

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

■学校の運営

【授業改善】

- 教職員研修会「ESD を語る会」等を設置し、教員間で単元開発について話し合う場とした。
- ESD カレンダーの改訂を実施し、授業改善に取組んだ。（各学年・毎年実施）
- オリンピック・パラリンピック教育と関連させ、国際交流、伝統文化、ボランティア活動を重視した。（全学年）

【学習・研究の発信と交流】

- 全児童による「ESD 子供報告会」を設定し、保護者・地域・関係諸機関に学びを発信した。
- 本校の実践を全都に発信する研究発表会を開催した。
- ユネスコ協会支部と連携し、ユネスコ協会関係者に本校の実践を発表する機会を得た。
- 研究会には多くの研究者を招き、研究協議会に参加してもらった。（年間約 80 人）
- 他区市のサステイナブルスクール等実践から学ぶ場を設定し、教員の研修とした。
- 海外からの視察（3 カ年で約 20 か国、約 100 名以上）を受け入れた。

【社会に開かれた教育】

- 学校運営協議会に ESD 学習会を取り入れ、理解を深める取組を推進した。
- PTA による「海外おもてなしチーム」の結成と通訳ボランティアの活動を取り入れた。

■教室内外の学び

【各学年のテーマと内容】1・2 年は生活科、3 年以上は総合的な学習の時間で通年かけて実施

- 1年「しぜんとなかよし」：地域の公園緑地等を活用し、身近な自然に親しみ関心をもつ。
- 2年「来て！来て！西田の町」：町探検を通して地域の素晴らしさを知り発信する。
- 3年「自然とともにくらそう」：昆虫等のすみかを守る工夫を通して環境を考える。
- 4年「みんなにやさしい町づくり」：障害者を含め誰にでも優しい町づくりを考える。
- 5年「世界を見直して環境を考えよう」：世界環境や食品ロスについて知り、解決策を考える。
- 6年「世界に向けて羽ばたこう」：難民や紛争等の課題を知り自分なりの解決策を考える。
- 委員会活動に ESD の内容を取り入れた内容を工夫した。（募金活動・あいさつ運動・ラン栽培、飼育動物とのふれあい・巣箱の設置　他）

【小中連携活動】

- 「いじめ」に関する共同授業と異学年による話し合い活動を実施し区未来サミットへ参加した。

■設備と環境

- SDGs の各所設置と行動への意識化（見える化）を図った。
- ヤゴお迎えセット、落ち葉貯め、ミミズコンポストを設置した。
- 西田カフェを設置し、各種パネル展の企画や保護者の打ち合わせの場に活用した。

■地域との連携

- 地域の関係諸機関・団体を教育活動に取り入れた。（団体数：34 団体）
- 震災救援所訓練（自治会・関係諸機関と連携）に児童を参加させ防災教育をおこなった。
- 学校支援本部と連携するとともに学校支援本部や同窓会と協働し「西田の丘フェス」を実施した。

3年間で気付いた自校のキラリポイント！

- 発達の段階に応じて数多くの SDGs を取り上げ、子ども自身が自分の課題として主体的に学んでいること
- 学校支援本部をはじめ、地域の団体が本校の実践に多くかかわり、子どもの成長に触発されてより開かれた教育課程を実現していること。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

- ESD を取り入れた教育活動の実績を、学校の特色ある教育活動としてアピールすることができるようになり、持続可能な社会づくりの担い手を作る教育は必要であると確信をもつようになった。
- 海外との交流や他のユネスコスクールとの交流を通して、ESD に取組む必要性を認識する機会を得た。ESD に関心がある研究者と共に研究協議会をおこない、開かれた学校経営が進んだ。
- 地域との連携が深まり、互いの信頼感が増した。地域と協働した取組もより充実した。

教員

- ESD を取り入れた授業の進め方も理解され、子どもの主体的な学びを大切にしようとする意識が高まった。
- 教育目標「気付き・考え・行動する子」が浸透するにしたがい、ESD を通して世界で起こっている課題について自分事としてとらえ、行動することが大切であるという指導をおこなうようになってきた。教員も ESD の実践者である意識が高まった。
- ホールスクールアプローチの意識が徐々に広がり、教育活動全体を通して改善しようとする意識が出てきた。

児童生徒

- 身近な自然や地域とのかかわりを通して、自然や地域を大切にしようとする意識が高まるとともに、地球全体の課題を自分事として捉え、解決しようとする姿勢が育まれた。
- 児童は、学んだことを相互に関連付け、より深く理解したり、考えを形成したりする力が付いた。
- 持続可能な社会づくりに向け、自分にできることを他者と協力して行動しようとする意識が高まった。
- 海外の方とも抵抗感がさほどなく、交流することができるようになった。

次年度以降の活動

5 年後に在りたい学校像を、地域が SDGs を進める力になる学校を目指す。そのために以下のことに取組む

- 学校内の活動を地域で活動する、地域に還元する学びの充実を図る。指導計画に位置付けていく。
- ESD に取組む本校の実践を地域に広めるとともに、学校運営協議会等を活用して地域との連携と学校運営の充実を図る。
- サステイナブルスクールとの研究実践の交流を継続するとともに、教員・子ども同士の交流の場を模索する。
- サステイナブルスクールのホームページ等をチェックし、各学校の特色ある活動について詳しく知る取組も工夫する。

学校情報

学校名	杉並区立西田小学校	TEL	（03）3392-6828
児童・生徒数	627 名	E-MAIL	S12-J@city.suginami.lg.jp
住所	東京都杉並区荻窪 1-38-15	HP	http://www.suginami-school.ed.jp/nishitashou/

目黒区立五本木小学校

KEYWORD
防災学習　生物多様性
環境学習　国際理解学習

いのちのバトンをつなぐ　ユネスコスクールの子

ホールスクールアプローチ・デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

- **3 年生**　78 人（総合的な学習の時間）6 月～ 1 月「ここから始まる　地球のための “my エシカル ”」では、これまでの「五本木の森プロジェクト」を大きく編み直し、気候変動の視点で学びをアプローチするプロジェクト型学習として新たに取り組んだ。NPO 法人、保護者、地域とのつながりを深めながら自分たちの生き方や行動を問い続けた。1 月の学校公開で発表した。
- **5 年生**　70 人（総合的な学習の時間・家庭科）7 月～ 2 月「食と命をつなぐ」では、栄養教諭、NPO 法人、地域と協働し、和食の魅力を体験的、探究的に学び、子どもが和食について家族に語ることを通して、保護者の変容も生まれつつある。
- **6 年生**　70 人（総合的な学習の時間）4 月～ 3 月「ピアサポート」では入学式から始まり、登校時のお迎え、給食、清掃等 1 年間を通して相手に合わせた話し方、しぐさ、かかわり方等を大切にして親身に、主体的に行動を継続した。
- **1～6 年生**　407 人（図工）4 月～ 3 月　「407 人のいのちかがやく五本木美術館」では、今を生きる子どもたちが、心とからだをいっぱいに働かせて夢中になって形や色、イメージを介して表現した作品の感性の交流の場として日常の図工を通した子どもの育ちを発信した。特に、子どもたちが ESD や SDG ｓの視点を意識した題材のプロセスを経て感じたこと、考えたことを作品のキャプションに添え、保護者や地域へのメッセージとなった。3 年生「大地のおくりもの～ earth in mind ～」（写真）：身近な土を集めて絵の具をつくり表す活動では、自分たちの身近には土が無いことに愕然とした。そこで親戚や保護者、教師、様々な人に呼びかけ何とか土を採取。篩 (ふるい) にかける行為を楽しみ、ビンにつめた土は 100 色集まり、土の多様な色、美しさ、自分で採取した土に愛着を感じ、表現につなげた。そのプロセスでは栄養教諭と協働し、秋田県で無農薬枝豆栽培をおこなう農家とスカイプでつながり、土への思いをさらに深くした。4 年生「やまびこ」：色糸を友だちと協働して紡ぎながら新たな空間に生まれ変わらせた。5 年生「木々との対話」：八ヶ岳自然宿泊体験教室の間伐体験で得た木材に様々な自然材料を組み合わせて新たな命を吹き込んだ。6 年生「線ス・オブ・ワンダー」：細い線の角材を切って構成の美しさを考え、自分にとっての sence of wonder と対話しながら表現した。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

4 つの視点でビジョンに向かいながら、それぞれの持ち場で今の生活、地球や未来のことを、ESD の考え方を大切にして学びをつなげていこうとする教師が増えつつある。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

- 「ESD だより」（年間 4 回）、学校便りに「SDG ｓコラム」欄を設け、教職員全員が ESD を自分事で語るリーフレットを配信し、学校公開の授業参観や学級便り等で子どもたちにどんな学びを大切にしているか、実践と子どもの姿を通して伝えようとする場が増えつつある。
- NPO 法人や他校ユネスコスクール校長先生に研修会に来ていただき、新たな視点で考えていく気付きの機会をいただくことができた。
- 月曜日の「職員夕会」を改め「帰りの会」として、定時退勤を目指すようにした。

教員

- ESD を知ったばかりの若手教師が進んで研修会に参加したことで、学級での子どもたちへの実践や子どもたちの学ぶ姿を見る目に変化が見られた。
- ESD の考え方、SDGs を意識した取組を、地域・保護者・NPO と協働し、授業や学級活動に取組むことを楽しむ若手教師が増えてきた。
- ESD の文化を染み渡らせていくためには、個々の取組はもちろんのこと、「学校の運営」の視点（学校経営）をさらに重点化していく必要性を共有した。

児童生徒

- 「お昼の放送でフォレストニュースを続けたい」「書き損じはがき回収キャンペーンを増やせないか」「被災した地域への募金支援活動をもっとやりたい」等体験を通して実感した、他者に対してささやかでも協働して行動に移せる「いいこと　いいもの」を、少しずつでもつなげていこうという思いが、児童の言葉にも表れてきた。
- 3 年生（学級活動）SDG ｓの視点で、今のクラスに必要と思う係活動を自発的に考案し、活動を振り返り、どうしたら 17 の目標に自分たちの行動や考えがつながっていくことができるのか問い続けている姿がある。

次年度以降の活動

- 学校経営案に ESD・SDGs を進めていくユネスコスクールについて明確に示し、4 月保護者会、児童朝会、教職員へ旗揚げしていく。
- さらに ESD･SDGs 研修会（教職員･保護者対象）を実施し、それらを意識した実践を模索し積み重ね、1 月の学校公開で全員が授業を通して発信する。
- SDG ｓ 17 の目標を校内外に楽しく視覚化する。
- 保護者アンケートを、「本校のよさを伝え味方になってもらえる」「勇気づけられる内容になる」よう、他のサステイナブルスクールと協働して編み直していきたい。
- サステイナブルスクールの実践から学び合える環境を意識的に設定していきたい。

学校情報

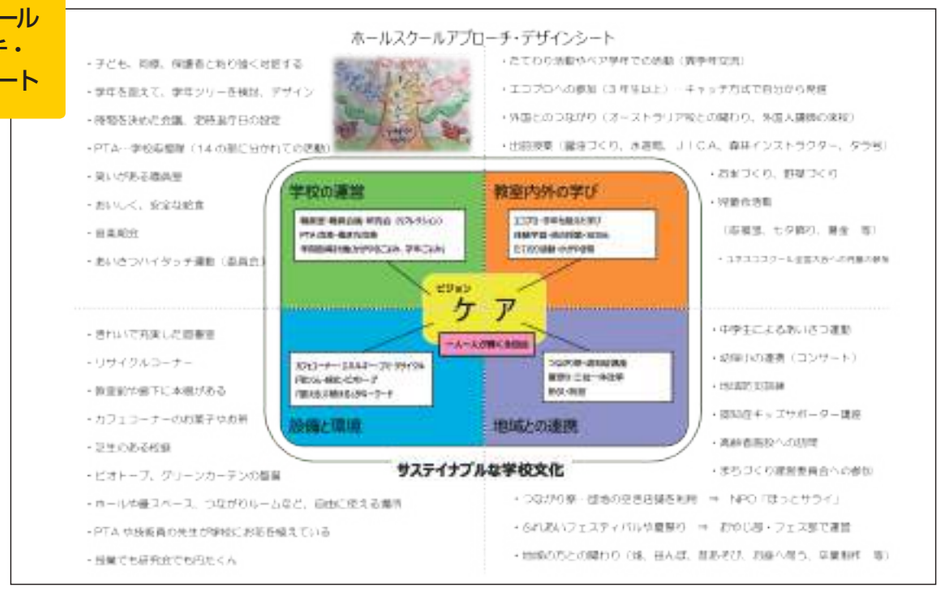
学校名	目黒区立五本木小学校	TEL	（03）3711-8494
児童・生徒数	407 名	E-MAIL	meghngeh@meguro.ed.jp
住所	東京都目黒区五本木 2-24-3	HP	http://www.meguro.ed.jp/meghngeh/

横浜市立永田台小学校

KEYWORD
その他（ESD、ケア、もみじアプローチ）

自分から世界へ発信する永田台

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

本校の ESD の基盤は「ケアリング」である。身近な他者を大事にすることが、地域、日本、そして世界の課題への解決の一歩となる。それは子どもだけではなく、大人同士のケアリングも大切であると考えている。ケアリングが育まれることで「つながり」がそこにはうまれる。この「つながり」は、他学年、地域、他校、世界交流へと広がる。つながりを大事にした、教育実践をおこなってきた。また、ホールスクールアプローチを体系化し、学校まるごと ESD に向けてデ・ザイン（de・sign）し、学校をコアにした持続可能な社会づくりに取組んできた。その年間を通した各学年の ESD の取組をエコプロ 2019 で発信し、子どもたちから社会変容を起こすことを試みた。

エコプロ 2019 年に出展

対象者：3 年生から 6 年生（約 274 人）
教科：社会・理科・総合・国語等
時期：12 月上旬に、東京ビックサイトで発表
内容：地球規模的課題を、身近な自分たちの生活とのつながりから考え、行動してきたことを、一人ひとりが発表をおこなった。子どもたち一人一人の問いを大切にしながら、対話を通して、教職員は関わっていく。ときに、担任・学年以外の教師と対話をすることから、考えを広げた児童もいた。発表では、大人に自分から声をかけ（キャッチ方式）、自分の考えを話し、相手から意見をもらうことで、さらに自分の考えを深めることができた。「エコプロ」の出展だけではなく、様々な企業や教育関連を見学することで、視野が広がっている。

赤ちゃんからお年寄りまでみんなあつまれ「つながり祭」の開催

対象者：全校児童、地域住民
教科：生活・総合等
時期：2カ月に1回行われる
内容：地域の商店街がシャッター街となり、活気が失われていた。そこで、地域住民と学校が一体となって、地域を元気にエンパワーする活動が始まった。まちの活性化、多世代の交流、子どもたちの健全育成、高齢者の孤立防止、外国居住者の方々とのつながりの場を、そして、世代交代する中でも持続可能なまちづくりを考え続けることを大切にした活動である。

【つながり祭の内容】

- 開始前に地域のゴミ拾い活動⇒小学３年生以上が自主的に参加。【環境保全】
- 不用食品の回収⇒子どもや高齢者施設で活用される【食品ロス削減への取組】
- ステージ発表⇒子どもたちの音楽発表、教職員の器楽演奏、地域のお年寄りのギター演奏、ハーモニカ演奏、民謡等【心のケア・人とのつながり】
- 永田台小 PTA によるうどん屋さん【安全で健康な食】
- フリーマーケット【再利用・資源の有効活用】
- 昔あそびの交流⇒地域のお年寄りが自然と駒回しやけん玉等を子どもたちに教えてくれる【お年寄りとの交流】
- 地域住民によるフランクフルト屋さん等の飲食コーナー【子どもたちの楽しみ】

つながり祭は、地域・学校だけではなく南区の地域行政担当、まちおこし関連の NPO 法人、近隣大学、地域ケアプラザ等多くの人のつながりから今も尚、発展し続けている。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

「一人一人が輝く永田台」は、本校の学校教育目標である。子どもたちの輝く姿をイメージした学年ツリー（学年ごよみ）づくり、先生が輝く姿も一つの軸として考えた働き方改革を、「ケア」をエッセンスにして進めてきた。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

高齢化が進む団地の中にある創立 45 年の学校。地域主催のまちおこしイベントに参加している。ダンスや楽器の演奏披露をしてきたが、授業参観日と同時開催できるよう調整し、盛り上げることができた。中学校とは、授業交流や体育祭の見学を続けている。中学入学の不安解消だけでなく、中学生の発信の場ともなり得ている。働き方改革のアイディアから、事務室・印刷室の整理、職員室のパソコン環境整備、電話の位置の見直し等工夫を重ねた。

教員

教職員同士のケアと対話を大事にしてきた 3 年間である。今年度、教職員の４割が異動した。それでも本校には、“ 自分なりの ESD” について語ることができる教職員が多い。そして一人一人が「身近な場所から、自分事として考える」意識を持っている。「先生の元気が、子どもの元気につながる」という意識から、働き方改革にも進んで取組む姿がある。

児童生徒

サスティナビリティを意識したホールスクールでの取組は、例えば、1 年生の小さな気づきを価値づけ達成感を育てることから始まる。「自分の思いは受け止められる」「自分が行動すれば世界が変わる」との学びへの期待感を育て、サステイナブルな要素に気づき、自ら価値づける児童がみられる。自分を支え成長を促す今現在のつながりに気づき、つながりの価値を見出すようになった児童は、「つながりを大切しよう」＝「未来へのつながりも大切に」と行動を起こすことに前向きになってきた。

次年度以降の活動

永田台小学校が大事にしてきた「ケア」は今後も本校の核となるはずである。子どもとの良好な関係づくり、教員同士の日々のコミュニケーションは継続して大切にしていきたい。また、本校がさらに地域とつながる学校になれるような活動を進めたい。今年度初めて、地域の団地で行われる「つながり祭」とのコラボレーションを考え、実践にうつすことができた。大人も子どもも主体的に、そして無理ない範囲で “ 続けて ” 関わることのできる方法をこれからも模索していく。

サステイナブルスクールとして、環境に配慮した取組を率先しておこない、共有していくことの意義は大きいと考えている。本校では、校内で使用するプラスチックの削減に積極的に関わっていきたい。給食で使用するストローやビニール袋の使い方を見直し、改善するつもりである。現在、4 年生はマイクロプラスチックの削減について考えている。校内での取組が学習とつながるはずである。

学校情報

学校名	横浜市立永田台小学校	TEL	（045）714-4277
児童・生徒数	475 名	E-MAIL	y3nagatd@edu.city.yokohama.jp
住所	神奈川県横浜市南区永田みなみ台 6-1	HP	http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nagatadai/

新居浜市立惣開小学校

KEYWORD
防災学習　環境学習　人権学習
世界遺産や地域の文化財等に関する学習

ＬＯＶＥ＆ＳＭＩＬＥ！そうびらき　つながる笑顔で　まちがかわる

ホールスクールアプローチ・デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

● ３年目も引き続き「関わり・つながる」のビジョンのもと、「防災・減災」「ふるさと」「環境」の３つの柱を取組の中心に据えて活動を行った。特に今年度はコミュニティスクールとして、学校からより多くの ESD に関する発信と行動を起こし、地域ぐるみの大きなうねりの中でＳＤＧｓ達成を目指すという方向性を明確に打ち出して取り組んだ。

＜地域ぶらりウォーク・ふるさと学習・４年・10 月＞

ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもち、未来につなげていくために、このふるさと新居浜の礎を築き守ってきた先人たちの功績と生きざまについて学び調べ、自分たちで整理しまとめ直して、地域の方や保護者と校区をぶらりと歩きながら説明をしていくという活動である。今年度は同じ新居浜市でサステイナブルスクールとして活動している県立新居浜南高等学校のユネスコ部の生徒も参加し、連携を深めることができた。

子どもたちは自分たちで調べまとめたことを、胸を張って保護者や地域の方々に伝え、活動後には「新居浜の歴史の重さがわかった」「普段何気なく見ていた建物に、歴史的な背景があったことがわかってうれしかった」等の感想が聞かれた。保護者から、「子どもたちが自分たちの住む地域を知ることで心が育っていく。大変いい活動だと思う」という声も聞くことができ、未来のために関わりつながり、心を育てることの大切さを共有することができた。

＜徳島県松茂町立長原小学校との合同防災教室・６年・11 月＞

海辺の小規模校で防災学習に熱心に取り組んでいる長原小学校との交流も４年目となる。今年は本校に長原小学校の５・６年生が来校し、日本赤十字社愛媛県支部から講師を派遣していただいて、合同の防災教室を行った。一緒にハイゼックスによる炊飯体験をし、炊き上がったハイゼックス米でカレーを食べた。ご飯の温かさとともに、つながり合う喜びも感じた時間であった。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

「地域への発信力～気付き、考え、自ら実行していく惣開（そうびらき）ッズ」「多様性への寛容力～関わり包み込む愛情あふれる惣開（そうびらき）ッズ」関わり・つながることのすばらしさを感じ、つながっていこうとする実践力ある児童に育ちつつある。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

地域や保護者に公開する ESD 成果発表会が定着し、学校が何を目指してどのような子どもを育てたいと願っているのかというＥＳＤに対するビジョンを共有することができるようになった。サステイナブルスクールであると同時に、コミュニティスクールでもある強みを生かして、学校と家庭、地域が同じベクトルで SDGs 達成に向けて取り組めるようになりつつある。

教員

ESD の視点から教育活動に取り組むことの意義や子どもの変容に対する喜び、楽しさを感じ、それを教員間で共有することができ始めた。始まりはトップダウンの感が強かったESD への取組が、教員一人一人の課題として浸透し、自分たちの日々の教育活動はたとえ小さなものでも、その積み重ねが SDGs 達成へとつながり、未来を変えると考えられるようになった。

児童生徒

教師主導の活動ではなく、児童が主体的に気付き、考え、様々なプロジェクトを立ち上げ実行していこうとする実践力が身に付いた。そして、取り組む高学年リーダーの後ろ姿を見て、その活動を継承し発展させようとする姿勢が育ち、持続発展していく教育活動になっている。そういう高い意識をもって活動する子どもの姿が多く見られるようになった。

次年度以降の活動

「地域とともに SDGs 達成に取り組む学校」を目指して、学校運営協議会や学校教育活動における ESD 協働プロジェクトの SDGs 達成への位置付けを明確にする。その中で、児童が主体的に立ち上げたボランティア団体（LOVE&SMILE）の活動の持続発展や、学校の委員会活動の一つであるＥＳＤ委員会の活動をさらに活性化させ、ボランティアの輪を広げていく。

市内で同じサステイナブルスクールである県立新居浜南高等学校との連携・交流をさらに深めるとともに、四国地方 ESD 活動支援センターを拠点に交流を継続し、その成果を内外に向けて成果発表会や HP 等を通して発信していく。

また、新居浜市が取り組む海洋アライアンス事業と連携して、ふるさと学習に SDGs の視点を盛り込み、学習の見直しと深化を図っていく。

学校情報

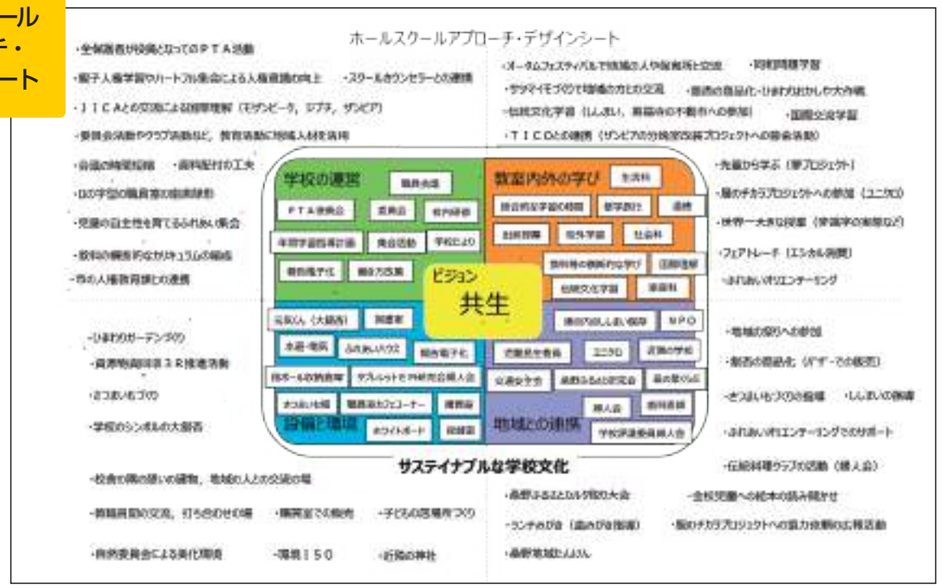
学校名	新居浜市立惣開小学校	TEL	（0897）37-3401
児童・生徒数	344 名	E-MAIL	sobe-ad@esnet.ed.jp
住所	愛媛県新居浜市王子町１番３号	HP	http://sobiraki-e.esnet.ed.jp/cms/

阿南市立桑野小学校

KEYWORD
環境学習　国際理解学習　防災学習
地域の文化財学習　生物多様性

地域文化を継承し、未来を変える・未来をつくる児童の育成

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

「生活単元・自立活動」

- 特別支援学級（4 名）…ひまわりおかし屋開店（5 月～ 6 月）では、お菓子を売るという計画・広報・実習活動を通して、主体的に行動する力や友だちや身近な人に関わる力を育んだ。

「生活科」

- **1 年（26 名）**…カブトムシの幼虫をそだてよう（1 年間）では、地域の方から頂いたカブトムシの幼虫を育てることで、命や環境の大切さを学んだ。また、カブトムシの幼虫を通して、地域の方とのつながりも深まり、飼育の仕方を教えていただくだけでなく自分たちに対する愛情を深く感じることができた。
- **2 年（21 名）**…あきまつりをせいこうさせよう（9 月～ 10 月）では、1 年生と一緒に企画・計画から実践まで進めることができた。招待する相手のことを思い、喜んでくれるものになるよう考え、相手の喜びが自分たちの喜びとなることに気づくことができた。

「総合的な学習の時間」

- **3 年**（26 名）…桑野の「よさ」「すごい人」発見（5 月～ 12 月）では、地域でボランティア活動をしている方々の思いや願いを知ることで、自分たちに何ができるか考えることができた。そして、地域の方と一緒に育てたさつまいもを使って「おいもパーティー」を開き、有意義な交流を図ることができた。
- **4 年（25 名）**…伝統文化を受け継ぎ、魅力ある桑野をつくろう（1 年間）では、オリジナルの獅子舞を運動会で地域の方々に披露した。また、自分たちの暮らす町が 10 年後も住みよい町になるよう現時点での問題点を見つけ、解決できることから少しずつ取組もうとする意識改革をすることができた。
- **5 年（25 名）**…つなごう桑野と世界（5 月～ 12 月）では、取組 3 年目の「服のチカラプロジェクト」の活動を地域に知ってもらおうと広報活動に力をいれた。地域の人が集まる公民館や企業、それに保育所の集まりに出向き、協力を求めた。自分たちの生活の中での不要品が実は世界の人を助けることができ、その架け橋に自分たちがなれることに気づき取組んだ。
- **6 年**（18 名）…自分たちの手でよりよい未来（10 月～ 12 月）では、学校のシンボルである大銀杏のギンナンを自分たちの手で商品化し、販売した。ゴミとして処理されるものも見方をかえれば価値ある物になることに気づき、大銀杏をこれからも大切にしていこうとする態度が育った。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

運動場の真ん中に学校のシンボルの大銀杏（元気くん）がある。地域の人も子どもたちも大銀杏（元気くん）を誇りとし、長年見守りつづけている。その大銀杏（元気くん）を中心に、学校と地域がつながり、学校が地域に愛される存在となっている。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

各学年のつながりを「系統」を考えながら、該当学年の指導にあたり、それぞれの発達段階で力をつけていくことができた。また、教室内外の学びを大切にしてきたことで外部とのつながりも増え、交流する機会を多くもつことができたことがさらに良かった。地域の方にとっても、より開かれた学校へと変容してきている。

教員

教員自らが現状にとどまらず、より効果的な指導ができるよう学ぼうとする意識が高まった。そして、学んだことを共有しようと周知しあいながら共に向上していこうとする態度へと変容してきた。今、目の前で学ぶ子どもたちに夢と希望を持たせ、「なぜ学ぶのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」を明確にし、よりよい教育活動に取組める集団となってきた。

児童生徒

子どもたちの興味が持続する体験的な学習内容を展開してきたことで、主体性・協働力・人間関係調整力が高まってきた。主体的な学習意欲を生みだしたことで、根気よくやり遂げようとする気持ちや自分の得意なところを生かそうとする姿も見られる。そして、何より友だちと協力する喜びや心地よさに気づき、その喜びを地域・世界の人と共有していきたいと考えられるようになった。

次年度以降の活動

「地域との連携」

- 今まで取組んできたエコキャップ・歯ブラシ・牛乳パック回収と節電・節水等の ISO 活動をさらに重視した取組
- 桑野川や地域の水田の水生生物調査と水質検査をつき合わせて、汚れた水を流さないよう EM 菌の有効な活用
- 地域の人と協力しながら、資源物資（段ボール）回収
- 学校の美化や地域の美化、学社ふれあいハウスの活用の見直し
- 外国とのつながりをもつ（国際交流）
- 異学年での交流を増やすとともに、集会活動の充実
- ペーパーレス（タブレットの活用）

「サステイナブルスクールとしての活動（ネットワークの活用等）」

- 市内の活動に参加し、ボランティア精神の育成
- エコな暮らし（リデュース）を地域に呼びかけ
- 校庭の真ん中に木のある学校とのつながろうプロジェクト
- 市内の催し会場で広報活動をしながらギンナンの販売
- ホームページで活動の発信

学校情報

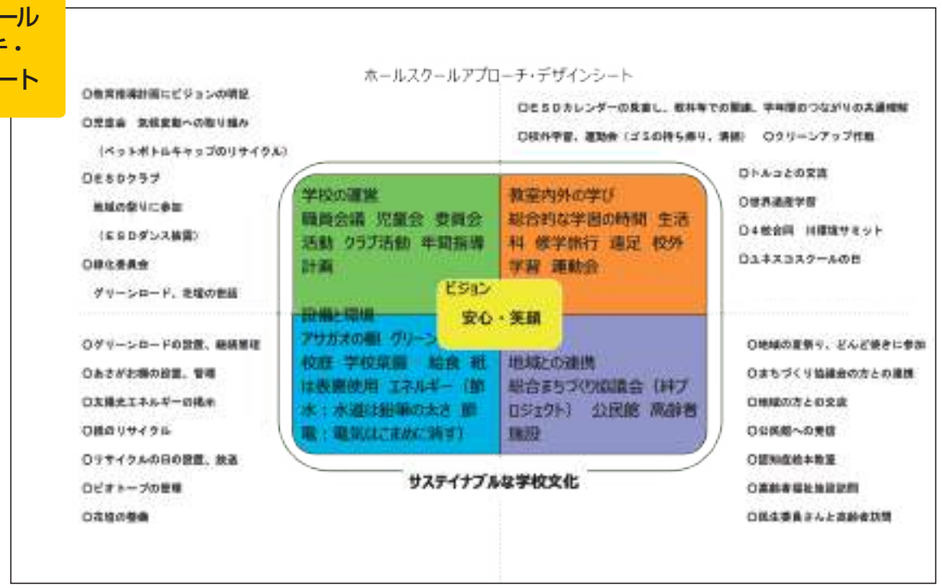
学校名	阿南市立桑野小学校	TEL	（0884）26-0200
児童・生徒数	145 名	E-MAIL	kuwanoha@mg.pikara.ne.jp
住所	徳島県阿南市桑野町岡元 40 の 1	HP	http://e-school.e-tokushima.or.jp/anan/es/kuwano/html/htdocs/

大牟田市立吉野小学校

KEYWORD
生物多様性　世界遺産や世界遺産や地域の文化財等に関する学習　気候変動

みんなが安心みんなが笑顔で暮らすことができる社会を目指して

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

吉野小学校では、学校経営要綱に「安心・笑顔」を位置づけている。児童も職員も地域も「自然に囲まれて住みやすい、笑顔あふれる吉野の町を守りたい。川や里山等の身近な自然環境をこれからもずっと守っていきたい」という思いを持っている。児童は、学校や地域の行事に参加しながら吉野の良さや自分たちにできることを考えて、よりよい地域にするために実際に行動していった。3 年目、特に「学校内外の学び」の見直しおこない、総合的な学習の時間を中心に活動した。特に 5 年生では地域の方やネイチャーガイドの先生から支援していただきながら、自分たちの周りの環境について調査をおこない、課題を見つけ、自分たちにできることを考えた。5 年生の活動は、「桜プロジェクト」（1 年間）と「守ろう環境！白銀川・隈川探検隊」（7 月～ 11 月）である。関連する教科として、理科「天気と情報（1）（2）」（4 月、9 月）、「流れる水のはたらき」（10 月）、国語「動物の体と気候」（5 月）　道徳「イルカの海を守ろう」（2 月）、社会「国土の自然とともに生きる」（1 月）、学校行事　「親子除草作業」（9 月）がある。「守ろう環境！白銀川・隈川探検隊」の学習では、大牟田で川の学習をしている 4 校が集まり、自分たちが調べたことや考えたこと、行動したことを発表し合った。さらに、3 学期には学校で発表会をおこない、地域や保護者に活動の様子を発表する。地域の方と共に学び、情報の共有をおこない、学校内外のコミュニティパートナーの構築を図るとともに、学校から地域へ持続可能な社会が広がるように、学校が地域社会のコアになることができた。5 年生の活動の成果としては、子どもたちが環境（気候変動）に課題意識を持つようになり、人間生活が環境に影響を与えていること、気候変動と自分たちの生活の関わりに気づくことができた。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

地域との連携がしっかりとした学校。そのため、地域の「ひと、こと、もの」のつながりを活かした教育活動を積極的に進めることができる。児童が地域のあたたかさに包まれて育っている。学校全体で吉野の活性化のためになる活動を続けることが可能な学校。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

学校の研究の中にサステイナブルスクール担当を位置づけたことで、組織的に取組むことができた。本校の取組の特色である地域との関わりがはっきりし、続けていくことにより、地域の方とのつながりが強くなった。ESD の取組を発信する視覚的（写真・絵・地図等）な掲示物が増えた。

教員

学校全体でどのようなことができるのか、子どもたちが「つながり」を意識し、課題に気付くことができるのか、環境の変化（気候変動）についてどの教科とどの教科を関連させていくのか等を ESD カレンダー、ホールスクールアプローチデザインシートを使って考えるようになった。児童も職員も充実感のある活動を目指す意識が強くなった。

児童生徒

「命のつながり」「人とのつながり」について、いろいろな学習で考えるようになり、3・4 年生から、自分たちの生活を見直すことができるようになってきた。さらに、自分たちの手で命を守りたいという気持ちが強くなり、行動する姿が見られるようになった。今の自分にできることを考え、行動できるようになってきている。

次年度以降の活動

今年度中に、デザインシートを付加、修正し、理科・社会とのつながりを明確にし、次年度から実践していく。さらに、充実した達成感のある活動とするためには、定期的なデザインシートや ESD カレンダーの評価、改善が必要であると考える。修正したものをまた授業や学校全体の活動で実践していく。地域とのつながりを大切にしながら、さらに児童が大牟田市やさらに地球環境のことを自分のこととして考えることの大切さに気付いていくような環境作りに努める。授業を公開し、子どもも教師も達成感のあるものとする。

学校情報

学校名	大牟田市立吉野小学校	TEL	（0944）58-1037
児童・生徒数	395 名	E-MAIL	yoshihiro-402@st.city.omuta.fukuoka.jp
住所	福岡県大牟田市大字白銀 967 番地 17	HP	http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/yoshino-es/

KEYWORD
環境教育　その他

石巻市立牡鹿中学校

地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト（ESP）」

ホールスクールアプローチ・デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

学校教育目標である「豊かな心、健康な体、自ら学ぶ意欲をもち、たくましく未来を創る生徒の育成」の具現化を図るため、ビジョンを「たくましく未来を創る生徒」とし、ホールスクールアプローチの４つの観点をもとにして教育活動を推進してきた。

1　学校の運営

（1）学校教育目標

重点努力事項の一つに「みやぎの志教育と ESD による地域貢献活動の推進」を掲げ、ESD の活動に積極的に取組んでいる。

（2）ESD の年間指導計画への位置付け

主に地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト」として、全学年で総合的な学習の時間の年間指導計画に組み込まれている。

2　教室内外の学び

（1）地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト」

東日本大震災により甚大な被害を受けた地域に対し、「震災で活気がなくなった町に自分たち中学生が笑顔と元気を届けたい」「将来にわたり地域を愛し地域の発展に貢献したい」という生徒の思いから生徒会が企画し始まった活動である。

具体的には、①地域巡りによる侍ソーランの披露（5 月 6 月）、②運動会での侍ソーランの披露（5 月）、③鯨まつりに参加しての侍ソーランの披露（8 月）、④スマイルカレンダー作成・配布（10 月）、④クリスマスドリームでの全校合唱と侍ソーランの披露（11 月）等の活動に取組んできた。

特に、地域巡りは生徒たち自らが訪問先等を選定し、行程等もすべて自分たちで計画して活動することができた。今年度は、これまで以上に生徒主体の活動となり、地域の方々を笑顔にすることができた。

（2）牡鹿の自然を守る清掃活動

①地域巡りでの地域清掃(5 月)、②網地島白浜海水浴場清掃(6 月)、③鯨まつりでの清掃活動(8 月) 等の清掃活動に取組んだ。

3　地域との連携

ユネスコスクールの石巻市立鮎川小学校を含む近隣の小学校 3 校と合同で、クリスマスドリームという行事を開催し、地域住民に合唱や合奏、踊り等を披露した。

また、地域の事業所と連携して本校生徒が考案したラベルが貼られた鯨の缶詰を製造していただき、その事業所等の協力の下、3 年生が修学旅行先で販売体験をおこなった。

4　設備と環境

過去の津波災害を知り未来の防災につなげるという考えのもと、地域にある津波の記録を記す石碑調査をおこなった。地域住民への聞き取り等から異なる 3 つの地区に石碑があることが分かり、3 つの石碑について石碑の大きさや碑文について調べることができた。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

牡鹿半島先端のへき地小規模校であるが、自然、地域の方々、地場産業に恵まれ、温かな環境の中で教育活動を進めることができる。生徒たちも地域を愛し、地域に笑顔を届けようと一生懸命に明るく元気に活動している。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

本校の主な活動は、「教室内外の学び」「地域との連携」を２つの柱として推進し、どちらも総合的な学習の時間に位置付け、全校生徒で取組めるよう教育課程を編成した。ホールスクールアプローチを通してこれまで取組んできたことを見直し、整理し、位置付けを明確にしたことで、教職員の意識も高まり各活動がこれまで以上に充実したものとなった。

教員

校内での ESD 研修会の開催やユネスコスクールに関わる海外の教職員との交流、ユネスコスクール関係の研修会等への参加を通して、ESD に対する教職員の意識が向上した。さらに、ホールスクールアプローチをもとにビジョンや活動方針が明確になったことで、教職員が共通理解を図りながら積極的に活動に取組むようになった。

児童生徒

生徒会が中心となって地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト」を企画し、継続して取組む中で、地域を明るく元気にするために自分たちができることを考え、地域を大切にし、誇りを持って活動に取組んでいる。県内外の学校との交流において自信を持って自分たちの活動を発信し、生徒一人一人が何事にも積極的に活動できるようになった。

次年度以降の活動

本校の ESD のビジョン「たくましく未来を創る生徒」を目指して、４つの観点「学校運営」「教室内外の学び」「地域との連携」「設備と環境」をもとに教育活動を推進していく。特に、「教室内外の学び」では地域貢献活動『笑顔創造プロジェクト』を継続して地域に笑顔と元気を届けること、「地域との連携」では地場産業を学び地域を知り地域を愛する心情を育てること、「設備と環境」では津波の石碑調査活動を継続して震災の風化を防ぐとともに地域の防災意識の高揚を図ることを重点に取組んでいきたい。また、ホールスクールアプローチに SDGs の視点を取り入れ、ホールスクールアプローチ・デザインシートに明示することで、教職員で共通理解のもと SDGs を意識しながら諸活動に取組んでいきたい。そして、全校生徒二十数名の小さなへき地の学校の地域に支えられた取組や明るく元気な生徒たちの活躍をこれからも発信していきたい。

学校情報

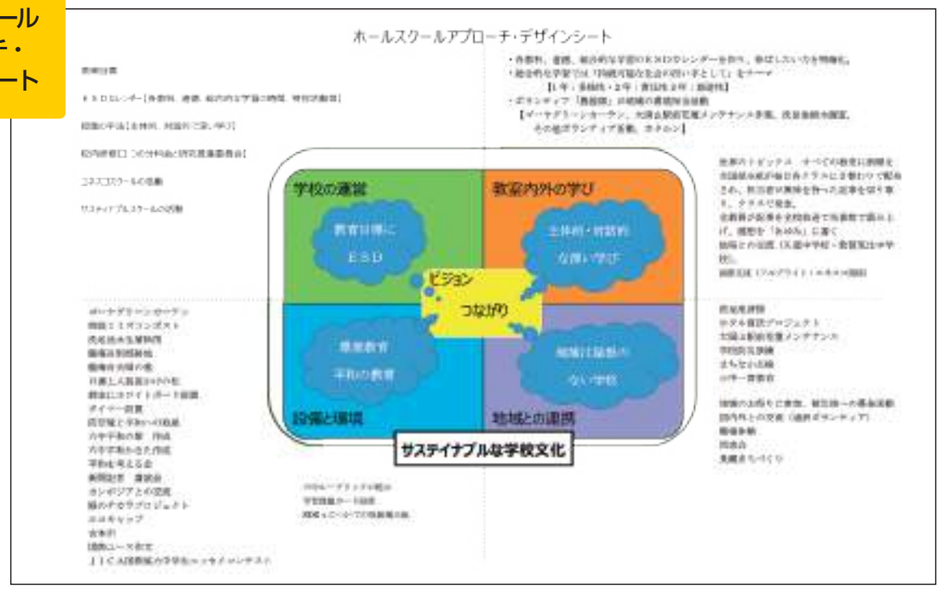
学校名	石巻市立牡鹿中学校	TEL	（0225）45-3117
児童・生徒数	30 名	E-MAIL	jhsoshicl@city.ishinomaki.lg.jp
住所	宮城県石巻市鮎川浜鬼形山 1-24	HP	http://www.city.ishinomaki.lg.jp/school/20402100/index.html

大田区立大森第六中学校

KEYWORD
防災学習　生物多様性
環境学習　国際理解学習

「地域は屋根のない学校」から始まったESD推進及び授業改善

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

- ESD カレンダーに加え、SDGs カレンダーを作成することができた。小中連携で作成した SDG s カレンダーは今後も精査し加筆していきたい。
- 全教科、全領域で、1 年間を通して、ESD であり、SDGs 達成を心がけている。
- 「食」については、家庭科と養護教諭と栄養士の連携で給食の献立を見直し、生徒が考えたメニューを栄養士が再考し、給食の残食量を減らす取組になった。さらに、保健給食委員が、毎日給食の残食量を掲示板に公表し、全校生徒に喚起している。各クラスで考えた献立のポイントを給食時の全校放送で発信している。また、毎月 19 日は食育の日で、保健給食委員が、各クラスで栄養の取り方等を発表している。出前授業で「味の素、食の力プロジェクト」を全校でおこない、食のあり方、トップアスリートの食の取り方を学び、中学生にとっての間食を知るきっかけとなった。
- 気候変動については、「低炭素杯 2018」のファイナリストとして、生徒が舞台で発表し、全校生徒に学習成果発表会で披露したことで、気候変動について関心を高め、とくに CO2 を発生させることが温暖化に結びついていることから、プラスチックの使用、節電、ストローの使用等について生徒の意識を高めている。出前授業で「地球温暖化防止コミュニケーション」の元気象キャスターの方たちに来ていただき、温暖化の現状を知り、どのような未来を築いたらよいのかを考えさせる授業をおこなった。
- 発信する力が大切であることを生徒が学び、生徒会が実行している。現在の校則を見直し、水筒の所持について、教師側に訴え、違反物を絶対許さないキャンペーンを実施、全校放送で生徒に向けて発信した。自治活動の大切さを生徒自ら感じ始めている。これも本校の教育活動が生徒に根付き始めた成果であると考える。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

多くのヒントをいただいた。他校との交流では「井の中の蛙」になりがちな学校社会の中で、とても重要な機会を与えていただいたことに感謝している。教師のやる気に火をつけていただいた。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校
学校全体が、SDGs を意識し、あらゆる掲示板に SDGs のロゴがみられるようになった。その中でも、「食」「気候変動」に対する意識は高まり、地域の方にも発信できるようになっている。生徒の変容が、学校や地域に影響を与えるようになっていることが成果である。

教員
全教員が授業やその他の教育活動で、「食」「気候変動」を含めた SDGs に関心を高め、職員室の話題も SDGs/ESD の話題にあふれている。若手教員の成長が著しく、多くの研究会に顔を出し、積極的に他校の教員と連携を組み、研修している。授業の中に生かし、ネットワークを広げることで、本校の取組がより活性化している。

児童生徒
生徒の学びが深まっていることを数字で表すことが難しいと感じていたため、自己評価を中心に評価をポートフォリオしながら、変容をみとっていた。その例が「ESD アンケート」であり、「六中 ESD ルーブリック」である。それに加え、今年度は進路に多くつながった。本校の取組に積極的に参加した生徒が最難関校に推薦で合格したことは、一つの成果であるといえる。

次年度以降の活動

次年度以降も研修は継続しておこない、サステイナブルスクールとしての役割を果たす計画である。次年度は国立教育政策研究所での教育課程推進校が決定しているため、国内に向けてさらに発信することができる予定である。ホールスクールアプローチが中学校では難しいといわれる中、事例発表をおこなっていきたい。

学校情報

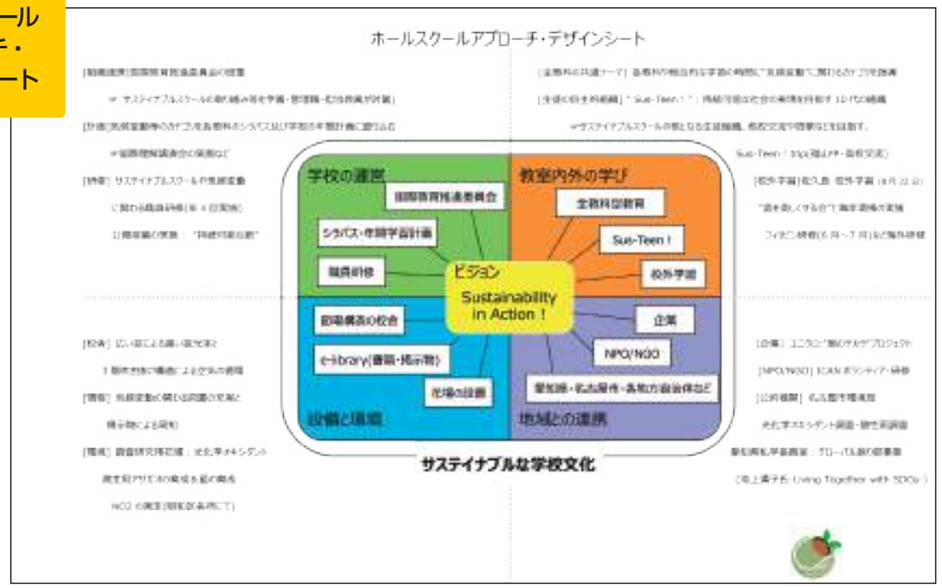
学校名	大田区立大森第六中学校	TEL	（03）3726-7155
児童・生徒数	400 名	E-MAIL	oomoridai6-js2@ota-school.ed.jp
住所	東京都大田区南千束 1-33-1	HP	http://oomoridai6-js.ota-school.ed.jp/

名古屋国際中学校・高等学校

世界と日本の未来を担う国際人になるために

KEYWORD
国際理解学習　気候変動
環境学習　防災学習

ホールスクール
アプローチ・
デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

3 年間、ホールスクールアプローチの手法で活動を実践していく上で、〈教室内外の学び〉の領域に関わる【教員と生徒の組織的連携と協働】に大きな発展が見られた。特に、教員間では Sus-Teacher と呼ばれる各分野の先生による教員組織が編成され、生徒内では Sus-Teen! と呼ばれる自主的な組織が創立し、通常授業や総合での学習よりさらに深く学びたいと思う生徒たちが集まった。この 2 つの組織のミックスアップによって柔軟で革新的な実践をおこなうことができた。また、Sus-Teen! から全校生徒への啓発活動をおこなう事により学校全体への波及にもつながった。

【特色ある活動】

下記は、Sus-Teachert とのコミュニケーションをとりながら、共に楽しみながら Sus-Teen! メンバーが実践したものです。生徒と教員が連携することで学校組織としての支援や保護者からの支援も受けやすくなった。

- ユネスコビデオカンファレンス :2018 年 5 月モンテネグロ・インドネシア、6 月ナミビアの学校と気候変動をテーマに自校の実践報告と意見交換をおこなう。ファシリテーター：ユネスコ本部 (パリ)。中学 1 ～ 3 年約 30 名
- Kings College(イギリス , ロンドン ,IB 校) への学校訪問: 2018 年 9 月。中学 3 年生 8 名
- ユネスコ交流会 (2017 分科会発表 .2018 ポスターセッション): 環境学習報告と発表。中学 2 年生 3 名
- バンコク都のための SDGs 推進研修 (2018.7.4): バンコク都庁職員 14 名・国連地域開発センター 2 名の学校視察と本校生徒との交流。中学 2 ～ 3 年生約 15 名
- 愛知県佐久島への環境学習：2017 年・2018 年 9 月島を美しくつくる会会長講話・海岸清掃
- JCI 少年少女国連大使派遣 (アメリカ , ニューヨーク)：2017 年～ 2018 年中学 2 年 2 名。環境活動の啓発と海外交流
- オーストラリア・ジロング市との湿地提携に基づく人的交流事業：2018 年 , 中学 3 年 1 名派遣、名古屋市主催
- ESD ユースカンファレンス学校訪問 (2018 年 9 月)：ESD ユースの方々約 20 名と本校生徒との交流
  その他、韓国や中国、フランス等の学校関係者等が来校し、さまざまなテーマの下、交流を深めた。
- なごや環境デー出展：2018 年 9 月。中学 1 ～ 3 年生約 25 名
- ECO プロダクツ出展：2018 年 12 月。中学 3 年生 8 名。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

生徒・教員の自主的で柔軟な活動とボトムアップ型による組織が最大の特徴である。生徒・教員が「やりたい！」と思うことを、比較的自由に活動することが可能な学校体系がある。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

外部との交流機会を重ねることによる生徒の成長や保護者の方々からの好意的なご意見をいただくことにより、活動に対して好意的になり、学校全体でよりスムーズに実施できるようになった。その結果、教員全体にも活動を波及することができた。また、学校と他校・地域・企業・国連機関等協働する機会が格段に多くなり、生徒・教員にとって広い視野を獲得できるようになった。

教員

総合的な学習の時間や生徒の自主的な活動等、生徒たちの活動が多岐にわたる事により、教員はそれ以上の研究や研修が必要になることで知識やスキル等の実践力がついた。また、情報へのアクセスや他の教員や外部の方々との対話の機会も格段に増加した。その結果、通常の授業法も、一方的な学習でなく対話型やグループワーク等への変化が多く見られるようになった。

児童生徒

さまざまな分野の方々との交流機会を設けたことによりコミュニケーション・プレゼンテーション能力の向上がみられた。また、交流の中で、自らの知識や分析力、時事的な内容、世界の動き、歴史や文化等の教養等の不備に気付き、日頃の勉学に対する意識の向上もみられた。また、実践した内容が、報告会等で評価されたことにより、生徒達の気持ちややる気の持続性も向上した。

次年度以降の活動

中学校課程で創立した生徒の自主的活動 Sus-Teen! の生徒たちが高校課程に進級し、Sus-Teen! High の新規創設をする。高校生にしかできない外部交流を増やすことで、新しい活動のエリアを拡大していく。またそれぞれの組織が他のサステイナブルスクールへの訪問や協働報告をおこなう等交流の機会を内外に増やし、よりよい人間性の構築と学習意欲の向上をめざす。全体のテーマとしては、既存のテーマに加え、SDGs に関わる内容を軸に活動を増やしていく。

学校情報

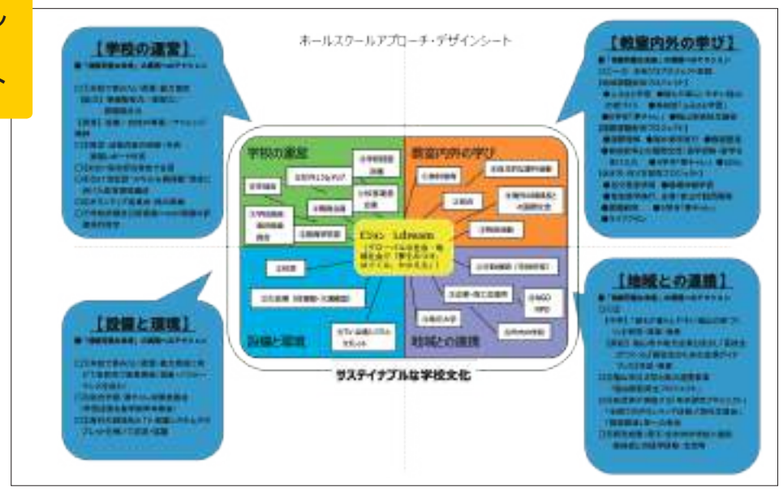
学校名	名古屋国際中学校・高等学校	TEL	（052）858-2200
児童・生徒数	709 名	E-MAIL	senior@nihs.ed.jp
住所	愛知県名古屋市昭和区広路本町 1-16	HP	http://www.nihs.ed.jp

福山市立福山中・高等学校

KEYWORD
国際理解学習　その他（地域課題解決学習・生き方在り方探究）

グローバルな社会・地域社会で「夢をみつけ、はぐくみ、かなえる」

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

1本校 ESD のねらい

総合的な学習の時間を中心に他教科や特別活動と関連づけながら3つのプロジェクトを通して（①「地域課題解決プロジェクト」②「国際課題解決プロジェクト」③「生き方・在り方探究プロジェクト」）グローバルな社会・地域社会で活躍する資質・能力をもった生徒を育成する。

2本校で育みたい6つの資質・能力

情報整理力 / 表現力 / 課題解決能力 / 協働 / 自他の尊重 / チャレンジ精神

3地域や関係機関と連携した ESD の推進

- 福山市役所（企画政策課・産業振興課・青少年課・市民相談課）、市民参画センター
- 福山市立大学　都市経営学部
- 福山商工会議所、福山青年会議所、みつぎ総合病院、中国銀行、他　地域の 18 社

4本校 ESD 3主要プロジェクトの主な取組

（1）地域課題解決プロジェクト

実地見聞を伴う体験的な学習を通して、地域を知り、課題解決に取組む力を育成する。

①中1「ふるさと学習」（地元福山について歴史や資源等について理解を深める）
②中1「誰もが暮らしやすい福山の街づくり」（出身地域の長所と課題を冊子化する）
③高1「グローカル人材育成事業」（福山市の企業を研究し、冊子「Hi-Hi ふくやま」を発行する）
④高2「夢チャレ」（各自が夢の実現に資する活動に挑戦し、学びをまとめ発表する）
⑤高2「福山高校 × 福山市立大学　高大連携事業」（大学生と協働しまちづくりについて調査・研究・提案する）

（2）国際課題解決プロジェクト

海外修学旅行先や姉妹校と国際交流・調査・発表をおこなう。思考・解決・提案型の交流活動をおこなう。

①中3、高2「国際理解」（各自がテーマを設定し、調査結果を発表する）
②高2「海外修学旅行」（マレーシアの高校生と地球環境問題 SDGs について発表・討論する）
③ ICC「模擬国連」（部活を中心に模擬国連に取組み、研修会・全国大会に出場）
④姉妹校等との「国際交流・語学研修・留学生受け入れ」（韓国、オーストラリア、マウイ）
⑤高2「夢チャレ」（夢の実現に向けた活動に挑戦し、学びを発表する、フィリピン支援、観光甲子園等）

（3）生き方・在り方探究プロジェクト

自他の長所や魅力を発見し自尊心を高め、ライフプランを設定し、よりよい「生き方・在り方」を考える。

①中1「自分発見学習」（小学校の活動〔賞状、認定書等〕から自身の魅力を発見する）
②中2「職場体験学習」（マナー学習を行ったうえで5日間体験をおこなう）
③中3「東京修学旅行、企業・官公庁訪問研修」（研修テーマを設け生徒が運営する）
④高1「ライフプラン」（講演会やインタビューを通して夢や目標を設定する）
⑤高2「夢チャレ」（各自が夢の実現に資する活動に挑戦し、学びをまとめ発表する）
⑥高3「課題研究」（進路に関連した課題を SDGs に基づいて設定し、調査・研究を行おこない発表する）

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

市役所や大学、他の関係機関と連携して「グローバルな社会・地域社会」で活躍する資質を備えた生徒を育成していること。本校の大きな特徴は、「国際交流」（オーストラリア、韓国、シンガポール等）と、「ESD」を中心に「地域課題解決・国際課題解決プロジェクト」等に取組んでいることです。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

（主な成果）

①これまでの実践を「ESD の観点で整理・構造化」できた。
②「本校で育みたい資質・能力」を明確化し、教育内容を6観点で「カリキュラムマップ」に整理できた。
②ESD が「本校の特色」の1つとなった。（もう1つは「グローバル」）

（今後の課題）

①カリキュラムマップの精度を高める。
②「ルーブリック評価」の追跡を長期的におこなう。
③「学校丸ごと ESD」「どこを切っても ESD」を目指す（ゴミ、紙資料、交通手段等、あらゆる面で持続可能な方法を考える）。

教員

（主な成果）

①研修等を通じて、各教員に ESD の考えが浸透。過去の取組の多くが ESD の方向性にあることを認識した。
②「SDGs 授業実践集」を作成した。

（今後の課題）

①サステナビリティを校内外で実践できる状態を目指す。

児童生徒

（主な成果）

①主体的に取組んでいた。（観光甲子園最優秀賞、全日本高校模擬国連4年連続5度目の出場、国際ボランティア等）
②資質・能力評価ルーブリック（5段階）で成果が見られた。
- 第1回（春）から第2回（秋）にかけて、どの学年も上昇（生徒が自己成長を実感）。「学校平均」は、2.0 から 2.3 に上昇。
- 2年間実施学年では 0.8 上昇、1年間実施学年では 0.5 上昇した（長期の方が資質・能力が伸びる）。

（今後の課題）

①ルーブリックやその意義をさらに共有し主体的な実践を促す。
② ESD 活動や意義を生徒が説明できる状態を目指す。

次年度以降の活動

（学校内の活動）

①ユネスコスクールとして、さらなる活動を推進する。（特にこれからは福山市と連携して地域課題解決にもより力を注ぐ。）
②「学校の設備や環境」等を含めて出来る範囲で実際に ESD を進めたい。紙資源や水資源等の節約から始める等。
③市内の企業に SDGs への取組を取材する。
④生徒から見た校内外の課題を取り上げ、解決する。

（サステイナブルスクールとしての活動）

①他校との交流を視野に入れる。

学校情報

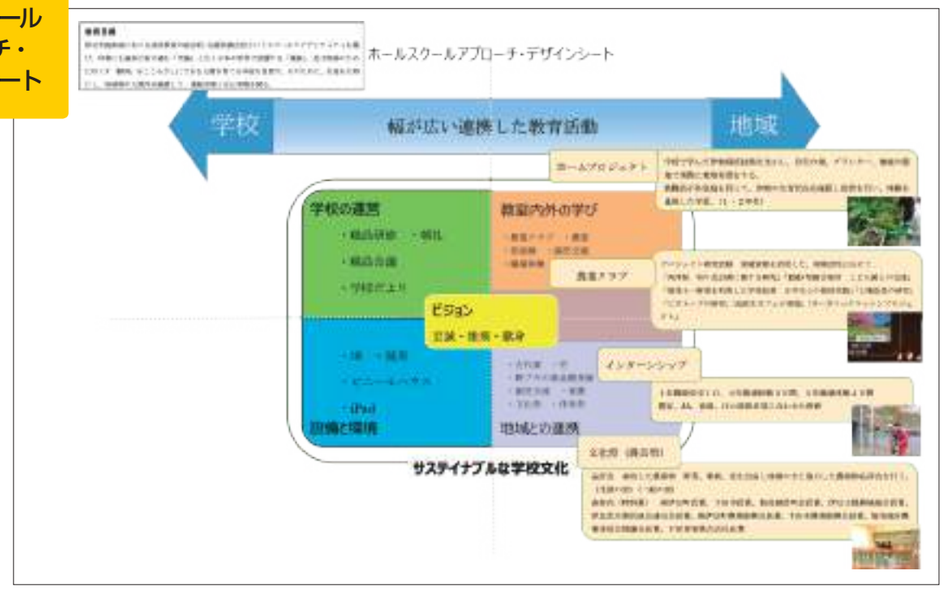
学校名	福山市立福山中・高等学校
児童・生徒数	934 名（中学 355 名、高校 579 名）
住所	広島県福山市赤坂町赤坂 910 番地
TEL	（084）951-5978
E-MAIL	kou-ichifuku-t11@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp
HP	http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/kou-ichifuku/

静岡県立下田高等学校南伊豆分校

地域社会の将来を担う人材育成へ　今分校ができること

KEYWORD
防災学習　生物多様性　気候変動　エネルギー学習
環境学習　国際理解学習　世界遺産や地域の
文化財等に関する学習　その他

ホールスクール アプローチ・ デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

対象者（3学年・39人）
教科・領域：生物活用・総合実習ほか

平成 30 年度活動紹介（本校・認定こども園園児との交流）

第 1 回	5 月 10 日	顔合わせ・レクリエーション
第 2 回	6 月 14 日	ジャガイモ掘り
第 3 回	6 月 21 日	野菜カルタ
第 4 回	9 月 6 日	宝探し
第 5 回	9 月 13 日	ダイコンの播種と劇
第 6 回	10 月 4 日	ピザ作り
第 7 回	10 月 18 日	スタンプラリー
第 8 回	11 月 8 日	ステンドグラス材料集め
第 9 回	11 月 15 日	ダイコンの管理
第 10 回	12 月 13 日	ステンドグラスづくり
第 11 回	1 月 10 日	ダイコンの収穫＆焼き芋大会

南伊豆町は、昭和 30 年には 1 万 6000 千人の人が暮らしていました。しかし、現在は 8,400 人まで人口が減り、27 年後の 2045 年には、4,900 人にまで人口が減ると予想されています。さらに、深刻なのは 0 歳から 19 歳の人が 2045 年には 500 人になってしまうことです。そこで、この地域にも ESD の視点で物事を捉え、工夫していける人材を育む活動を広げていくことが必要であり、具体的には「進んで参加する態度」「つながりを尊重する態度」「他者と協力する態度」「コミュニケーションをおこなう力」「多面的、総合的に考える力」「未来像を予想して計画を立てる力」「批判的に考える力」を身につけることで、将来この地域を守り、行動できる人が増えていくと考えます。
従来の作物栽培や偏食改善に向けた交流や、昨年度、支持が高かった遊びの要素を取り入れた交流内容も盛り込みました。
今年度は、年に 11 回南伊豆認定こども園の 4 歳児、5 歳児との交流を実施、また南崎認定こども園の 4 歳児、5 歳児とも 4 回の交流を実施しました。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

地域の特性を生かし、農業の多面性を活用した学習の展開
校訓「大地豊穣」我々に豊かな実りをもたらしてくれる大地に感謝するとともに、土を大切にし、豊かな人間性を培うこと

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校
少子化による学校の統合合併等が進む中、地域から多くの期待が寄せられる学校です。このような活動を通して、学校存続意義や価値をサステイナブルスクールの切り口から取組を通して伝えることができるようになりました。
ESD 型園芸保育を続けて来て、園児と高校生の交流を続けてきましたが、これらの活動が周囲に認知され始め、今年度は小学校からの依頼により、園芸を通した活動が始まりました。数年間園芸保育のベースができ始め、小学校、中学校、社会福祉施設等、様々な方との交流をおこなうことが出来ました。

教員
活動を継続してきたことで、協力体制が得られやすくなっていると感じることがあります。今までやっていたことの後押しになっています。

児童生徒
サステイナブルスクール認定後、自分たちの活動に自信を持つ生徒が増え、進路についても、積極的な選択ができるようになりました。

次年度以降の活動

ESD は、日本での認知度は高いとは言えないため、広報活動に力を入れる必要があります。園芸保育では、距離と時間に問題のある、南崎認定こども園との交流活動も ICT 機器を利用して現在よりも回数を増やすことができないか検討中です。交流活動をデータベース化し、山間地に適した ESD を発信していくほか、偏食改善に向けたお野菜レシピの事例をインターネット上に公開することを予定しています。
また、園芸保育の他、「河津桜の切り花研究」や「オーガニックコットンプロジェクト」等地域に根差した活動を展開していきたいと考えています。

学校情報

学校名	静岡県立下田高等学校南伊豆分校	TEL	（0558）62-0103
児童・生徒数	98 名	E-MAIL	minamiizu-b@edu.pref.shizuoka.jp
住所	静岡県賀茂郡南伊豆町石井５８	HP	http://www.edu.pref.shizuoka.jp/minamiizu-b/home.nsf

広島県立安古市高等学校

KEYWORD
気候変動　エネルギー学習
環境学習　国際理解学習　その他

「頑張ることがかっこいい」を合言葉に、さらなる高みをめざす

ホールスクールアプローチ・デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

本校は、校訓「仰高」（心豊かな人生の創造をめざし高遠の理想を仰ぐ）の精神のもと、広島を愛しグローバル社会に貢献できるリーダーを育成することを使命としている。ESDを、持続可能な開発に関する諸課題の解決に向け、具体的・継続的に考え、実践する諸活動の総体と捉え、隣人、地域や世界の人々とつながるために不可欠な言語や合理的思考を裏付ける「論理力」と、相手の考えや思いを理解し受けとめる「共感力」をもとに、持続可能な社会の担い手を育てることを柱として、総合的な学習の時間を中心に① SDGs の実現に係わる学習活動②人権尊重に係わる学習活動③課題発見・解決に係わる探究活動等をおこなった。また、サステイナブルスクール参加校としてホールスクールアプローチの改善に取組み、地域連携も継続拡大することができた。なお、これらの取組に対して広島県ユネスコ ESD 大賞（高等学校の部）を受賞した。

持続可能な社会の形成に係わる活動

１学年では、SDGs の基礎的事項を３年生による出張授業により学習し、新聞切抜き作品制作の協働学習に取組んだ。班単位でSDGs に関するテーマを設定し、情報収集、整理・分析、完成作品によるプレゼンテーションを実施した。
３学年では、２年次におこなった探究活動の成果を SDGs へと繋ぎ、持続可能な社会の実現にむけて討議を重ね、各クラスによる課題解決策の提案及び学年全体でのパネルディスカッションを実施した。

人権尊重に係わる活動

１学年では、ディベートの手法を用いて論理的で共感の得られる主張、肯定・否定両者の主張を傾聴し論理的に分析した公正な審判、それぞれの立場にたって考えることの重要性への気づき等を通して、人権尊重の理念を具体的に学んだ。

課題発見・解決に係わる探究活動

２学年では、生徒が各自の関心領域において課題を設定し通年での探究活動に取組んだ。多様な課題への解決策を模索し、全員がポスター発表をおこなった。この学習を発展させて、３学年での SDGs にむけた貢献策の提案へと深化を図った。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

生徒たちは「頑張ることがかっこいい」を合言葉に、異なる価値観を持つ他者との協働を通して自分自身の考えを深め、それを発信することでさらなる高みを目指している。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

- 総合的な学習の時間において、ESD の視点を組み込んだ３カ年のカリキュラムを作成した。また、他教科においても各単元と SDGs のつながりを可視化するカリキュラムマップ作成に着手することができた。
- 地域防災活動や伝統行事の継承等で、地域と積極的に交流するようになった。
- ポスター発表やパネルディスカッション等の生徒の成果発表を公開することを通して、保護者や地域にも SDGs について考えてもらう機会を作ることができた。

教員

- 総合的な学習の時間をはじめとした各教科の授業を ESD の視点から見直すとともに、生徒の主体的で対話的な深い学びを導き出す発問の工夫に取組むようになった。
- 地域連携の強化等、ESD の有効性、有用性への理解が進んできた。
- 広島県のユネスコスクールが加盟する連絡協議会の事務局となり、研修会の運営や研究集録の作成等、ESD をさらに広める役割を担うようになってきた。

児童生徒

- SDGs に関する学習への意欲的な参加、活動がみられるようになった。そのことで、気候変動等に対する危機感を共有し、地域活性化や地域防災の活動に積極的に参加するようになった。
- 探究活動の中で、持続可能な社会の実現の困難さと同時に、実現にむけた努力・工夫の必要性を感じるようになった。さらに、各自の進路希望・進路に関わる学問領域で SDGs の実現に資する方策を考え提案する等、具体的に考えるようになった。

次年度以降の活動

次年度以降も引き続き、総合的な学習の時間を中心として①持続可能な社会の形成に係わる活動②人権尊重に係わる活動③課題発見・解決に係わる探究活動を継続し、さらに深化させる。
特に来年度は SCoPA（パリ協定に関する学生会議）に参画し、国内外の高校・大学・国際機関と協働して地球環境問題に取組む。オーストラリアの姉妹校とも地球環境問題をテーマとしたディスカッションに取組む。また、地域との連携も継続・強化し、地域活性化、地域防災・伝統文化継承等に貢献する。さらに、教科学習・特別活動も含め、ESD の視点から学校全体の見直しを継続する。
引き続き、広島県ユネスコスクール連絡協議会事務局校として ESD 研修会の運営や研究集録の作成をおこない、ESD を広める役割を果たしていく。

学校情報

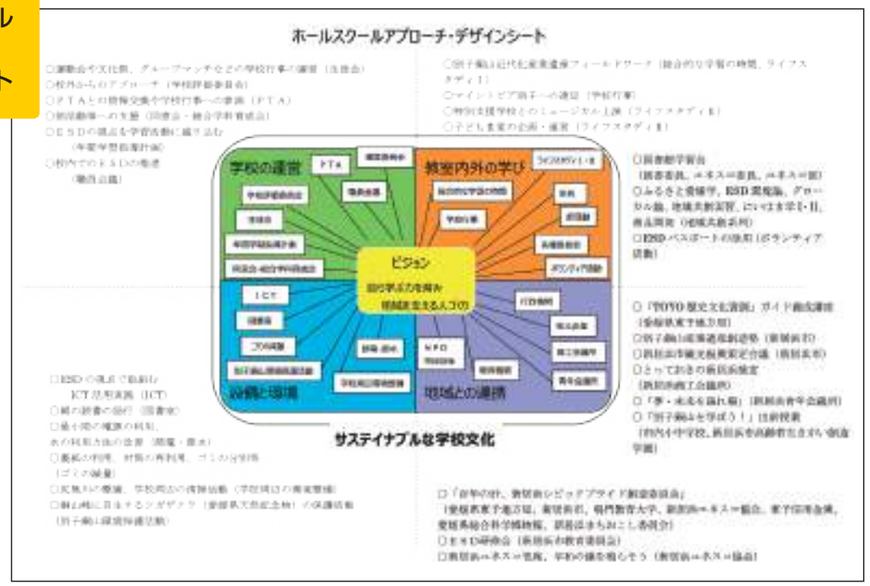
学校名	広島県立安古市高等学校
児童・生徒数	949 名
住所	広島県広島市安佐南区 毘沙門台三丁目３番１号
TEL	（082）879-4511
E-MAIL	yasufuruichi-h@hiroshima-c.ed.jp
HP	www.yasufuruichi-h.hiroshima-c.ed.jp

愛媛県立新居浜南高等学校

マインからマインドへ

KEYWORD
環境学習、国際理解学習、
世界遺産や地域の文化財等に
関する学習

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

- ESD 中高連携事業「ふるさと学習」出前授業［新居浜市内各中学校・本校主催］（東・南・別子・船木・角野・中萩・川東中学校 1 年生計 596 名、3 年生 266 名、本校生 52 名）4 ～ 11 月
- 総合的な学習の時間「ライフスタディⅠ～別子銅山近代化産業遺産フィールドワーク in 山根エリア～」（2 年次生 119 名）5 月
- 銅山峰の高山植物ツガザクラ保護活動［憧山会･本校主催］（憧山会 15 名、本校生 20 名）5 月・10 月
- 新居浜市転入者ウェルカムバスツアー［新居浜市主催］（転入者 28 名、市職員 8 名、本校生 12 名）7・11 月
- 県立学校新規採用教員地域理解研修～別子銅山登山研修～［本校主催］（高校教員 9 名、本校生 7 名）
- 「工都新居浜市 80 年の歩みから見えてくるもの」展［新居浜まちおこし委員会主催］（一般 3,600 名、本校生 30 名）8 月
- 教員のための博物館の日 2018［愛媛県総合科学博物館主催］（小中学校教員 20 名、本校生 7 名）8 月
- 一宮グループ役員研修～別子銅山・東平地区～［一宮グループ主催］（関係役員 30 名、本校生 5 名）9 月
- 中国古銅器展　別子銅山の遺産展ガイド［新居浜市主催］（一般 200 名、本校生 15 名）9 月
- 総合的な学習の時間「ライフスタディⅠ～ ESD 講演会　愛媛大学　小林修准教授～」（2 年次生 119 名）9 月
- 惣開観月会［惣開小学校･惣開公民館主催］（地域住民約 1,000 名、本校生 5 名）9 月
- 別子銅山の歴史と自然を学ぼう！［新居浜市社会福祉協議会主催］（小学生 3 ～ 6 年生 30 名、本校生 5 名）9 月
- 学生と市長の懇談会［新居浜市主催］（市内学生 18 名内本校生 3 名、市長）10 月
- サステイナブルスクール・ヒアリング調査［ACCU主催］（福岡教育大学石丸哲史教授、校長・教頭・関係教諭、本校生 5 名）10 月
- 高松･泉会（住友関係企業幹部）別子銅山登山研修ガイド［高松・泉会主催］（関係幹部 30 名、本校生 5 名）10 月
- 新居浜市立惣開小学校ぶらりウォーク［小学校主催］（4 年生 57 名、保護者・地域住民 100 名、本校生 5 名）10 月
- 旧広瀬邸台所喫茶観光ガイド［新居浜市広瀬歴史記念館主催］（一般 101 名ガイド、本校生 10 名）10 月
- えひめ景観シンポジウム 2018［愛媛県主催］（一般 400 名、本校生 5 名）11 月
- 高校生といっしょに別子銅山を探検しよう！ in 角野［角野公民館主催］（角野小学校 6 年生 103 名、本校生 18 名）12 月
- ESD 環境教育プロジェクト成果報告会［本校主催］（全校生徒 341 名、一般 40 名、ESD アドバイザーとして鳴門教育大学近森憲助特命教授）1 月

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

地域・企業・行政等と連携・協働しながら「学びの絆サイクル（持続的発展可能な地域づくりの学びを子どもから大人へと循環する仕組み）」を紡ぎ「シビックプライド（地域への愛着や誇り）」を育む学校

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

- 新教育課程となる地域共創系列が創設され、ESD を推進し、SDGs を目指したカリキュラムが実践されるようになった。
- 愛媛県東予地方局、新居浜市との連携が深まり、事業への積極的な参画、協働がおこなえるようになった。
- 市内小中学校との信頼関係が深まり、出前授業やフィールドワーク等の活動が積極的に、より円滑に推進できるようになった。

教員

- 鳴門教育大学や愛媛大学との連携が深まり、学校運営に関するアドバイスや教職員あるいは生徒への研修の機会を通して、ESD への意識が定着してきた。
- ESD や SDGs を意識した取組が総合的な学習の時間や地域共創系列での実践として始まり、完成年度となる次年度での本格導入に向けた準備が多くの教科で具現化した。

児童生徒

- 地域に対する関心が高まるとともに、視野が広がり、シビックプライドが醸成された。
- ふるさとの歴史や文化を大切にして、後世に残していこうとする使命感が生まれた。
- ボランティア活動をはじめとする地域の様々なイベントに積極的に参加した。さらには自らが企画・運営して地域と連携・協働した別子銅山の近代化産業遺産を観光資源とした観光ツアー、学習講座等の様々な実践活動へつなげ、キャリア教育の充実も図ることができた。

次年度以降の活動

- 地域共創系列の完成年度における実践を通じたカリキュラムの作成
- 総合的な学習の時間に加えて、学校行事や各教科、さらには教育課程全般における ESD、SDGs を意識した取組の推進
- 同じサステイナブルスクールである新居浜市立惣開小学校との連携事業の深化とともに市内各校（市内全小中学校ユネスコスクール）との連携の広域化
- 地域・企業・行政等と連携・協働の更なる深化

学校情報

学校名	愛媛県立新居浜南高等学校	TEL	（0897）43-6191
児童・生徒数	341 名	E-MAIL	niish-ad@esnet.ed.jp
住所	愛媛県新居浜市篠場町 1 番 32 号	HP	http://niihamaminami-h.esnet.ed.jp/

独立行政法人国立高等専門学校機構

福島工業高等専門学校

KEYWORD
防災学習　エネルギー学習
環境学習　国際理解学習

いわきから世界に活躍するイノベーション人材を育てる

ホールスクール
アプローチ・
デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

サステイナブルスクールとして 3 年目を迎えた今年度は、当初の計画どおり、ビジネスコミュニケーション学科 3 年生 40 名を対象に「開発学入門」を開講した。持続可能な社会を達成していくために解決すべき課題を調査し、その特徴や状況等について、グループディスカッションを行い、その結果をプレゼンテーションとして発表している。専門教育として、より高度な教育に取組んでいる。

また、この ESD 教育を工学系の学生へと対象を広げるため、平成 31 年 1 月 15 日（火）に、東北地方 ESD 活動支援センターコーディネーターの海藤節生氏による「サステイナブルスクール講演会」を開催した（工学系の 4 年生 80 名対象）。SDGs の 17 の目標と 169 のターゲットを中心に、持続可能な社会づくりについて学んだ。

東日本大震災以降に本校が取組んでいる「地域復興人材育成」、「福島イノベーション･コースト構想に貢献できる人材育成」等において、ESD を活用できる教育の一助となった。

さらに今年度は、これまでの学びを地域に還元するため、学生有志により小中学生向け教材「SDGs カードゲーム」を制作している。この制作にかかる事前指導として課外活動をおこなった。そこでは ESD コーディネーターの海藤氏やオーストラリアからの短期留学生の参加もあり、多様な意見に刺激を受けながら作業をおこなうことができた。このカードゲームを使用して、いかに小中学生の気付きへ結びつけるか、というテーマでの発表もおこなわれ、参加学生自らの深い学びにもつながっていた。現在は完成を目指して検討を重ねており、小中学生に SDGs に触れてもらうきっかけとして、学童教室等で活動する予定である。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

地域復興、持続可能な社会への貢献ということに対して学生の意識が高いこと。また、専門教育の提供や関連団体との連携による体制等の環境が充実している。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

この活動が開始された平成 28 年度に ESD の必要性を学ぶことから始めた当時と比較して、専門科目における「開発学入門」の開講、ESD 関連のクラブの発足、小中学生向け教材の「SDGs カードゲーム」制作による地域への活動の展開まで、取組を充実させることができた。また、ESD 活動支援センターが認定する「地域 ESD 拠点」として、地域、現場での ESD 支援団体として登録することができた。

教員

まだまだ一部の教員が担当するのみであるが、学生が ESD 関連のイベントの参加や懸賞論文に応募して入選する等の結果を出している。それらの学生の活動が教員の意識に影響を与え始めている。学生の活動を介して教員の意識や行動に変化見られた。

児童生徒

ESD の必要性から学び始めた学生たちが、温暖化の影響に悩む島嶼国の問題、貧困問題や人権問題が自らの日々の消費に関連していることについて児童生徒に説明できるようになっている。様々な学びを得ることで、ESD 関連のクラブ活動の発足、「SDGs カードゲーム」制作による地域展開等、活動を開始する学生がうまれてきた。海外への短期留学への積極的な参加も見られる。実際に行動することから見える課題も貴重な学びとなるため、経験を活かしながら自らの成長につなげてほしいと考えている。

次年度以降の活動

これまでの活動により工学系、ビジネス系学科のいずれにも ESD について学ぶ機会を提供することができた。今年度から開講したビジネスコミュニケーション学科での専門科目「開発学入門」授業と併せて、これまでの取組を一過性のものとすることなく、本校が東日本大震災以降に取組んでいる「福島浜通りの持続可能な復興に貢献できる人材の育成」の実現に向けた重要な取組として、学内に浸透を図ることが大切であると考えている。

また、サステイナブルスクールとして地域への展開も求められており、この事業をきっかけとして開始された ESD 関連のクラブ活動、小中学生向け「SDGs カードゲーム」を用いた活動の発展に向けた検討を進めていきたいと考えている。

学校情報

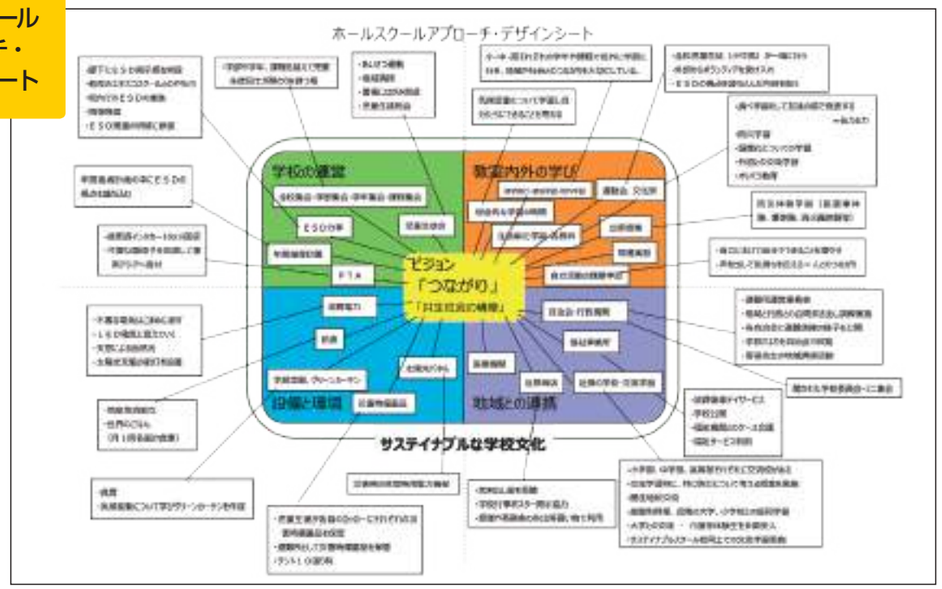
学校名	独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校	TEL	（0246）46-0705
学生数	1,079 名	E-MAIL	soumu@fukushima-nct.ac.jp
住所	福島県いわき市平上荒川字長尾 30	HP	http://www.fukushima-nct.ac.jp/

千葉県立桜が丘特別支援学校

KEYWORD
国際理解学習　防災学習
生物多様性　その他

「つながろう」桜が丘から地域へ　世界へ　そして　未来へと

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

本校の ESD 活動は、「つながり」をキーワードに、【学校内でのつながり】【地域とのつながり】【他校とのつながり】【社会や学校外とのつながり】の４つに分けて活動を整理している。また、ホールスクールアプローチ・デザインシートを活用し、本校の活動を「学校運営」「教室内外の学び」「設備と環境」「地域との連携」という視点でも整理することで、学校の全体で ESD 活動に取組んでいることが分かった。

学年を越えた学び合い　【学校内でのつながり】「学校運営」

高等部 A 課程１～３年の生徒が総合的な学習の時間に「持続可能な社会を目指して―スマホから考える世界と私とのつながり」という授業をした。生徒にとって身近なスマホが、多くの国の資源や労力を消費して作られており、紛争鉱物や組立て工場の人権問題につながっていることを学んだ。また、SDGs について学習し 17 の目標を達成するために自分達にできることを考え共有した。

地域の芸術・文化推進プロジェクトに参加　【地域とのつながり】「教室内外の学び・地域との連携」

小学部２～５年生の児童が、近隣の大学・小学校・自治体と共に、加曽利貝塚が題材の取組に参加している。実際に加曽利貝塚に行って火起こし体験をしたり、学芸員とボランティアの方が来校され縄文土器の作り方を学んだりした。

防災教育の実施　【社会や学校外とのつながり】「教室内外の学び・地域との連携」

６月を防災強化月間とし、避難訓練・消防車の放水見学・起震車や消火器等の体験学習･避難所開設委員会の実施(自治体･行政・本校）・炊き出し訓練（保護者・自治体・本校職員）等、自治体や行政とのつながりをもち、防災について取組んだ。

児童生徒会活動　【学校内でのつながり】「設備と環境」

生徒による発案で、よりよい学校を作ろうと、節電についてのポスターを作成・掲示し、全校の児童生徒に呼びかけた。

交流学習の実施　【他校とのつながり】「地域との連携」

- **サステイナブルスクール校同士の交流学習　２年目の取組**

小学部：宮城県登米市立米谷小学校と自己紹介カードの交換や、Skype を用いてのダンス披露、合同合唱等をおこなった。
中学部：大阪府箕面こどもの森学園の生徒と自己紹介カードや手紙を交換した。

- **オリパラ教育と交流学習**

高等部の生徒が近隣の小学校を訪問してボッチャを教えた。パラスポーツの普及だけでなく、異年代同士の関わりは互いに学びあえる有益な学習となった。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

障害の有無に関係なく、人と人が助け合い認め合いながら生活することのできる「共生社会の構築」に向けて、児童生徒が主体となって考え、学校全体で活動し、発信することのできる特別支援学校。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

ここの３年間で ESD の分掌が作られ、各学部に人員が配置され、組織的に ESD の活動に取組んできている。校内に ESD 掲示板が設けられ、各学部の取組を共有することができるようになった。本校の目指す「共生社会の構築」に向けて、学校外とのつながりを広げることに重点的に取組んだ結果、文化祭や防災学習等全校で取組む活動で、地域や自治体と協力しておこなう場面が増えた。

教員

本校の ESD のキーワードである「つながり」や「共生社会の構築」を意識した学習に取組む学級が増え、全校で ESD の活動に取組むことができた。教員の興味関心の幅が広がってきたことで、ESD や SDGs を障害のある児童生徒の実態に合わせて、どのような授業ができるのかを考え、実践する教員が増えた。

児童生徒

地域や他校との交流学習を通して、様々な人とのつながりを強めることができたことで、児童生徒の興味関心の幅が広がったり、自分から行動するようになったりした。また、自分の考えを伝えたり、人の考えを聞いたりする学習を大切にしてきたことで、想いを共有する楽しさを感じることができた生徒が増えた。生徒自身が「桜が丘の ESD ＝つながり、共生社会の構築」ということを理解し、自分たちが発信しようとする意欲が育まれた。

次年度以降の活動

- ESD の取組をさらに充実させるために、ホールスクールアプローチ・デザインシートの内容を更新し、重点的に取組む活動を精選し、学校全体で取組んでいく。
- 校内の教員研修を通して SDGs について全職員で共有したり、各学部の学習と SDGs を関連させたりしていく。
- ESD 掲示板を定期的に更新する。オリパラ教育掲示板や防災教育と連携し、本校での取組を児童生徒、教員、保護者、来校者に発信・共有できるようにする。
- 日頃の授業や行事の様子を、ホームページを活用して紹介し、本校の ESD の取組を日本国内、世界に発信していく。継続的に ESD に取組んできた結果、自ら学び人と関わり合いながら成長する児童生徒の姿が見られるようになってきた。特別支援学校の児童生徒からの発信を続け、障害の有無に関係なく、人と人が助け合い認め合いながら生活することのできる共生社会の構築の実現に向け、活動を継続・発展させていきたい。

学校情報

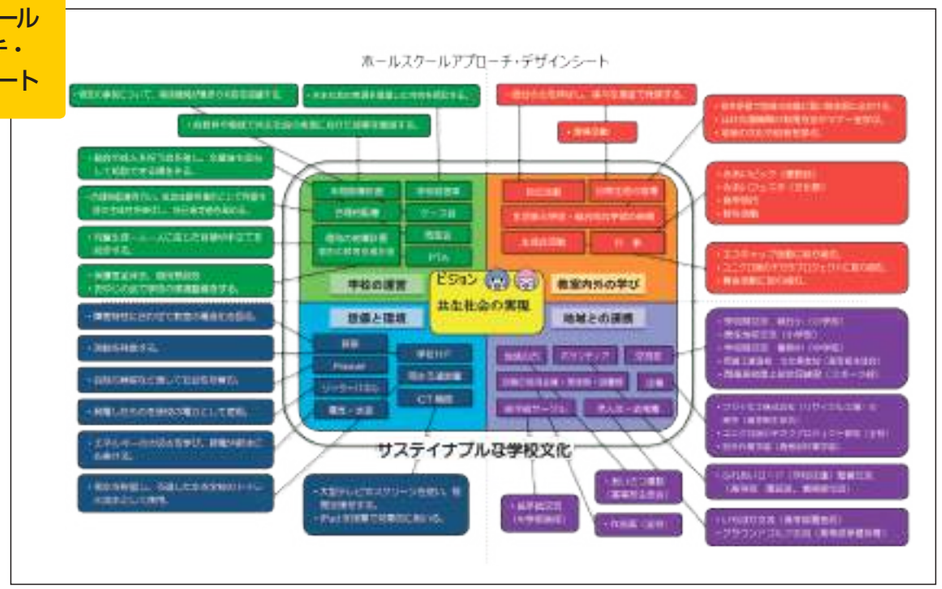
学校名	千葉県立桜が丘特別支援学校	TEL	（043）231-1449
児童・生徒数	163 名	E-MAIL	sakuragaoka-sh@chiba-c.ed.jp
住所	千葉県千葉市若葉区加曽利町 1538	HP	http://www.chiba-c.ed.jp/chibapref-sakuragaoka-sh/

愛知県立みあい特別支援学校

ESD と ICT でつながる社会、ひろがる豊かな心

KEYWORD
生物多様性
国際理解学習　その他

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

「服のチカラプロジェクト参加」

- **対象者　全校児童生徒（301 名）とその保護者、本校職員（154 名）**
- **教科・領域　特活（生徒会活動）**
- **時期　6 月から 11 月**

1 はじめに

服のチカラプロジェクトとは、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と（株）ファーストリテーリング (ユニクロ・ジーユー) とのパートナーシップのもとに取組む、児童・生徒向けの学習活動です。児童・生徒は、ユニクロまたはジーユー社員による出張授業を受けた後、着なくなった服を回収し、ファーストリテーリングと UNHCR を通して難民等服を本当に必要とする人々に届ける活動を展開しています。

身近な「服」を通じて、難民問題や環境問題に関心をもつきっかけにしたり、服の回収活動を通じて「自分にもできる社会貢献がある」と気付き、自ら行動する機会をつくったり、回収の呼びかけ等で地域社会とつながる機会をつくったりすることを目的としています。

本校の ESD を担当する職員が、ユネスコスクール交流会でたまたま講演されていたユニクロの方の話を聞いたことがきっかけで、本校もこのプロジェクトに参加させていただくことになりました。

2 取組の実際

活動の流れとしては以下の図の通りです。

時期	内容	担当
6 月 26 日（火） 5 限　学部集会	ユニクロ社員による出張授業	高等部全生徒
7 月	学部集会や全校集会で呼びかけ	中学部、高等部生徒会役員
7 月	保護者あて文書発行	高等部生徒会長
授業後～ 11 月	校内への呼びかけ、服の回収・発送	呼びかけ：高等部生徒会役員 服の整理：リネン班 服を回収：全校児童生徒、保護者
	服を回収カゴに入れる	全校児童生徒、保護者
11 月 18 日	みあいフェスタ（文化祭）で回収	高等部生徒会
1 月～	児童生徒と保護者に報告 ユニクロからフォトレポートが届く	高等部生徒会役員

3 成果と課題

高等部生徒会役員が中心となり、全校児童生徒と保護者、職員を巻き込んで活動ができたことが一番の成果だと感じます。中心となった高等部生徒会役員は、全校集会や保護者案内で呼びかけたり、回収した服を箱に詰めたりする等活動に積極的に取組みました。また、自分たちが呼びかけたことに反応し、多くの人が協力してくれたことで、服が集まり、そのことで達成感を得ることができました。高等部の生徒はユニクロの社員さんによる出張授業を聞くことで、服の大切さや難民の方々のつらさを知ったり、自分が着られなくなった服を学校に持っていき、カゴに入れるだけでも誰かの役に立てるということに気付いたりすることができました。

幅広い年代の児童生徒が集まる本校で、全校が一緒になって取組める活動はとても貴重です。今後も持続して活動を続けられるように体制を整え、児童生徒の自己肯定感が上がる活動にしていきたいと考えています。また、学校内だけにとどまらず地域の方々にも広く服の回収を呼びかける等地域とのつながりも深めていきたいと思います。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

- 開校して 10 年という新しい学校なので、いろいろなことに挑戦できる！
- 元気な児童生徒とまじめで研究熱心な先生方が多い！

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

本校児童生徒が校外に出て行くことで、地域の人や老人会、スーパーや店舗、公共交通機関の人々の理解が深まり、年々活動がしやすくなってきていることを感じます。

教員

研修会等を通して、ユネスコスクールであることや ESD という言葉や考え方等を意識する機会が増えた。自分の学校で取組まれている ESD 活動のテーマや具体的な活動について共通理解が進み、日々の授業の中に ESD を少しずつ意識している様子も見られてきました。

児童生徒

児童生徒が積極的な体験活動に取組むことにより、いろいろな方々と触れ合い、社会体験の機会が増えてきました。それによって、児童生徒の中にはいろいろなことに自分から挑戦してみようという姿勢がみられるようになりました。また、学校内の活動から学校外の活動へと広がりがみられ、児童生徒の自立や社会貢献へのつながりが強まってきました。身近なことに目を向け、それを解決する経験をすることで徐々に社会への興味関心が出てきたと感じます。

次年度以降の活動

基本的には今年度と同様の活動を実施します。

- 「自分の力を発揮する活動」
  各教科、清掃活動等
- 「社会に参加する活動」
  校外学習、学校間交流、部活動交流、いもほり交流、学校花壇整備交流、絵手紙交流、作品展、販売会等
- 「社会に役立つ活動」
  あいさつ運動、エコキャップ活動、服のチカラプロジェクト等

以上、児童生徒の実態に合わせて継続して取組んでいきたいと考えています。

学校情報

学校名	愛知県立みあい特別支援学校	TEL	（0564）57-0013
児童・生徒数	301 名	E-MAIL	miai-toku@pref.aichi.lg.jp
住所	愛知県岡崎市美合町並松 1-51	HP	http://www.miai-sh.aichi-c.ed.jp/index.html

NPO 法人　東京賢治の学校

東京賢治シュタイナー学校

心からの学びと心からの喜び　真に自立した人間を育てるために

KEYWORD

生物多様性　エネルギー学習　環境学習
国際理解学習　世界遺産や地域の文化等に
関する学習　その他

ホールスクールアプローチ・デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

- 2018 年 10 月 28 日に開催された「学校祭」
- 対象者　保護者・教員・1 年生〜高等部 12 年生までの全校生徒

毎年 1 回、学校を外部の方々に知っていただくために開き、教育内容、親の活動、生徒の活動を知っていただく 1 日になっている。学校全体がしっかりとつながり、開催している学校祭であるが、その運営には毎年課題が出てくる。その課題を解決するためには保護者との連携が重要になるが、その連携をよりスムーズにするために、各クラスの親の担当者が 1 か月に2回から3回集まり、実行委員会を開いてきた。ここ 3 年間は「有志による実行委員会コアメンバー」が生まれ、教員と親の動きの橋渡しをすることで教員との連携も密になった。そのことによって、課題の一つであった「保健所の指導に基づく衛生面の確保」にどのように取組むのかというテーマは、よりスムーズに解決していった。生徒の動きに関しては、高等部生徒は、自分達のアイデアを生かした模擬店を開いた。事前に何度も試作をし、教師、親、生徒同士で試食をした感想をもらう等して、作る時間や味等、技術をあげる努力をしていった。メニューには健康志向のお客さんのために、ベジ、ノンベジを分ける工夫や、生地を粉から作るピタ等、手作りの良さを生かした食事を用意した。当日はお客さんの長蛇の列ができたが、整理券を配って対応する等、臨機応変で責任感を持って行動が見られた。4 〜 8 年生の生徒の活動も、各学年の個性と工夫あふれるものとなった。8 年生は、全校の飲食物に使うリユース食器を洗う役目を担った。7年生は自作の人形と脚本による人形劇、6 年生は感覚体験のワークショップをおこなった。視覚をアイマスクで遮断し、6 年生の生徒による導きで手足の触覚、嗅覚、平衡感覚等様々な感覚を体験できる場を作った。5 年生は小さな子のための遊びの広場を用意し、落葉のお風呂や、焼き板磨き等自然と遊べるものを自分達で用意した。1年生から4年生の「アイヌ民族の踊り」は、アイヌ民族の方に踊りを指導して頂き、アイヌ刺繍を施した衣裳を着て取組んだ。

この学校祭は、生徒募集ひいては学校運営につながる大事な機会であるため、今年度は全家庭あげて広報活動に力を注いだ。その結果として、これまでで最大の 800 人近い来場者を迎えることが出来た。大勢のお客様を迎え、大きな混乱もなく、場に終始温かさと笑顔があふれていたことは、この学校のホールスクールアプローチの成果といえるだろう。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

自律した運営（NPO 法人）であるために、教員と保護者が真摯に協働して学校環境を創りだし、その中で小さな子ども達が個性を持った若者へとすくすく成長していく姿を、12 年（15 年）間にわたって見守ることができる学校です。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

設備環境面での持続可能性に教師会、理事会の焦点があたり、思い切って予算をかけて、校舎外観の整備が 3 年間かけておこなわれた。

校舎外側には伝統工法の木組みによる屋根と廊下が設置され、外壁は防水性、遮熱性を考えられた塗装、杉板張りに変容した。それも要因の一つとなって、学校への問い合わせ、編入・新入学の希望者が、3 年後の今年はかなり多くなった。

教員

日々は目の前の仕事に埋没していくことが多いが、校舎概観の変容、シュタイナー教育以外の現場に出かけていく機会の増加、問い合わせ者数の増加、等によりこの教育が社会にもたらす意味や、さらに持続した学校運営のために何が必要なのか、という観点をより強く意識するようになった。さらに、教員養成をおこなったが、たくさんの受講生が集まり、自校で教員養成が出来るだけの力が付いてきたことのあらわれとなった。

児童生徒

12 年間または、数年間、シュタイナー教育を受け、卒業を間近に控えた 12 年生の変容には大きな感動を覚える事ができる。一人一人が個性を持った人間としてゆったりと大地にたち、それぞれの道に進もうとしている姿に、教員・保護者は希望と励ましを感じることが出来る。課題の多い社会であり、学校運営であるが、さらにシュタイナー教育の実践にむけて前進するための勇気をもらっている。

次年度以降の活動

『学校内の活動』

①ミツバチプロジェクト　私たちの生活に深い関わりがありながら、これまで意識してこなかった「みつばち」の重要性に取組みたい。そのために次年度は 7，8 年生の園芸のカリキュラムとして「みつばち」の飼育に取組み始めたい。

『サステイナブルスクールとしての活動』

①教員養成の強化　毎年受講生が増加している教員養成講座。受講希望者の動機から、「自分自身のために、もう一度シュタイナー教育の観点に基づいた学びを通して、自分と世界を見つめ直したい」、という思いを感じている。「大人の自己教育の場の提供」としても、更に充実した教員養成講座を運営していきたい。

②他のシュタイナー学校と連携した活動の充実。　2019 年度はシュタイナー教育 100 周年にあたり、日本中のシュタイナー学校が協働するプロジェクトを計画している。同時に、始まったばかりの連携型の教員養成を通して、より多くの一般の方への「学び」の機会の提供、教員の確保に努力していきたい。

学校情報

学校名	NPO 法人　東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校	TEL	（042）523-7112
児童・生徒数	182 名	E-MAIL	teacher@tokyokenji-steiner.jp
住所	東京都立川市柴崎町 6-20-37	HP	http://www.tokyokenji-steiner.jp

特定非営利活動法人

横浜シュタイナー学園

KEYWORD

その他（暗示的な機関包括型アプローチによるオールラウンドESD）

お話と芸術に充たされた、子どもたちの本質に応える学び

ホールスクールアプローチ・デザインシート

ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

ESD重点校形成事業の申請時に、横浜シュタイナー学園は日々変容する、いのちをもった学び舎だと書きました。

ESDでは「自己変容」が大切だと言われます。持続可能な社会を実現するためには教育自体が変わることが必要であり、日々成長し続ける子どもたちを健康に育むためには、教育そのものが命をもち、成長し続ける営みであることが理想です。わたしたちは創立以来、この考えに共鳴する大人たちが力をあわせ、何もないところから新しい学舎と教育実践をつくりあげてきました。その生きたプロセスに宿る教育のダイナミズムを大切にし、発展の段階ごとにやってくる課題に適切に応えながら、生きた教育をつくり続けています。

サステイナブルスクールとして活動したこの３年間も、まさに変容と成長の日々だったと言えます。ホールスクールアプローチが生かされたというよりも、学園のそのようなあり方が、自ずとホールスクールアプローチとなっているのだとあらためて実感した3年間でした。
その間に、教育面の成熟と発展はもちろんですが、運営面でも横浜市内の廃校利用事業者公募への応募チャレンジがあり、他校と連携した教員養成講座が始まり、社会環境の変化に対応するために学童保育運営の検討や試行が始まり、未整備な法的立場の改善を目指して国の調査に協力し他のフリースクールとの連携を深める等、たくさんの出来事がありました。それらは自分たちの成熟度や課題を確認する好機となりましたが、そのような機会をつくることができたのもこの学園が教職員と保護者がともにつくる学校だからです。それが私たちのホールスクールアプローチなのだと思います。
教育面では、5期の卒業生を送り出した今、9年間の学びの循環がしっかり根付いてきたと感じます。学期毎に全体が集まっておこなう月例祭（学びの発表会）では、どのクラスも個性的でありながらも、歌、動き、言葉を通して表現されるものから、この学園の学びがしっかり定着している姿を見ることができます。そしてその個性が全体として美しいハーモニーを生み出していることは、参観者が異口同音に口にすることです。
それらを生み出している教育実践の内容については、サステイナブルスクール報告書として制作した冊子『こんなにいっぱい　日常に生かし　育てる　ESD』に詳しく報告しています。サステイナブルスクールの皆様にお届けする予定ですので、お手にとっていただければ嬉しいです。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

カリキュラムと教授法に深く浸透したESDと、同じ教員集団が時間をかけて織り上げている教育文化の豊かさ、熱心に学びをサポートし見守ってくださる保護者のあたたかな輪がポイントです。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校
毎学期の月例祭（写真）で見る各クラスの様子、個々の子どもたちの姿から、学園の学びに安定感と成熟が顕著に感じられるようになりました。その具体的な報告はサステイナブルスクール報告書にまとめましたが、この安定感と成熟を次の成長のステージにしっかりつなげていきたいと考えています。

教員
日々の活動を明示的にESDやSDGsとつなげて意識するシーンはまだ多くはありませんが、ユネスコスクールを担当している教員は明確に意識して、他校との交流にも積極的に関わっています。

児童生徒
低学年から中学年にかけての子どもたちは、子ども本来の感性や生活習慣が全体として保たれています。学ぶ意欲は高いです。７年生から９年生までの飛躍的な成長は見る者を驚かせるほどで、学びの深さ、芸術的な感性、行動力、社会性の４本の柱がしっかりと育まれています。個性的でありながら、どのクラスもどの子どもも素晴らしい成長を見せるのは、わたしたちのESDが"Learning to be"を大切にしているからだと思います。

次年度以降の活動

横浜シュタイナー学園のサステイナブルスクール事業の総まとめとして、約70ページのサステイナブルスクール活動報告書『こんなにいっぱい　日常に生かし　育てる　ESD』を制作しました。この冊子を、サステイナブルスクール24校をはじめとする多様な方々に、学園のESDをお伝えしたり交流したりするためにお届けしたいと考えています。関心をお寄せ下さった方々と交流し、研修する機会をもち、サステイナブルスクールをサステイナブルなコミュニティにしていくことに貢献します。
また、2019年はヴァルドルフ／シュタイナー教育の誕生100周年の年でもあり、ESDやSDGsの視点も含めて次の100年の展望をもつ年にしたいと考えています。

学校情報

学校名	特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園	TEL	（045）922-3107
児童・生徒数	115名	E-MAIL	jimu@yokohama-steiner.jp
住所	神奈川県横浜市緑区霧が丘3-1-20	HP	https://yokohama-steiner.jp/ http://www.unesco-school.mext. go.jp/?key=mu22vqhg2

特定非営利活動法人

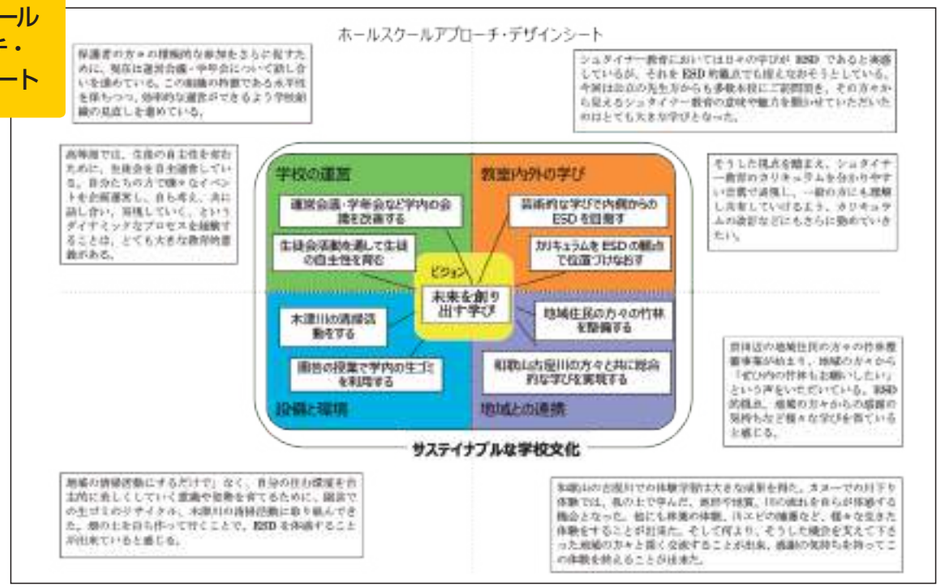
京田辺シュタイナー学校

KEYWORD

地域文化　生物多様性　環境学習
エネルギー　国際理解

体験を通した芸術的な学びにより　内面からの ESD 実現をめざします。

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

本校では日々の授業自体が芸術的、体験的で ESD 的であるといえる。そして、そうした日々の授業実践の流れの中で実施される 6・8 年での研修旅行、9 年から 11 年での農業実習や鉄打ち実習等様々な実習、竹林整備事業でも、体感を通して自らの住む地域や日本の文化・風土について、その地域の方々から豊かに学び、その地域の方々とつながってきた。

そうした教育実践の集大成が 12 年生（高校 3 年生）での卒業プロジェクトである。これは高等部の最終学年で、それぞれの生徒が自分の決めたテーマで研究や製作活動を、11 年生夏から約 1 年半をかけて完成させ、その報告を学校の生徒や保護者等に向けておこなうものである。今までも生徒の数だけテーマがあり、まさに多様な分野・領域に広がっている。

本年度のテーマを例に取り上げれば、「古墳時代の甲冑を復元する」「オペラ」「ギター」「映画の翻訳　吹き替え製作」「トリック」「ルアーフィッシングと環境」「言葉」「蒸気機関の製作」「作詞作曲　歌」「絵画制作」「言語・数学・音楽」「伝統文化の継承を考える」「折り紙で作る幾何構造」等、それぞれの視点から地域や環境の問題、芸術領域につながっていくものである。

「伝統文化の継承を考える」をテーマに卒業プロジェクトに取組んできた生徒は、台湾やベトナムの少数民族の方々のもとを訪れ、その歴史を聞かせていただき、伝統工芸に実際に触れたりした。日本では香川県を訪れ、地域に続いている「讃岐手毬」を地元の方から実際に学び、地域の実情を聞いたりした。そうして歴史や伝統の継承について体感したことをレポートにし、実際に糸を染めることから始めて手毬を作り、最後には学校の保護者たちを対象にした「手毬作り教室」を開催した。彼女なりの「伝統文化の継承」である。

こうした活動を外部の方から見て評価してもらうべく、この 3 年間いろいろな大学の教授をお招きして、その作品を見てもらい、生徒たちの発表を聞いて頂き、それぞれの方々から感想や改善点等をご教授いただき意見交換を重ねてきた。そうして続けられてきた卒業プロジェクトは文字通り多種多様で、豊かなものとなった。さらにはこうして卒業プロジェクトを共有することで、私たち教員や保護者等多くの人たちが、生徒を通して「ESD の本質につながる体験」を共有することが出来た、と感じる。まさに「生きた ESD の学び」を、学校を挙げて実践してきたとも言えるのである。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

1 年生から 12 年生（高校 3 年生）までが、一つのクラスで一貫して本校で学んでいる。12 年もの年月をかけて、教員と保護者が協力しながら学校を運営し、大切に「私たちの子ども」を育んでいる。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

本校は NPO 法人で、もともと保護者と教員が協力しあい、学校運営の全般について意見交換しながら進めてきている。この 3 年間でより民主的な運営方法や、より多くの人たちにご協力いただけるよう、会議や組織に改善を加えてきた。

教員

横浜市立永田台小学校をはじめとし、様々な公立学校と交流を進めてきた。そこでおこなわれてきた授業見学や意見交換は、多くの視点を得、自分たちの活動を見直す機会となった。教員も ESD 的視点で、シュタイナー教育を見直す機会を得てきた。

児童生徒

シュタイナー教育の実践そのものが ESD 的であるので、この 3 年間学校でおこなわれてきた教育と、その集大成とも言うべき卒業プロジェクトが豊かに続いてきたこと自体が、この学校の生徒が豊かに成長を重ねてきたことを物語っている。

大人が学校を民主的に運営していることで、高等部の生徒たちも民主的に話し合いを進められる等、この学校に関わる多くの大人たちの姿勢から、子どもたちが学んでいることも多い。

次年度以降の活動

引き続き、ESD や SDGs の視点で、シュタイナー教育を見直していく。特に教育カリキュラムや学校運営等について、この 3 年間に引き続き実践を重ね、改善を進めていきたいと考える。

この 3 年間で実践してきた「学校や校種を超えた交流」も、今後も進めていきたいテーマ領域である。色々な学校の先生方と交流を進めつつ、授業実践の共有等さらに一歩進んだ交流も、可能な範囲で進めていきたいと考える。

学校情報

学校名	NPO 法人京田辺シュタイナー学校	TEL	（0774）64-3158
児童・生徒数	265 名	E-MAIL	ktsgkyoin@gmail.com
住所	京都府京田辺市興戸南鉾立 94	HP	http://ktsg.jp/

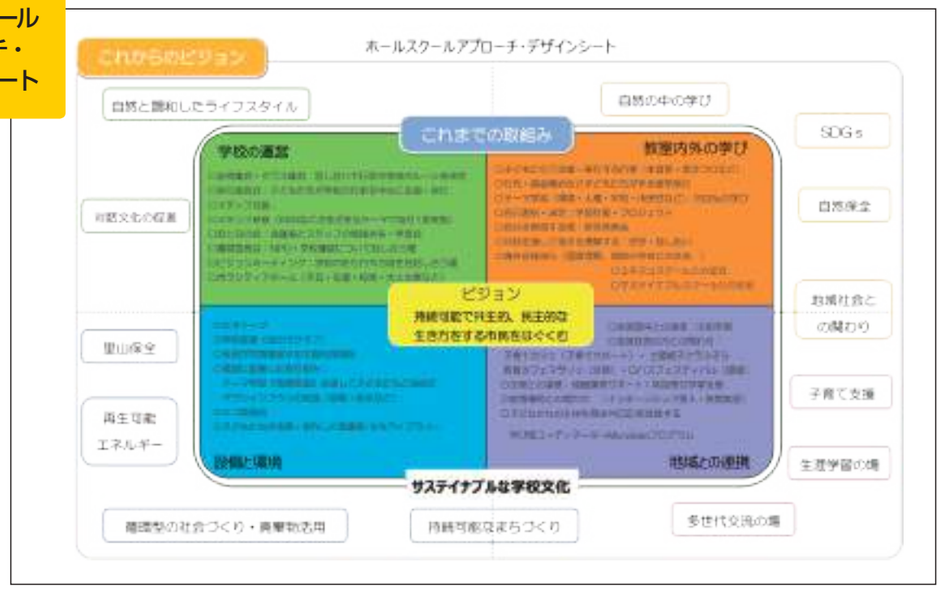
認定 NPO 法人

箕面こどもの森学園

民主的で持続可能な社会をになう市民を育む学校

KEYWORD
環境学習　防災学習
国際理解学習　その他

ホールスクールアプローチ・デザインシート



ホールスクールアプローチを生かした3年目の活動

「民主的に生きる市民を育む」を学校理念として、ESD を地球市民に育つための活動と捉え、ESD の実践を通して社会や世界の課題を知り、自ら行動を起こす力の育成を目標としている。小学部の「テーマ」学習、中学部の「ワールドオリエンテーション」学習の時間を中心に、学期ごとに環境・人権・平和・市民性のカテゴリーからスタッフが提案するテーマに沿って、ホールスクールアプローチ的に学習に取組んでいる。

平成 30 年度は、1 学期に「めぐる生命」、2 学期は「食べものの旅」のテーマで学習した。

【1 学期「めぐる生命」】

生命の大切さを実感する、いろんな生命があること、生命の不思議さに気付く、ということを目標にして学習に取組んだ。「知る・体験する」段階として、地域の団体や保護者の協力を受けて以下のことをおこなった。

- 空から蝶　代表　道端慶太さんのお話を聞く
- 人と自然の博物館の見学
- 犬猫の孤児院ハッピーハウスの見学
- 保護者 (新生児科医) のお話を聞く
- 保護者 (新生児の母親) のお話を聞く、新生児に触れる

その後、それぞれの個人テーマを設定して調べ学習、まとめ、発表会をおこなった。それぞれのテーマは「IPS 細胞」「種」「絶滅危惧種」「殺処分」「外来種」「人工知能」「生物の誕生と進化」「遺伝子組換え」「地球温暖化の影響を受けている野生生物」「動物虐待」「人間が世界に与える影響」等があった。

【2 学期「食べものの旅」】

食を「経済・消費」の面から考える、食べものがどこからきてどこへ行くのかを知り、普段食べているものへの意識が変わることを目標にして取組んだ。1 学期と同様に以下のことをおこなった。

- 中央卸売市場 (大阪) の見学
- カップヌードルミュージアムの見学
- よつ葉農産の見学
- 舞洲ゴミ処理場の見学
- 株式会社ココウェル代表　水井裕さんのお話を聞く

その後、それぞれの個人テーマを設定して調べ学習、まとめ、発表会をおこなった。それぞれのテーマは「チョコレートができるまで」「ミツバチがいなくなったら」「和牛と国産牛の違い」「オーガニック食品」「食料自給率」「コンビニの食」「日本の牧場・飼育問題」「食を通した人とのつながり」「加工食品」「食品ロスと冷凍」「プラスチック」等があった。

特に中学生の発表会の際には、小学 1 年生～ 6 年生までの興味のある子どもたちが参加したり、一般の市民の方も何名か見学に来てくださったりして、質疑応答等で議論が深まる場面もあった。

3年間で気づいた自校のキラリポイント！

学校のスタッフ (教員) だけでなく、保護者や NPO 法人の運営委員とも一緒にビジョンを共有し、子ども (生徒) たちと共に、学校に関わる様々なステークホルダーが自分自身や社会を見つめながら学び続け、持続可能な未来への実践を重ねている。

3年間の変容（TRANSFORMATION）

学校

ビジョンを言葉にすることに取組むことができ、学校のスタッフ・保護者・NPO 法人の運営委員で協力して目に見える形にすることができた。今までおこなってきた活動について言語化して自覚・共有することができ、それを学校外にも発信していくことができるようになった。また、教育を通して持続可能なまちづくりに貢献していくという新たなビジョンを明確にすることができた。

教員

テーマ学習において、ESD 的な観点から学びを再構築することができるようになった。他校の活動を参考にしたり、国内外の研修に参加したり、ESD・SDGs の理解を深める自己研鑽をおこなうことができた。また、気候変動プロジェクトに取組み、世界の学校と実践交流ができたため、より視野が広がった。サステイナブルスクールの教員として実践を伝えていくという姿勢を持つことができるようになった。

児童生徒

持続可能な地球環境のために自分たちにどのようなことができるのかを考え、行動する姿勢が見られるようになった。気候変動プロジェクトに取組んだ際に全校生徒で会議をしてアクションを具体的に考え、エコ委員会を作った。その後活動が少なかった期間があったが、また子どもたちの方から改めて活動したいという提案が出た。また、ESD 活動の積み重ねで、協働して学び、対話を通して課題を解決していく姿勢が、より強くなった。

次年度以降の活動

学校内の活動としては、次年度は学期ごとにそれぞれ「メディアリテラシー」「差別」「宇宙」をキーワードにしたテーマ学習をおこない、小学生から中学生までが共通したテーマで ESD 的な視点をもとに学習していく。それ以降も「平和・環境・人権・市民性」を中心にしたテーマを設定していく。スタッフが事前にテーマについて学び、話し合って深めた上で子どもたちとの学びを作り、広くシェアするために発表会を公開したり、成果冊子を作成・配布したりしていく。サステイナブルスクールとしては、サステイナブルな学びのネットワークを活用し、他校の ESD 実践をサポートする。また、希望があれば個人の実践者もサポートする。必要に応じて他のサステイナブルスクールにも声をかけて連携する。更に、学校の未来につながるように、地域とのつながりを強めていく。いくつかの自治体の集まりに参加し、それぞれの課題を共有して協働できる形を探っていく。

学校情報

学校名	認定 NPO 法人 箕面こどもの森学園	TEL	（072）735-7676
児童・生徒数	55 名（小学部・中学部）	E-MAIL	info@kodomono-mori.com
住所	大阪府箕面市小野原西 6-15-31	HP	http://kodomono-mori.com/

学校全体で気候変動と向き合う

～ UNESCO ホールスクールアプローチ実践プロジェクトの現場から

学校全体で地球規模の課題に取組もう－ 2016 年 9 月、「気候変動をテーマとしたホールスクールアプローチ実践プロジェクト」がユネスコスクール・ネットワーク*のフラッグシッププロジェクトとして始動しました。これまでに、3 つの地域にまたがる世界 25 カ国で約 250 のユネスコスクールが参加しています。このプロジェクトでは、「スクールガバナンス」「指導と学習」「設備と運営」「地域との連携」の 4 つの領域を羅針盤に参加校それぞれが独自の活動を実施し、学校全体が気候変動を意識した教育機関へと変容することを目指してきました。ここでは、日本から参加した 10 校の取組の一部をご紹介します。

＊正式名称は UNESCO Associated Schools Network (ASPnet)

「スクールガバナンス」School Governance

箕面こどもの森学園では、学校全体で取組めることを考えるため、『地球レスキューこどもの森会議』が開催され、家庭や地域団体とともに協力しながらおこなう基盤作りがなされました。また、この活動がきっかけとなり、気候変動について継続して取組む『エコ委員会』が生まれました。

横浜シュタイナー学園では、プロジェクトへの参加をきっかけに、気候変動に対する保護者を含めた学内の意識調査に乗り出しました。学校全体の意識傾向を明らかにすることで、学校が共同体として潜在的に持っているエコロジカルな特筆を明らかにし、それをさらに発展強化させていく方向を探求することが出発点となりました。

「指導と学習」Teaching and Learning

横浜市立永田台小学校では、『キートスのりんごの木』という言葉のない短編アニメーションフィルムを用いて子どもたち自身から問いを引き出し、その問いから学びを導く手法をとりました。各学年の実態に応じながら、学校全体の気候変動への意識を高めることに成功しました。

愛知県立みあい特別支援学校では、児童生徒の社会参加と保護者や地域との連携を目指し、古着のリサイクル活動をおこないました。生徒会だよりを発行して呼びかけたところ、全校児童生徒とその保護者が参加し、段ボール 6 箱分の古着が集まりました。

大牟田市立吉野小学校では「友達と地域と世界とつながろう」を合い言葉に、『つながろう集会』を年 6 回開催しました。各学年・近接学年ごとに ESD や気候変動に関する内容の交流発信をおこなったことで、子どもたちが気候変動に関する課題意識を持つようになりました。また、集会は保護者や地域の方にも公開され、学校外との連携も強化されました。

「設備と運営」Facilities and Operation

広島市立安古市高等学校では、まず教職員自らが気候変動対策に着手しました。冷暖房の設定温度を徹底管理し、生徒部活動の休養日や職員定時退校日を設けることで消費電力の削減に成功。それを「見える化」することで、生徒職員全体が更に当事者意識を持って取組むようになりました。また、光熱費が減った分、教育活動に必要なものを追加購入することができました。

大田区立大森第六中学校では、夏場の厳しい日差しを和らげ冷房の使用量を削減するため、ゴーヤのグリーンカーテンを設置しました。ゴーヤの栽培には、校庭内のミミズコンポストで作った腐葉土を使用しました。

「地域との連携」Community Partnerships

千葉県立桜が丘特別支援学校では、災害時の地域の避難所として指定されていることから「適応」**の観点からも気候変動に取組みました。近年多発する豪雨や地震等に対応する防災能力強化のため、地域と繋がり、児童生徒の実態を知ってもらう機会を持ちました。合同の避難訓練や炊き出し訓練をおこなう等、障害のある児童生徒たちがどのように動けるのか、どのように地域の方と関わっていけるのかを考える機会となりました。

** 一般的に、気候変動には「緩和」と「適応」の二つの観点から対策が取られる。

京田辺シュタイナー学校では、園芸の授業の一環として、荒れたまま放置されている地域の竹林をボランティアで整備する事業を始めました。地域との実践的な交流を進めながら、地域の問題を知り、そこから気候変動という世界規模の問題へとつなげる視点を育てることを目指しました。

名古屋国際中学校・高等学校では、地方自治体や地元企業と連携した活動を多岐にわたり実践しました。例えば、市の環境局の支援を得て、生徒自らが地域の環境調査を実施。学校周辺地域の調査結果からグローバルな環境問題を考える機会となりました。また、海岸の清掃をおこなった際には約 1 時間で何十キロものゴミを回収。ゴミの中には外国語表記のものも多く見られ、地球規模の環境問題が及ぼす影響を肌で感じました。

このプロジェクトでは、気候変動という具体的な課題を設定して取り組んだことで、一見分かりにくく抽象的なホールスクールアプローチの概念を具現化することが出来ました。学校の経営指針の中に ESD を位置づけることで気候変動に関する学びを進めやすい環境が整う、教室内外の学びで得た知識を学校生活の中で実践に移し内在化させる、地域資源を活用することで学びに深みと広がりがもたらされる－。1 年間半という限られたプロジェクト実施期間の中で蓄積された 10 校分の実践例を紡いだとき、そこに見えてきたのは、4 つの領域が有機的に繋がり循環する学びの姿でした。目指すべき方向性を再確認させてくれた、そんなプロジェクトであったように感じます。

このプロジェクトでは、ユネスコスクールの取組らしく、単にそれぞれの学校で気候変動に取組むだけでなく、そのアイデアを国外の参加校と共有し合うことにも主眼がおかれました。本プロジェクトのコーディネーションを担当した ACCU に加え、日本からも延べ 4 校がビデオ会議に参加し、デンマーク、レバノン、インドネシア、モンテネグロ、ウガンダの学校との学び合いが実現しました。

名古屋国際の電話会議の様子

私たちにとっての サステイナブルスクール

～サステイナブルミーティングで語られたこと～

これからもサステイナブルスクール24校が集まることのできる場を創っていきたいと、有志4名が名古屋に集まった。事業終了後もサステイナブルスクールがつながっていくためのアイデアを出す中で、サステイナブルスクールの在り方そのものにつながる深い議論が交わされた。サステイナブルスクールの未来を語ることは、ESDやホールスクールアプローチの未来を語ること。3年間サステイナブルスクールとして活動してきたからこそ語られた、私たちが目指す持続可能な発展のための学びとは…？

サステイナブルミーティングはどのようにして立ち上がったか

第二回サステイナブルスクール研修会（2018 年 12 月 1 日開催）にて本事業の集大成を迎えるにあたり、来年度以降、プログラムとして今までの活動を継続・発展させていくためにはどうしたらよいか。そして、学校の活動を深めていくプロセスにサステイナブルスクール 24 校のネットワークを、どのように活かしていくことができるのか考えた。

「多種多様な学校が集まるサステイナブルスクールのネットワークを、これからも大切に育んでいきたい。」

具体的には、「24 校各校が活動報告できる場を創る」「エリア支部の活動とエリア代表が参加する全体会を設ける」「各サステイナブルスクールの取組や作成した教材を英語で海外に発信する」「サステイナブルスクールの活動を進める勇気づけになるようなアンケートをみんなで・私たちで作る」等のアイデアが共有された。このように、次へのアクションについて具体的に考えを巡らす中で、会場には不思議な「連帯感」が湧き出てくるような、そんな空気が流れていた。

研修会の翌日、参加者の一人からサステイブルスクール全校に対して「もう一度集まって、これからのことを話したい」という趣旨のメールが発信された。そのメールに感化されるように他の 3 名からも同様のメールが届き、第一回サステイナブルミーティングが開催されることが決定した。「またお会いできることを楽しみにしています！」という言葉で締めくくられた 12 月の研修会から、わずか 1 か月後に、こうした再会の場がやってくるとは…。このサステイナブルミーティングは、研修会に漂っていたあの心地よい空気感と、何よりも参加者のスピード感のある第一歩によって実現したことなのだと思う。

サステイナブルミーティングでは、参加者の 3 年間の歩みと思いを語る時間から始まり、その思いを活かし実現させていくために、どのようなアクションを起こすことができるか話し合った。アクションを考えアイデアが紡がれる中で、同時にサステイナブルスクールとして ESD を推進してきたからこそ感じていた重要な気づきのようなものが端々で生まれていた。今回はその気づきを分かち合いながら、みなさんとともに持続可能な発展の学びについて思いを巡らせることができればと思う。

私たちにとっての3年間、今だからこそ語られた思い

私たちにとって、サステイナブルスクールに参加した意味は何だったのだろうか。主に、以下のような気づきがあった。サステイナブルスクールとして 3 年間活動したことで得たことは何か。

「3 年間の活動を通して今までの学校内の ESD の取組が意味づけされ、活動がより充実した。」
「これまでの同じ校種の中で語られ『自己完結』していた取組を、他の校種に広げる努力をすることで、自分たちが大切にしてきたことを捉えなおし、活動を言語化することができた。」
「様々な校種、考えの違う学校が交流する面白さを知った。また、同じ事業で活動できていることで支えられている気がした。」
「生徒間の交流を通じて、子どもたちがあっという間に打ち解ける様子、変容を見ることができた。」
「24 校の参加者と語り合うことで、学校の役割が多文化教育を作っていく土台となり、価値観をはぐくむことであると再認識することができた。」
「持続可能な社会の実現に向けて、24 校がどれだけ本気を出して価値変容をおこす努力をするのか、そこに挑戦する 3 年間であった。（気候変動の視点で見ると）この流れを、今後も継続していくことは地球にとっても大変重要なことであると実感している。」

一方で、やり残したと感じることはあるか。

「サステイナブルスクール以外の学校に、この取組を派生させていくことができなかった。」
「" 重点校 " としての自覚が芽生えた一方、どのように関わればよいかと悩む時があった。」
「研修会が " 点 " であるように感じ、" 線 " としてつながっていかない感覚がありもどかしかった。」
「サステイナブルスクールが自主的に集まる機会や研修会をホストする機会があってもよかったのではないか。自立し、お互いが高め合うチャンスを作りたかった。」

サステイナブルスクール同士の出会いは、２つのきっかけを生み出したように思う。1 つ目は、他校を鏡として自校の個性を自覚するきっかけとなったということだ。個性を自覚する中で、自校の特長をより伸ばしていきたいという思いはもちろんのこと、何とかこの個性（特長）を " 言語化 " し、他校にも広めたいという思いが芽生えた。2 つ目は、個性や特長の理解と同時に、共通性を認知するきっかけになったということだ。「異質なもの」と出会うことで当然カルチャーショックを受ける。それら異質なものから学びとりながら、同時に、その中でも変わらない普遍的なものを浮き彫りにすることができる。この普遍的で共通に大切だと感じていることを分かち合うことは、教員にとって強力なエンパワメントとなる。

今回の場においても日々学びの場に身を置く人同士感じる多様な考えが言語化され、多様性から相互に学びながら、大切にしたい普遍的なことが分かち合われていった。特に「サステイナブルスクール観」や、その中の「学びの場」の在り方、そして学びを経た変容に対する「評価」について興味深い議論が交わされた。3 年間では成し得なかったことを、次に成し遂げるための重要なヒントが多く含まれている。

私たちの捉える「サステイナブルスクール」

教員も子どもたちも、サステイナブルスクールとして活動を展開していくことに誇りを感じる一方で、「サステイナブルスクール」とは何か、どんな学校なのか、共通意識をもち自信をもって活動していきたいという気持ちが高まってきたと言う。考えてみれば、サステイナブルスクールを定義することはあえて避けてきた気がする。それは、各学校が独自のサステイナブルスクール観を築き上げ、活動に反映させていくことがよいと感じていたからだ。しかし、3 年という月日を経てサステイナブルスクールという言葉が定着していく中で、そこに集う仲間たちが「サステイナブルスクール」をどのように捉えているか、その中に普遍性はあるのか考えるようになったのは必然的なことである。

この事業において、サステイナブルスクールとは、ホールスクールアプローチを用いて ESD を推進する学校のことを意味した。学校の一部、例えば一教科、領域で ESD を展開するのではなく、学校の運営や設備も含めて全体的に持続可能な状態を目指す学校のことである。その上で、SDGs を掲げ活動することの重要性について語られた。2030 年までの世界目標である SDGs は、文字通り Sustainability (持続可能性) を理念としており、ESD を推進する学校にとって、時にはわかりやすい指標になったり、時には「教材」になったりと、広く活用されるようになった。サステイナブルスクールでも、当然のように SDGs を導入したカリキュラムが展開されている。その上で、サステイナブルスクールは多様な地域、多様な学校が交流しながら学び合っているという特徴がある。

「これらの点の学びが、地域に根付き、線となっていく可能性は十分にある。」

自校の取組として完結するのではなく、他校へもその取組を発信していく役割を担っているのがサステイナブルスクールなのではないか。そのような中で、同様に ESD 推進校として位置づけられているユネスコスクールとの違いについて議論する場面もあった。

「ユネスコスクールとサステイナブルスクール、どのように違うのか迷うこともあった。」

サステイナブルスクール 24 校の内、21 校がユネスコスクールにも加盟している。ユネスコスクールは「ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校」である。さらに日本国内では、ユネスコスクールが ESD 推進拠点として位置づけられおり、積極的な ESD の取組、発信が求められている。それでは、サステイナブルスクールの役割とは一体何だろうか。昨今 SDGs に沿った、持続可能な社会の担い手を育むことが重要になり、国内の教育の在り方も大きく変わろうとしている。その中で、日常的に ESD 推進に励むユネスコスクールやサステイナブルスクールは更に存在感を増すことになるだろう。その中でも特に、サステイナブルスクールは学校全体で Sustainability（持続可能性）に焦点を当てた学校運営、学習活動に取組んでいる重点校であると言える。

「サステイナブルスクールで育つ子どもたちは、Sustainability(持続可能性) とは何か言語化できる / しようと努力する子どもたちがいる。」
「地球の持続可能性について真剣に考え、行動にうつしている子どもが育つことは社会にとっても重要なことなのである。」

サステイナブルスクールには、自分たちが生きていきたい社会を創造し、行動に移していく子どもたちがいる。そしてその取組を励まし、一番の伴走者であり続ける教員がいる。その点からもサステイナブルスクールは、今後も特に Sustainability（持続可能性）について積極的に探求し続けていくことが必要になってくるだろう。

サステイナブルスクールだから創ることのできる「学びの場」

各校の点の学びをどのように線、面として広げていくことができるだろうか。

「すべての子どもが参加できる、各校の特色を活かしたライブ授業を実施してみたい。」
「生徒の反応を直接見たい。自分の授業で他校の子どもたちがどのような反応をするかも気になる。」

多様な地域、学校種が集まるサステイナブルスクールの教員だからこそ思いつく斬新でわくわくするアイデアが出されていく。サステイナブルスクールというネットワークを活かし、どのような学びの場を創っていくことができるのか。具体的な話が進む中で、本事業と並行して進んできた「気候変動プロジェクト（pp.58-59）」に参加して得た気づきが共有された。

「気候変動等 SDGs のゴールを、１つの研究テーマとした協働学習を進めていくことが面白かった。気候変動を共通テーマとして、学びの場を創っていくのはどうだろうか。」

その一方で、仮に共通のテーマでそれぞれ異なった形の学びをスタートさせたとしても、最終的な結論（向かう先）は同じだったということがよくあるという経験から、むしろその気づきこそが持続可能性を考える上で重要なのではないかという意見も出された。

SDGs の 17 の目標は非常に包括的な目標であるため、どれか１つだけを取り出して解決していこうとすることは本末転倒である。気候変動プロジェクトでの経験を通して得た「気候変動」という１つの目標に注目することの大切さと、その一方で「気候変動」だけに注目し学習を進めることへの違和感は、一見矛盾するようにも思えるが実はそうではない。
Rockström and Sukhdev,(2017) は、SDGs をウェディングケーキのように表し、持続可能な社会、経済の達成には安定した地球（自然資本）が在ることが欠かせないという１つの考え方を示した。気候変動も、当然ながらこの自然資本に該当する。気候変動という地球（自然資本）に関わる課題に向き合うことから、社会、経済目標の達成を考えてみることは、SDGs を取り上げる上で重要な視点となりえるだろう。

出所）Azote Images for Stockholm Resilience Centre

第一回サステイナブルスクールミーティングに集まったメンバー（名五十音順：敬称略）：左から、中村真理子（京田辺シュタイナー学校）、佐野純（算面こどもの森学園）、黒宮祥男（名古屋国際中学校･高等学校）、石原靖久（横浜シュタイナー学園）、篠田真穂（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター）**オンラインでの参加**：画面左から、吉田敦彦（大阪府立大学）、市瀬智紀（宮城教育大学）

また、学びの場を創る上で、教材づくりの必要性についても言及された。

「SDGs のゴールを共通する研究テーマとし、教材を作成する。授業本を作成すると他校にも参考になるのではないか。」

それでは、SDGs に関する教材を創る上で重要な観点は何か。

「まずは、サステイナブル（持続可能）な状態とは何か皆で探求し、それを的確に測ることのできる評価を作成する。その評価において正の結果を示した場合、何が要因となって正の結果を生み出したのかを探り、その要因をツールとして他校へ発信し拡大させていくという一つ一つのプロセスを踏みながら教材づくりをするとよいのではないか。」

サステイナブルスクールの多くは、すでに Sustainability（持続可能性）について探求している。このネットワークを活用し、教材づくりに挑戦することは SDGs を達成していく上での大きなインパクトとなり得ると感じる。

いま私たちに必要な評価

「『あなたは自然とのつながりを感じますか？』という質問に対してサステイナブルスクールの子どもたちは積極的な反応を示すと思う。」

サステイナブルスクールとして歩んできた３年間を通して、子どもたちがどのように変化したのか知りたいと思っている教員は少なくないようだ。また、多様な学校が集まるこのネットワークで変容を測る評価軸を考えていきたいという思いも共有された。このように、子どもたちへの評価だけでなく、カリキュラムや教員への評価についても探求が進んだ。

「カリキュラムの中で、SDGs の各項目の意味が掘り下げられているかを見ていくのも重要であると思う。例えば「地域活性化」が取り上げられるが、その背景には、アフリカの気候変動に伴う、欧州への難民問題がある等、どこまで探求ができているかという差を見ていく意味はある。」

このように評価が必要であると自覚しながらも、「正直評価疲れも起こしているよね」と皆で静かに頷く。このように評価は、時間も手間もかかるが、外部へその効果を明示するという意味で役立つという面と同時に、教員のモチベーションを高める、自己開発につながるという面もある。教員をターゲットとした評価の在り方にも通じる考え方であるが、「子どもたちへの評価であっても、教員の「変えようかな…？」というマインドを刺激する可能性もある」らしい。どちらにせよ、現状を把握するための評価作りも重要であるが、この評価を用いることでなぜか元気になる、役に立つという、そんな評価を私たちは作りたいのではないか。

何かが起こりそうな気がすると、サステイナブルスクールの先生方にお会いするとそんなパワーを感じる。サステイナブルスクールのネットワークは、強固でなくてもよいと思う。こうやって、語りたいときに語り合うことができる。動きたいときに仲間を募ることができる。そんなゆるやかなネットワークがあるというだけで心強い。ホールスクールアプローチを校内で推進していく中で、課題にぶつかることも多い。だからこそ、ホールインスティテューションでつながり、支え合うことは大変重要なことである。

（レポーター：ACCU 教育協力部　篠田真穂）

引用）Stockholm Resilience Center (2017)
http://www.stockholmresilience.org/research/research-news/2016-06-14-how-food-connects-all-the-sdgs.html（2018 年 2 月 7 日現在）

【寄稿】

持続可能な社会に向けて育まれるべき萌芽の誕生

聖心女子大学　教授、サステイナブルスクール事業推進委員会委員長　永田 佳之

2016 年 5 月に「ESD 重点校形成事業」を始めるための会議が聖心女子大学で開かれた。今ふり返ると、これが「サステイナブルスクール」のネットワーク誕生の第一歩であった。この名を冠した教育事業はブレア政権下のイギリスで見られたが、おそらく日本では初めてであろう。

当初は、第 2 期教育振興基本計画に明記されたユネスコスクールの質向上のために優良実践校の形成を視野に入れて構想された事業であった。ところが、事業推進委員の皆さんの意見が反映され、「優良」さのユニークな基準、すなわちビジョン（Vision）・継続性（Continuity）・統合（Integration）・前に踏み出す（Empowerment）・刷新性（Innovation）・協働（Collaboration）・変容（Transformation）・汎用性（Scalable/Replicable）の 8 つの観点が設けられ、本事業の方向性が定められた。これらはユネスコ／日本 ESD 賞の選考基準を参考に作成されたものであるが、ACCU が ESD を推進するにあたり開発した HOPE 評価[1]の 'DNA' も受け継いでいる。

以上は構想段階での話だが、実際に事業を展開してみると、山あり谷ありであった。しかし、管理職の異動等、さまざまな既存の教育制度の制約の中、事業終了後も継がれるべき成果も多く生まれたことは特記に値する。

事業が軌道に乗り始めた頃、国際的にも影響力のあるイギリスの ESD 実践校であるアシュレイ・スクール校長、R・ダンさんを招へいし、「ハーモニー原則[2]」を学べたことは幸いであった。そこで得た知見は今後も 24 校を中心に広めていただきたいが、すでに京田辺シュタイナー学校の教師が自校の実践とハーモニー原則を照らし合わせた論考[3]を和文・英文でまとめており、他校もぜひ参考にしてほしい。

特別支援学校やオルタナティブな現場を含む 24 校には、相互交流を通して日常では出会わない世界観や実践にふれ、変容の種が植えられた教師たちもいる。自校とは異なる実践に触発された目黒区立五本木小学校や横浜市立永田台小学校の教師たちに起きたのは持続可能な社会につながる価値変容であるだけに丁寧に育まれていくべき萌芽であると言えよう。

ユネスコの気候変動教育で共有されたホールスクール手法から学びつつ開発されたデザインシートは徐々にではあるが影響力をもたらしている。気仙沼市立面瀬小学校の校長先生（当時）は異動先の学校でデザインシートを活用してホールスクールの学校づくりに取組んでおられる。

さらに頼もしいのは、ユネスコの「モデル」に従うのではなく、学校ごとに独自のデザインシートが最終回の研修で共有されていたことだ。東京賢治シュタイナー学校や杉並区立西田小学校、名古屋国際中学校・高等学校で独自に作成されたデザインはいずれも垢ぬけした表現であり、学校文化が持続可能性の方へとシフトしつつあることが示唆されている。今後も教職員で対話を重ねて練り上げたシートを糧に、より魅力的な学校づくりを続けてほしい。

3 年間で共有された知見は国際的に見ても希少である。ESD は初等教育段階では優良実践が多く見られるが、中等教育以後に課題が多いという指摘は国際会議等で繰り返されてきた。しかし、この事業では大田区立大森第六中学校や福山市立福山中・高等学校のように国際的な課題にも応える中等教育レベルの素晴らしい実践の成果も共有されている。

GAP の最終年を前に公表された「ESD の将来に関するポジション・ペーパー」を読むにつけ、2030 年までの教育を見通すにあたりユネスコや各国のユネスコ国内委員会にはやや戸惑いが見られるようにも受けとめられる。この 3 年間で蓄えられた知見を結晶化し、国際的にも共有していくことが求められていると言えよう。

紙幅の関係で全ての学校に言及できないのは心苦しい限りであるが、24 校それぞれのユニークな物語が生まれた 3 年間であった。箕面こどもの森学園の通信には「3 年間という期間は重点校からその他のユネスコスクールへのインパクトを生み出すには短すぎるものでした。（…）本当の役割はこれからです」と書かれている。24 校すべての今後に期待したい。

1 ESDの評価方法として開発され、ESDに大切な4つの性質Holistic、Ownership-based、Participatory/in Partnership、Empoweringの頭文字からなる。詳細はウェブサイト参照（http://www.accu.or.jp/esd/jp/hope/index.html）。
2 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（2017）「キラリ発進！サステイナブルスクール～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～」pp.66-80に記載。ユネスコスクール公式ウェブサイト（http://www.unesco-school.mext.go.jp/）内サステイナブルスクール特設サイトよりダウンロード可能。
3 関連の記事としてNPO法人京田辺シュタイナー学校（2017）「プラネッツ Planets89 2017.12秋冬」を参照。ユネスコスクール公式ウェブサイト（http://www.unesco-school.mext.go.jp/）内サステイナブルスクール特設サイトよりダウンロード可能。

【寄稿】

ホールスクールアプローチの深化に貢献したサステイナブルスクール事業

宮城教育大学　教授　市瀬 智紀

3 年間のサステイナブルスクール事業では、当初からグローバルアクションプログラムでいうところの WIA(Whole Institution Approach) を前面に掲げ、ホールスクールアプローチに取組んできた。今回はその成果について 4 つの側面から記述してみたい。

1．デザインシートによってホールスクールアプローチを可視化し・継承することができた。

サステイナブルスクールの各学校を訪問すると、どこでも校長室や職員室にデザインシートが貼ってあるのを目にすることができた。管理職や教員が交代したとしても、学校の取組がデザインシートで可視化されているので、学校の取組を引き継ぐことができた。気仙沼市では、校長先生が面瀬小学校から他の小学校に異動しても、異動先でまたデザインシートを活用して学校づくりをされている。デザインシートをロゴとして活用するアイデアが生まれてくる等、デザインシートを活用した取組がサステイナブルスクールの文化となりつつある。

2．ESD/SDGsカレンダーについて活用方法や課題が検討された。

杉並区立西田小学校は、サステイナブルスクール事業について振り返るなかで「ESD カレンダーは関連させることで効果が生まれる（時間的にも効率的・狙いを達成できる）」「ESD カレンダーを実現するためには、学年のチーム力が必要である。そして、ESD カレンダーは他教科と関連させることの意図を考えて作成するものである」と述べている。このように、サステイナブルスクール事業では、ESD カレンダーを作成することのみならず、その意義や課題についても明らかにすることができた。また、福山市立福山中・高等学校が、SDGs を取り入れたカリキュラムマップを作製する等、SDGs を意識したカレンダーの活用がこの 3 年間で広まっていた。さらに、大田区立大森第六中学校は小中学校連携で SDGs カレンダー作る等、ESD/SDGs カレンダーを活用したカリキュラムマネジメントが、サステイナブルスクールが中心となり周辺の学校にも広められる展開が見られた。

3．対話によるESDへの理解がホールスクールアプローチ実現の鍵であることがわかった。

サステイナブルスクールは対話して合意形成する文化が基盤となっている。管理職が交代した場合、教職員との対話がないとサステイナブルスクールを継続することが困難である。ESD による対話は、教職員のみならず生徒や保護者にも向けられる。例えば、ESD に関連するニュースや記事を校内放送で生徒に伝達している学校や、学校の便りを通じて ESD の魅力を保護者に届ける努力している学校も複数あった。このように ESD の理解を教職員や児童生徒、保護者に広める努力をすることが、ホールスクールアプローチによる学校運営を支える結果になっている。

4．ホールエリアでの取組がホールスクールを確かなものにすることが明らかになった。

新居浜市では新居浜市版 SDGs の冊子を作成し、ESD 活動支援センターや地域の NPO が惣開小学校や新居浜南高校の活動を支援している。大牟田市は、「ユネスコスクールのまち」として大牟田市内で研修会やシンポジウムを開催し、管理職や教員が代わってもそれが ESD 推進の障害にならないようなシステムが作り上げられている。このように、ホールエリア（シティ）というべき取組が、ホールスクールで活動をおこなう学校の活動を確固たるものにしている。

上述のようにホールスクールアプローチの手法を深めることができたのは、特別支援学校と公立学校、シュタイナースクールと公立学校、公立学校と私立学校等の学校種や学年、そして東西南北の地域を超えた学びの場が実現されたからである。このような学びと実践の場を提供していただけた平成 28・29 年度「ESD 重点校形成事業」平成 30 年度「ESD の深化による地域の SDGs 推進事業」とそれを展開してくださった ACCU に、心から御礼申し上げます。

付記：
UNESCO(2005)「ESD は領域を超え、ホリスティックに、そして参加型で行われるとともに、「持続可能な開発について学ぶためには、分断された教科ではなく、すべてのカリキュラムで実践されるべきである」（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (2005) International Implementation Scheme for the United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014), Paris, UNESCO）
UNECE(2005) が「ESD が公教育においてホールスクールアプローチで実践されることを推奨するにあたって、児童生徒と教員、管理職、そのほかの職員に加えて保護者も、持続可能な開発の原則を導入すべきである」（United Nations Economic Commission for Europe (2005) UNECE Strategy for Education for Sustainable Development, Vilnius, UNECE）

【寄稿】

事業推進委員の見つめた 24校３年間の変容

福岡教育大学　教授　石丸 哲史

３年間サステイナブルスクールに向かってご尽力いただきありがとうございました。各学校の取組と参画いただきました皆様の大きな発展に身近に接することができ幸いでした。

小学校では、持続可能性に関する内容について難解な部分があるにもかかわらず、うまく子どもの活動でカバーしていただきました。教育課程にESDのエッセンスを首尾良く反映していただきました。教科の壁が薄い小学校だからホールスクールに向かって一丸となっていただけたのではないでしょうか。また、小学校は校区との結びつきが強固であり、このことが地域との連携を容易にしています。地域住民のサポートを生かして持続可能性に向かうことができたのは小学校の強みといえましょう。

中学校になると、地域との関係性が強くなり、サステナブルな地域と学校との方向性が一致し、生徒の地域参画が顕著にみられました。発達段階からみて持続不可能な地域課題の理解が難しくないために、持続可能な地域づくりに向かう生徒の成果が顕著であり、結果として地域住民の学校への見方も変わってきたことでしょう。

そして、高等学校では、その活動に広さ・深さ・重みを感じました。持続不可能な状況をしっかりと把握し、持続可能な未来に向かう姿勢から、持続可能な社会の創り手を明確に想起できました。各学校の専門性が発揮され、サステイナブルスクールとして独自性が顕著でした。シビックプライドの醸成等キャリア教育との関係を重視しながら、しかもローカルに傾斜しつつも決してグローバルな姿勢が欠如しているわけではありません。グローカルの視点を前面に押し出し、気候変動や国際理解等グローバルな局面とともに、地域の再生に挑む具体的なローカル活動もしっかりと看取できました。

3年間24校がサステイナブルスクールとしてご活動いただきましたが、なによりも大きな成果であったことは、特別支援学校とシュタイナーの理念に基づいた学校園のご参加ではないでしょうか。共生社会に主体的に生きる主役を育てる教育の実践に少しでも地平を拓くことができたのではないかと思います。また、公立学校と私立学校との交流もさまざまな価値と効果の共有ができ有意義でした。これらの学校園が参画し持続可能性を追求する同志が集い、さまざまな学校園が交流することによる効果が大きかったといえるでしょう。

いよいよ、来年度から小学校を皮切りに新学習指導要領が完全実施されます。「持続可能な社会の創り手」を育むために教育課程がスタートします。昨今、SDGsが広く認知されるようになってきました。学校、行政、企業等多くの主体がSDGsをめざすようになり大変喜ばしいことではありますが、一部に「後出しSDGs」と思えるような現象も散見されます。たとえば、まったくSDGsを意識していなかった学校目標や研究課題が、たまたまSDGsのいくつかのゴールと類似しているので、本校はSDGsに向かっていますというようなものです。自らの目標がSDGsと符合しているという意義付け、価値付けには貢献するでしょうが、目標とは最初に設定するものであり、そしてそこに向かう方途を明らかにして進むべきものです。そういう意味では「SDGsを意識し、ESDを組み立てた。今後は、さらに具体的な行動に結びつけられるような指導計画を策定する。」という学校があり、さすがサステイナブルスクールだと思いました。

学校にはSDGsに関する広報主体や媒体機関としてではなく、SDGsに向かう実施主体として活躍していただきたいものです。

サステイナブルスクールは、ESDをやっていることが美徳ではなく、SDGsに向かって、ESDの成果を出していることが美徳です。

24校のようなサステナブルなスクールが2030年には十倍いや百倍の2,400校くらいに拡大することを祈念します。

【寄稿】

サステイナブルスクール 24校と歩んだ３年間

横浜市立日枝小学校　校長　住田昌治

事業推進委員ではありましたが、最初の２年間は参加校の校長という立場でしたから、皆さんと一緒に研修やワークショップに参加させていただいていました。その中でも、何度か発表の機会をいただき、サステイナブルスクールは何を目指し、どのような取組をしてくのか提案し、話し合ってきました。

当初は、ESD 推進のモデルとなる学校をつくって、そのプランを多くの学校に広げ、浸透させていくという考えで進もうとしていました。しかし、それぞれの学校には、その背景となる地域や家庭、学校の風土があり、一律にモデルを示したところで、十分に役立てることは難しいと考えていました。そこで、ピラミッド型の取組ではなく、共に成長し、それぞれの地域の ESD 推進校とやり取りしながら進めていくサークル型を提案しました。

サステイナブルスクールのあり方

３年間を通して、行きつ戻りつのところはありましたが、サステイナブルスクールへの思いと交流やネットワーク化という形でのマインドセットが形成されてきたと言えるでしょう。その間、公立学校では、校長や教職員の異動による引き継ぎの問題や校内での協力体制の問題がクローズアップされました。なかなか解決に至らない難しい問題ではありましたが、事業推進委員や ACCU の助言や直接的なかかわりによって改善に向かう様相はうかがえました。

ホールスクールアプローチの導入は、イメージがしにくかったと思いますが、デザインシートを書くことによって、自校の取組が見える化され、さらに他校との交流やワークショップによって、ブラッシュアップされてきたことは大きな成果と言えると思います。デザインシートは、ESD を推進するすべての学校で活用できる優れたツールとしてさらに拡大することを期待しています。

24 校の変容を考えると、正直言って一律に語れるものではありません。それぞれの学校と対話をする中で、価値づけられたり、課題を見出したりできると思います。私は、３校を訪問し、校長先生と対談し、アウトプットを誘う問いを発して、関係を築くお手伝いをしました。学校間の交流を推進するためにも、校内での土台作りは欠かせません。私は、校長の立場で参加していましたので、意識的に各学校の関係性に目を向けてきました。

３年間の事業が終わりを迎える段階において、自主的なネットワークの動きが出てきたことは喜ばしいことであり、さらに交流を深めながら ESD の深化が進むことと思います。また、それぞれの学校が、その地域の ESD 実践校を巻き込みながらホールスクールアプローチで元気な学校づくりが行われることで、持続可能な学校文化が根付いていくことと思います。

【寄稿】

サステイナブルスクールの3年間をReflection（見直し/見通し）する

自由学園　最高学部　特任教授　成田喜一郎

はじめに

Reflection は、しばしば「振り返り」や「省察（反省的考察）」と訳される。ここでは「見直し / 見通し」と訳しておきたい。なぜならば、従来の訳では、構成される漢字の意味に引き摺られ、ともすると過去に向かう思考を誘導しかねないからである。Reflection という語は、反射・反響・反映という意味であり、過去に学習や経験したことを自らの「鏡」を通してメタ認知し、未来に向けて反射・反響・反映させる行為であると言える。そうした意味を踏まえて、Reflection は単に「振り返り」や「省察（反省的考察）」という訳ではなく、新たに「見直し / 見通し」と訳し援用していきたい。また、その成果についても、その「よさ」と「問い」という切り口で描いてみることにしたい。

１「よさ」を抽出する

サステイナブルスクールの5校/24校（大森六中、西田小、八名川小、永田台小、東京賢治シュタイナー学校）やユネスコスクール（東京都）、ユネスコスクールのない地域（所沢市）の実践研究や校内研修に関わらせていただいたが、それらの実践を併せみた際の、特にサステイナブルスクールネットワークにみられる「よさ」は、以下の通りである。

① 教科・領域間、学年間、学校と地域・諸機関間、他国の児童生徒・教職員間のつながりを視野に入れたESD/GAP/SDGsカリキュラムをデザインし、またその実践過程を「足跡カリキュラム」として言語化・可視化してきた学校が出てきている。

② ESDカリキュラムにおいて、つながりへの気づき、視点を持った深い問い直し/見通しを位置付けるべくデザイン/リデザインを試みる先生方や学校が増えてきている。

③ 多くの人事異動があったにも関わらず、今ここにいるこの教職員でESD実践カリキュラムをリデザインしようとしている点にも注目したい。ルーチン化している校内研修を改善すべく、新しいあり方にチャレンジする学校が出現してきた。

④ 教職員の意図やプランを超えて、児童・生徒たちが主体的にESDの学びを創造しはじめている点は、持続可能な社会の創り手が育つ素地ができはじめている。

２「問い」を引き出す

① SDGsの登場によって、具体的な目標とコンテツとの連関が進んだが、SDGs17の目標を機械的にラベリングする傾向はなかっただろうか。

② GAPの後継、ESD for 2030を前に、今一度立ち止まって、ESDカリキュラム間をつなぐ「深くて永く続く問い（Essential Questions）」を見つけられるか。

③ フォーマル教育、いわゆる学校教育ではない「ノンフォーマル教育」の実践やコンテンツに学ぶことはできるだろうか。例えば、旧奈良少年刑務所「社会性涵養プログラム」、日本科学未来館「Geo-Scope地球を探る」コンテンツの援用等。

結びにかえて

ESD/GAP/SDG は、これまでの「教育」の「当たり前」を問い直すことになるだろう。子ども観・教師観、学校観を見直し / 見通すことなしに、どんなに SDGs17 の開発目標につながる学習・体験に対して、主体的・対話的で深い学びを呼び起こし、引き出せるのか。

そして、今以上に、未来は持続可能か不可能か正解は見えず、複雑性・不確実性に包まれた社会になるが、それでも「短気に事実や理由を求めることなく、不確かさ、不可解さがある状態に留まれる」力（Negative capability；ジョン・キーツ ,1817）が求められるだろう。

参考
・寮美千子（2018）『あふれでたのはやさしさだった：奈良少年刑務所　絵本と詩の教室』西日本出版
・日本Geo-Scope (ジオ・スコープ)地球を探る：
https://itunes.apple.com/jp/book/id1088303900
・所沢市立教育センター「ESD調査研究協議会」編（2018）『ＥＳＤのすゝめ：所沢市版ＥＳＤ実践の手引き』：
http://www.tokorozawa-stm.ed.jp/center/kenkyuu/H29%20ESD.pdf

【寄稿】

多様な違いと出会い、対話した深い学び

大阪府立大学　副学長　吉田敦彦

■３年間を通したサステイナブルスクールの変容

まず、３年間を通した２４校の変容について、「ホールスクールアプローチ・デザインシート」をはじめ各校からのレポートや研修会での様子を見渡して、特に気づいたことを３点、記してみたい。

１）ホールスクールアプローチ：４領域を視野に入れた俯瞰力。

「教室内外の学び」のみならず、「学校の運営」も「設備・環境」も「地域との連携」も、デザインシートの４領域の全てに活動を書き込むことで、できている領域、見落としがちになっている領域を意識化した。学校のあり方そのものがどこを切っても全体としてサステイナブルなスタイルに向かっているか、それを俯瞰する視座を得ることができた。

２）ビジョンの明確化：再方向付け、変容を導く意識の焦点化

ほとんどの学校が、その中核になる、すべての活動がそこを源として発し、そこに集約されていくようなビジョンを、あらためて学校ぐるみで話し合い、共有するプロセスをもつことができた。従来の学校目標や成果指標よりも、より大きな方向性をもった理念（自分たちがどうありたいか、という理想）を、自らの言葉でイメージをもって描き出した。

３）多様な違いと対話する深い学び：気づきの言語化と共有化

違いと出会うことで、自明視していた意義や活動に気づき、新鮮な学びを深めることができた。異なる学校段階の国公私立学校、支援学校も NPO 立教育機関も含んだ多様な校種の２４校が、当初は戸惑いもありながら、研修会で顔を合わせるたびに密度の濃い対話を重ね、あるいは相互に学校を訪問し合い、理解を深めていった。

■本事業の意義と課題

１）ESD１０年の反省を踏まえて国際的に提唱された「ホールスクールアプローチ」の、その重要性について３年がかりで共有が進んだことは、他のユネスコスクールやESDに取組む学校に比して「サステイナブルスクール」の特長である。それを可視化して俯瞰するツールである「デザインシート」は汎用性もあり、今後、この成果を他の学校に広めていくミッションを、この事業は持っているのではないか。

２）ESDのカリキュラムやすぐに使える授業法や教材を開発するのであれば、「同じ地域の同じ学校種」で集まった方が、課題や背景を同じくするので具体的な話ができる。この24校は、逆に、「違う地域の違う学校種」が集まった。そこに、困難もあったが、ユニークな意義と可能性があった。違いを超えて24校が、共通に取組めることは何か。それを探究し、浮かび上がったのが、（実践の具体的な内容よりも）実践を捉えなおす「見方・考え方」、ビジョンや方向付け、俯瞰力やメタ認知力だった。まさに新学習指導要領が求める「主体的に多様な人々と協働する力」や「対話的で深い学び」に通じるものであり、同質集団の内部ではなく、そこから外へ出て「異質な他者と出会い、対話する」ことで深い学びが生まれた。

３）「問題は、それが起こったときと同じ意識レベルでは解けない」（アインシュタイン）。持続不可能な社会を生み出した問題は、その問題を生み出した意識レベル（ものの見方・考え方・価値観）が変わらなければ解けない類のものだろう。この事業は、このレベルの「変容」や「深い学び」にチャレンジしようとした。違いと対話するのは、言うは易くおこなうは難い。そのような変容は、具体性に欠けるので成果として直ぐには実感しにくい。途中、個々バラバラになってしまうリスクもある冒険だった。にもかかわらず、3年間を終えようとするとき、この研修のもつ他では代えがたい意義を感じ、膝を突き合わす場の継続を望む声が続いたのは、画期的なことだと思う。この萌芽を大切に醸成していけば、サステイナブルなスクール文化をもつ学校群を生み出していくことができるかもしれない。従来型の事業の枠を超えようとしてきた本事業のユニークな意義だと考える。

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）について

人をつなぎ、知をはぐくみ、未来をひらく
ACCU は日本と世界の人々と共に学びの輪を広げます

ACCU はユネスコの基本方針に沿ってアジア太平洋地域と日本国内で教育と文化の分野で活動しています。2015 年からは、ユネスコが実施する GAP のキーパートナーとして各方面と連携したプロジェクトの更なる発展に寄与しています。
ACCU は主に、「教育協力事業」「国際教育交流事業」「模擬国連推進事業」「文化遺産保護協力事業（奈良）」の 4 つの柱のもとさまざまなプログラムを行っています。

教育協力事業

若者主体の持続可能な コミュニティ開発プロジェクト

アジア地域の若者 (15 ～ 35 歳) が、みずから持続可能な未来に向けてコミュニティ開発に取組むプロジェクトです。ACCU はアジア地域の NGO と連携し、これまでにパキスタン、インドネシア、フィリピン、インドにおいて活動を展開してきました。女子のためのノンフォーマル教育施設が設立されたり、村の道路が整備されお年寄りに優しい村づくりが実現したりする等、目に見える様々な成果が報告されています。

2019 年には過去 4 年間にわたる各国での実践の集大成として、若者がいかに地域の発展を思い描き行動に移してきたのか、その活動を通じて彼ら彼女ら自身が、あるいは地域がどのように変容してきたのかを記録したストーリーブック「Youth Changes the World」が作成されます。

SMILE Asia プロジェクト

SMILE Asia プロジェクトは ACCU がアジアで推進する母子保健をテーマにした識字教育支援プロジェクトです。女性の関心の高い母子保健をテーマにし、家庭でも子どもと一緒に活用できる教材を提供することで、クラスを卒業した後も日常生活で、識字能力を使い続ける環境を現地の団体と一緒に作っています。これまでにアジアの 7 か国で展開してきました。

2008 年から活動しているカンボジアの場合、基礎教育を受ける機会を奪われ、基本的な読み書きを習得できないまま成人となった人々が 240 万人存在し、そのうちの 70%が女性だといわれています。2017 年度はプノンペン市より 45 ｋｍほど離れた場所に位置するコンポンスプー州の 5 つの村において、75 名の成人学習者を対象に活動を実施。現地をモニタリング訪問したり、参加者からプロジェクトに関するヒアリングをしたりする等、現地のニーズをより把握できるよう努めました。2017 年までに 55 の村で 1,220 人以上の女性が識字を身につけ、自信を高めています。

このプロジェクトはチャリティーコンサートを開催して支援くださる凸版印刷株式会社はじめ、皆さまからのご寄附により行っています。

国際教育交流事業

日本と海外の教職員や生徒間の相互理解と友好の促進を目指して文部科学省委託により初等中等教職員国際交流事業により派遣・招へいプログラムを実施しています。各プログラムの期間は 1 週間程度で、「参加・交流によって学びを深め、多文化・異文化を理解し、参加者自身が変容していく」という目的のもと、参加者は様々な地域の学校や教育・文化施設等を訪問し、現地の教職員や児童・生徒と交流します。

また、プログラム参加後の交流についても、マッチングや相談等のサポートを行っています。

海外教職員招へいプログラム対象国：中国、韓国、タイ、インド
日本教職員派遣プログラム対象国：中国、韓国

模擬国連推進事業

支援企業からのご寄附を得て、次世代の国際人 / グローバルなリーダーを育成することを目的にグローバル・クラスルーム日本委員会と協力し、高校模擬国連事業を実施しています。2012 年度から高校模擬国連事務局として全日本大会を共催するほか、同大会での優秀チームを国連本部で開催される国際大会へ派遣しています。2017 年度からは、更に裾野を広げるべく、高校教員らと協力し、主に初心者を対象とした模擬国連大会を開催しています。

文化遺産保護協力事業

文化遺産の調査・研究の中心である奈良に文化遺産保護協力事務所（ACCU 奈良事務所）を設置し、国際機関と連携して文化遺産保護や文化財の保存修復を担う人材育成のための研修や国際会議を開催しています。また、県内の高校への出前授業や一般市民向けのセミナーも行っています。

ACCU に関する広報物

ACCU ニュース

年 3 回発行されている ACCU の機関紙です。ACCU が携わる ESD 関連事業はもちろん、国際教育協力や人物交流等に関する様々な事業情報を発信しています。
http://www.accu.or.jp/jp/accunews/2018.html

ACCU ホームページはこちら！

http://www.accu.or.jp/jp/index.html
Facebook へのいいね！もお願いします。
https://www.facebook.com/accu.or.jp/?fref=ts

キラリ発進！サステイナブルスクール
～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～Vol.3

発行日　2019年2月21日
発行　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
東京都千代田区神田神保町1-32-7F出版クラブビル
TEL：03-5577-2852　FAX: 03-5577-2854
URL：https://www.accu.or.jp/jp/index.html
Email：webmaster@accu.or.jp
翻訳・デザイン・印刷・製本　株式会社メディア総合研究所

©ユネスコ・アジア文化センター2019
ISBN978-4-909607-01-0
Printed in Japan
禁無断転載・複製

本冊子は平成 30 年度ユネスコ活動費補助金グローバル人材の
育成に向けた ESD の推進事業によって制作されています。